
魔法少女の騎士

アンリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女の騎士

【Nコード】

N5600S

【作者名】

アンリ

【あらすじ】

願いを叶え、少女達は戦いの淵に身を落としていく…。
人には知られぬ裏の世界で…。
己の力と仲間を信じ、魔法を揮い続ける。
辛く孤独な戦いに、傷付き倒れる少女。
そんな孤独な少女を救うのは一人の騎士だった…。

プロローグ 奇跡の果て

どこまでも伸びる白と黒の世界

無機質な白黒のコンクリートで建設されたような建物がどこまでも
続いている空間

動物や草木といった生命を感じることもすらできない虚無

端から端までが見通すことのできないほどの長い廊下が続いている

そんな不安をただただ煽るようなモノクロな世界を一人の少女が駆
け回っていた

肩口まで伸びたピンクの髪を赤いリボンで左右に一つずつ房を作っ
ている、150センチにも満たない体躯の少女

この世界で唯一色を帯びた少女、鹿目まどかは自身の通う中学校の
学生服姿で、先の見えないモノクロな廊下をまっすぐ走り続けていた
口から吐き出される息は短く、額にはうっすらと汗をかくも走り続
けることをやめない

廊下には少女の息遣いと足音のみが響き渡っていた

どこまでも続く無限の回廊、そんな印象を抱かせる変わり映えのし
ない景色

しかし無限に続く廊下など存在するはずがなく、まっすぐに走り続
けた先にまどかは開けた広間のような場所にたどりついた

正面にはさらに奥まで続く廊下

左右には今まで見ることでできなかった階段が、これまた白黒のチ
ェック柄で存在していた

まどかはふと階段の先を見つめる

するとそこには『EXIT』と書かれた非常口を示す誘導灯が、か
細い光を照らしながらぼつんと存在した

まどかはそれに導かれるように階段を一段一段と登っていく
階段をゆっくりと登りきるとそこには白黒のストライプ柄をした一
つの扉が用意されていた

あまりにも無機質な世界から早く逃げ出たく、まどかはその扉を
何の考えもなく押し開けていく
扉の先からこぼれる弱い光
そんなか細すぎる光ですらまどかにとっては不安を解消する一つの
要因となりえた

…しかし扉の先にはまどかの想像していた世界は広がってはいなか
った

扉を開けると強い突風がまどかの体に吹き付けられ、まどかの体温
を奪っていく

扉を開けた先は雲にも届きそうなほどの樹高である葉の枯れた大樹
の頂上で、そこから周りの世界を俯瞰することができた

そこは白黒の世界に黄土色などの暗い色を付加させただけの世界
以前は多くのサラリーマンが勤務していただろう高層ビルが地盤沈
下したかのように濁った海の中に沈み、海面には元々ビルに張られ
ていた窓ガラスの破片が浮かんでいた
道路という道路は濁った海により全て海面下に沈降し、見下ろせる
景色はビルとどこまでも続く海だけだった

しかしまどかにとって目を奪われたものは別にある
周りのビルなど目でもないほど高くそびえ立つ大樹
そこに立つまどかが見上げなければ見ることができない空に奇妙な
物体が浮かんでいた

太陽の光によりシルエツトしか見ることはできないが、それはノア
の箱舟を意識させるような形をしていて、ひどく不安を駆られる世
界においてなぜか神々しさを感じてしまう

奇妙な物体の周りを取り囲むように建物の残骸が宙を舞っている
まどかにはそれがまるで神様を崇高する信者の群れのように見えた
呆気に取られたただぼんやりとその光景を見ていると、生命を感じる
ことのできなかつた世界に一つの動きをまどかの眼はとらえた

「あっ!？」

赤の鉄格子が設けられた宙に浮くコンクリートの欠片
そこにまどかが望んでいた命の鼓動を一つ見つけた
黒の長い髪に黒のカチューシャ、白色と紫色の2色で構成された制服と黒のストッキングで身を包み、左手にはfrisbeeのような石板を装着している

少女はまどかに一瞥をくれることもなく、ノアの箱舟のような浮遊する奇妙な物体に向かって文字通り飛び出した

少女と奇妙な物体との距離は簡単に見積もっても2キロ以上

しかし少女はその距離を異常なまでの跳躍力を駆使してぐんぐんと縮めていく

まっすぐと物体へと近づいていく少女

あと数瞬もすれば物体の元までたどり着けるであろう勢いを少女の体は纏っていた

しかしその跳躍を邪魔するかのように物体の周りに浮遊していたビルの残骸が少女めがけて押しつぶすように迫ってくる

突然のことに少女は反応することができず、そのままビルの下敷きに…

と思いきや少女はビルを咄嗟に回避し再び物体に向けて空を蹴って進もうとする

それをさせまいと物体から赤と紫の光が螺旋状に絡み合った光線を少女に放つ

結果少女は物体に近づくことができず、ビルと光線の波状攻撃になすすべもなくその身をゆだねていった

「ひどい…」

まどかはあまりに現実離れた光景に一言つぶやくことしかできない

「しかたないよ…」

するとそのまどかの微かな声に返事をするかのような声突如響くいままでまどかと少女二人だけしか存在しなかった世界にまた一つ声が生まれた

声の聞こえたほうを向くとそこには赤い眼をしたぬいぐるみのような白い生物が突如現れていた

「彼女一人では荷が重すぎた…でも彼女も覚悟の上だろう…」

少年のようなどこか明るさを感じる声

うつすらと笑みを浮かべたまま淡々と話すその生物を、まどかはなぜかすんなりと受け入れてしまった

「そんな…あんまりだよ！こんなのもってないよ！」

すでにあきらめてしまったかのような声を出す白い生物

まどかはその諦めを否定したいがために大声でこの光景を否定するしかし状況はそんなことでは変わるはずもなく、少女は次々と光線を浴びては吹き飛ばされていく

まどかはそんな変わることをない残酷な光景に膝折り、目にはうつすらと涙を浮かべてしまう

「あきらめたらそれまでだ。」

そんなまどかに声をかけるのは白い生物

「でも…君なら運命を変えられる。」

その声色は相変わらずボーイッシュで、しかしながら先ほどまでは違うように希望を含ませるような物言いをする白い生物
消して表情を変えることなく、ただ尻尾を左右に振りながら淡々と

「避けようのない滅びや、嘆きを、全て君が覆せばいい。そのため
の力が君には備わっているんだから。」

それは平凡に暮らしてきた自分には理解しがたい言葉
何をやっても中途半端でこれといった長所が無いまどかにとっては
考えられない言葉だった

「…本当なの！？私なんかでも本当に何かできるの！？こんな結末
を変えられるの！？」

「もちろんさ！…だから僕と契約して、魔法少女になってよ！」

まどかは独り戦う少女を考える

そしてこの穢れた世界を見る

そして…まどかは悲惨な運命に嘆くことしかしていなかった自身を
変えるため、一歩踏み出した

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「どうしてこんなことに…」

男は声を絞り出しながら自身の拳を地面に打ち付けた

コンクリートに打ち付けられたこぶしはあっけなく柔な肌を血でにじませ、コンクリートの形を変えることもできずただ存在を続ける膝を突き頭を垂らす男の眼前には卵の形をした白の宝石が地面に突き刺さるように落ちていた

「彼女は君を守るために魔女になったんだ。」

「キユウベえ…」

「彼女は立派に戦ったよ。あんなにまで魔力を消費した状態で2人の魔女を相手にしたのだから。」

赤い眼をした白い肌の生物：キユウベえはあまり興味を感じていないかのようにけだるげな声を出す

7

その声にも感じることはなく男は立ち上がる。

170センチを優に超えるその体軀は中学生らしさを感じさせることとはなく、むしろ大学生といっても通用するのではないかと思うほど筋肉の付きが良い。

がっしりとした体形、長く細すぎない脚、そして整った顔立ち

全てにおいて中学生の平均を凌駕している少年の姿が真夜中の路地裏にあった

「君はこれからどうするの?」

「俺は…どうしたらいいんだろっな…」

「君は何かしたいことないの?」

「俺は彼女と生きることだけで幸せだったから…」

「君は僕のことを憎い?」

「…そんなことはないさ…」

土砂降りの雨に打たれ、男と白の生物は向かい合って話を続ける
全てを無くしてしまっただかのような表情を浮かべる男と…
表情をまったく変えることなく淡々と話す白の生物

「それじゃあ僕についてこないかい？」

「…それもいいかもしれないな…」

「それじゃあ決まりだ。えっと…」

「…その名前で呼ばないでくれ。それは彼女だけのものだ。」

「そう。それはごめんね。…それじゃあ何て呼べばいい？」

「それ以外なら好きに呼んでくれ…この際だから原型が分からなくなるような名前に変えてもらった方が助かる…」

「そっか…それじゃあ今日から君は『瀬津そつま』だ。よろしくね、そつま。」

「瀬津そつま…か。ああ、よろしく頼む、キュウベえ。」

両者が手を取り合ったと同時に土砂降りの雨が小雨に、そして霧雨へと変わっていく

男と白の生物は並んで歩き始める

この日一人の男の運命はいびつに曲げられた

プロローグ 奇跡の果て

プロローグ 奇跡の果て（後書き）

アニメにハマり、つい書いてしまいました。

よろしければ暇潰しにでも使ってください！

第1話 転校生

左右を木に囲まれたクリーム色のコンクリートタイルで舗装された歩道。

その道は一つの建物に向かって木を避けるようにくねくねと伸びていて、その建物に用のない人には無用の産物。

しかしながらその道は平日の朝、夕方に限り混雑を見せる歩道である。

センター街から幾分か離れた所にこの歩道へと入る分岐点がある。

その分岐点に建てられた看板を見れば、その理由はだれしもが納得できるものだろう。

『 市立見滝原中学校 』

その道はとある中学校へと続くだけの一本道。

朝は登校する生徒であふれ、夕方になると下校する生徒であふれる。それ以外は閑散としたもので、せいぜい見滝原中学の広大な土地に住むタヌキが右の林から左の林へと横断するくらいしか使われることはない。

そんな登下校時以外の時間帯は人の気配の感じさせない朝の通学路に一つの影が存在した。

影の正体はどうやら遅刻してきた男子学生であり、少年は見滝原中学に向かって全速力で走っている。

300mほどの長い歩道をわずか40秒で抜けた少年の前に、見滝原中学校の校門が迫る。

しかし登校時間はすでに過ぎていて、各クラスが朝のホームルームを始めている時間だ。

正門は固く閉ざされていて、正門の前に一人の体育教師が仁王立ちしていた。

登校時間を過ぎたものは体育教師から有り難いお言葉をいただき、心身ともに疲弊しきつてからではないと校舎の中に入れない、という制度がある見滝原中学。

… 実際後者は体育教師の独断と趣味によるものなのだが。

少年は固く閉ざされた校舎までの道をちらりと見ると、勢いを落とすすでに何人かの遅刻してきた生徒に有り難いお言葉を話している体育教師の前へと向かうのではなく、逆にさらに足を速め勢いをつけていく。

「おいつ！ お前も早くこっちに来い！」

校門まであと20メートルといったところで体育教師は走ってくる少年を視認し、今現在自分自身の有り難い言葉で涙を流す生徒の群れに呼び寄せようとした。

… しかし少年は見向きもせず校門に向かってまっしぐらに走り続ける。

「おつ、おいつ！ 聞いているのか!？」

少年は勢いを落とさない。

そして固く閉ざされた門まであと1メートルといったところで、少年はあるうことが高さ2メートルほどの門を超えるべく、空へと体を放り投げた。

およそ中学生とは思えないほどの跳躍力。

しかしそれでもとても人間が簡単に越えられるような高さではない。案の定少年の体は門の上部にぶつかる高さまでしか飛翔することはなく、その場にいた誰しもが少年の行為を愚かだと感じていただろう。

しかし少年はその門を超え校舎へと入って行った。

誰も目が目を瞑るような醜い光景を予想していたが、少年はいとも簡単に裏切る。

足りない高さを、門の縁を掴んで跳び箱の要領で自身の体を持ち上げ、その難攻不落の城門を突破したのだ。

そして少年は何事もなかったように校舎の中へと入っていく。

校門の前に残ったのは何が起きたのか理解のできていない複数名の生徒と、一部始終を見ていたためかあいた口がふさがらない体育教師の姿だけであった。

第1話 転校生

「今日は皆さんに大事なお話があります！ 心して聞くように！」

このクラスの担任である早乙女和子先生は、一度咳払いをすると生徒たちが静かになった時を見計らって話しを始めた。

声色に憤怒の感情が顕著に出ていて、まるで親の敵と対峙している時のような面持ちをしていた。

しかし生徒たちは怯えることなく、またか…とため息をついて静かにしている。

「目玉焼きとは半熟ですか？ それとも片焼きですか？ はいっ、中沢君！」

指示棒を最前列にいる男子生徒に指し、たいていの人には唐突すぎて意図の分からない質問をする早乙女女史。

しかしこのクラスの生徒たちにとっては日常茶飯事なことなので誰一人違和感を覚えることはない。

現に早乙女女史のクラスの生徒である鹿目まどかと美樹さやかは、また駄目だったか…と苦笑いを浮かべている。

「その通り！ どっちでもよろしい！ たかが卵の焼き加減なんかで女の魅力が決まると思うなんて大間違いです！」

生徒から空気を読んだ答えを聞くと早乙女女史はさらにヒートアップし、勢い余って指示棒を軽々と真つ二つにする。

このクラスの担任である早乙女女史は普段は優しい先生なのだが、プライベート（主に恋愛関係）で嫌なことがあるとすぐさまホームルームや授業にその話を持ってきては、クラスの生徒たちに愚痴まがいの助言を一方的に送りストレスを解消する癖があった。

今回もその癖が出てしまったためヒートアップしてしまって、生徒たちにまた一つ同情の念を送られる。

すでに何度もその光景を見た生徒たちにはなれた光景だ。

ひとしきり愚痴…ではなく助言を終え、すっきりした様子の早乙女女史。

そこには普段の早乙女女史と変わらない柔らかな笑顔が浮かんでいた。

「あと、それから今日は皆さんに転校生を紹介します。」

「…そつちが後回しかよ。」

柔らかくなった先生の言葉遣いに、美樹さやかは聞こえないよう小さな声でツッコむ。

せつかく機嫌が良くなったのにわざわざ機嫌を損ねさせるようなことをしていたら、一生転校生は紹介されなのまま今日を終えてしまう危険性をほんの少し感じ取っていたため、聞こえない程度の声でしか言うことができなかつた。

「じゃあ暁美さん。いらつしやい？」

早乙女女史の言葉を受け、一人の女子生徒が扉を開け廊下からクラスへ入ってくる。

鹿目まどかや美樹さやかの視線は、自然と転校生の方に向けられていった。

「うわっ、すげ〜美人…」

美樹さやかは転校生を見るや否や自然とそんな言葉を溢していた。キューティクルを適度に含んだ長い黒髪、すらりと伸びた四肢、凛とした顔立ち…

クラスメイトであり親友である志筑仁美も美人であると美樹さやかは考えるが、志筑仁美が欧米の人形のような可愛らしいものならば、転校生は日本人形のような繊細さを秘めているように感じていた。

そんな容姿端麗な転校生にざわめくクラスメイト。

しかし鹿目まどかだけは違う意味で転校生から目を離すことができなかつた。

「暁美ほむらです。よろしくお願いします。」

転校生…暁美ほむらは教壇の真ん中に立つと、自身を中心に起きているざわめきに一切関心を持たないで、静かにはつきりと自己紹介を始めた。

名前と挨拶だけの自己紹介：あまりにあっけのないもので、生徒たちは今日から迎え入れる転校生に拍手をすることすら一瞬忘れてしまった。

一瞬の静寂、そしてその後まばらな拍手が教室内には響き渡った。

自己紹介の際横に置いていたカバンを手に取り、暁美ほむらは前列の開いていた席へと向かう。

…まるでそこが自分の席であることを知っているかのように。

「あつ、暁美さんの席なんだけど…」

「こちらでいいんですね。」

床からせり出された機械デスク、そこに自身のカバンを置き中から授業の道具を一式取り出す。

真新しい教科書とノートは転校生にふさわしいものであったが、その態度はまるで転校生ではない。

田舎の学校からの転校生であれば、使用時以外床に収納されている機械デスクにすら戸惑いを感じてしまうものだが、暁美ほむらにはそんな様子など一切感じない。

いつものように学校に来て、いつものように席に座り、いつものように教材をカバンから机に移し替える…そんな印象であった。

「あの〜暁美さん？」

「なんででしょう？」

「えっとね…暁美さんの席は…」

「？　こちらですよね？」

何か言いにくそうな表情を浮かべる早乙女女史。
それに対し暁美ほむらも頭を傾げた。

「そこは暁美さんの席じゃなくて……」
「よっしやあ〜！ ぎりぎりセ〜フ〜！」

早乙女女史が一言一言迷いながら言葉を紡いでいたその時、再び教室の扉が盛大な音を立てながら一人の男子生徒が教室へと足を踏み入れてきた。

「おはようございます、早乙女先生！ 瀬津せつそうま、ただいま参りました！」

「…この子の席なの。」

折れた指示棒をニカツと笑う男子生徒に向けつつ、頭を抱えた早乙女女史は暁美ほむらに言葉を紡いだ。

長身瘦躯の男子生徒、瀬津そうまは悪びれた様子もなく、その整った顔立ちをほころばせてどこか嬉しそうに笑顔を向けているだけだ。

「そうま！ 転校早々遅刻か〜？」

「いやいや！ 遅刻してないから！ 体育の建部にだって捕まってないし〜！」

「どうせまた門を越えてきたんでしょ〜？」

「まだ2度目だから！ そんな常習犯みたいな言い方やめてくれ！」

瀬津そうまがクラスへ入ると、先ほどまでの異様な雰囲気はどこ吹く風で、教室の様々な場所から瀬津そうまに向けて声が飛んでくる。そして教室には大きな笑い声生まれた。

その中心はもちろん今教室に入ってきたばかりの瀬津そうまであった。

「あれっ？ えっと…もしかして席替えがあったとか？ 俺の席にすごくかわいい子が座ってるんだけど？」

「暁美さ〜ん！ そいつすぐ手を出すから気をつけてね〜！」
「初対面の人に誤解されるようなこと言っな〜！」

「またも教室のどこかから声が飛んできて、それはやはり瀬津そうまに向けたものだった。」

「そんな状況を暁美ほむらは驚愕の表情で眺めている。」

「えっと…もしかして暁美さんって転校生？」

「……………」

「あ〜？」

「…ごめんなさい。ええっ、よろしく。」

「おっ、きれいな声してるね。俺は瀬津そうま。実は俺も転校してから5日しか経ってないから、この学校のことよく知らないけどよろしくね。」

瀬津そうまは片手でカバンを背負ったまま、空いている方の手を暁美ほむらの目の前に差し出す。

差し出された手に暁美ほむらは少し戸惑いを見せるが、そっと手を差し出し軽く握る。

その反応がうれしかったのか、瀬津そうまは暁美ほむらの腕ごとぶんぶん縦に振りまわし、ひとしきり満足してからクラス後方に空いていた機械デスクの方へと歩き出す。

「かずちゃん。俺の席今日からあそこでいいでしょ？」

「早乙女先生、って呼びなさい！ 次、元彼と同じ呼び方したらただじゃすみませんからね！」

「あつちや〜、やっぱり振られたんだ〜。昨日から怪しいなあ〜とは思ってたんだけど…さやかか言ったとおりだったな。」

「ぶっ！？ ちょっとそうま！ あんたチクるんじゃないわよ！」

「瀬津君と美樹さんは後で職員室に来るように。分かりましたね？」

「そんな〜!? 私は被害者ですよ!?!」

「分・か・り・ましたね?」

「…はい。」

「…失恋したかずちゃんめっちゃ怖いんだな。また今日も一つ学習したよ。」

「…瀬津君が怒らせたんだよ?」

教室には張り付いた笑顔の早乙女女史、苦笑いを浮かべる鹿目まどか、机に突っ伏す美樹さやか、口に手を当てほほ笑む志筑仁美、何事もなかったように一番後ろの開いている席に座る瀬津そつま。

…そしてそんな光景に驚愕と戸惑いを浮かべる暁美ほむらの姿があった。

第1話 転校生（後書き）

よろしければご意見、ご感想お聞かせください！

第2話 祈り(前書き)

まだアニメ第1話です…

第2話 祈り

「不思議な雰囲気の人ですよ、暁美さん。」
「俺にしてみたら仁美も十分不思議な雰囲気を持つてると思うけどな。」

志筑仁美と瀬津そうまの視線の先には、今日転校してきたばかりの暁美ほむらがクラスメイトの女子から質問攻めを受けている光景が広がっていた。

志筑仁美が語ったように暁美ほむらはどことなく不思議な雰囲気を纏っていて、それでいて大人びた雰囲気を持っているため、転校生ということもあってかクラス中から注目を集めていた。

「それにしてもこの時期に美男美女の転校生…なんかドラマが始まりそうだな！」

「自分で美男！なんて言うてんじゃないわよ。その美男のせいで私まで先生に怒られなきゃいけないじゃない…」

「あははっ…告げ口は良くないよ、瀬津君。」

「ついぼろつと…な。まあ今回は素直に叱られにいくさ。ちょっとかずちゃんをいじめすぎたし。」

後にねちねちと説教されることに少し嫌気が差しているのか、はあ…と深いため息を吐く。

鹿目まどかと志筑仁美はため息を吐く親友二人の様子に軽く笑みを浮かべた。

第2話 祈り

鹿目まどかと美樹さやか、志筑仁美は仲良し三人組といえるほど仲が良く、常日頃から登下校を共にする中で会った。

そのため休み時間になると自然と三人が集まり、自然と輪を作って話し始める、といったことも日常茶飯事なのだが、つい先日からの様相が変わってきていた。

三人の輪の中に新たに加わったのは転校生、瀬津そうま。

いや、正確には加わることが増えた、といった方が正しいだろう。

瀬津そうまが転校してきた初日、大学生にも見間違えられるほどの整った顔立ちと高身長で引き締まった体躯の持ち主である瀬津そうまは、晁美ほむらと同様にクラスメイトから質問攻めにあっていた。そんな光景を遠くから眺めては、転校生である瀬津そうまの話を繰り広げる鹿目まどか達三人。初対面で話したこともない転校生に、自分達が想像する性格を塗りたくっていくと、自然と話は弾んだ。そんな距離を少し置いていた3人だったが…

『あれは将来ホストにでもなつて、女を誑かすタイプだね…』と美樹さやか品定めをしていた時。

瀬津そうまの将来を勝手に考えていた輪に、その本人が無理やり入ってきた。

『えっと…名前分からないけどちょっと話ししない？ なんだか楽しそうに話してるから気になっちゃったよ。』

初めは三人ともいきなり現れた瀬津そうまにいぶかしげな視線を送っていた。

勝手にだがホストに就職する、と言われた転校生に話しかけられた

のだ。
警戒するのも仕方のないことだろう。

しかしその視線はほんの数分で楽しげなものに変わり、いつの間にか三人だけの輪がクラス全体に広がりを見せていた。

もちろん鹿目まどか達が進んで三人だけの輪を作ろうとしていたわけではないし、他のクラスの子とも仲が良い。

それでも自然と集まるのは三人だけだった。

それが瀬津そうまによって簡単にクラス全体に広がる。

まるで瀬津そうまはクラスの潤滑油のような働きを見せ、転校してきてからものの3日でクラスのグループを一つにまとめる中心的な存在となり、クラスメイト全員を名前で呼ぶようになっていた。

そして瀬津そうまは休み時間になるといろいろなグループに顔を出し話をするのだが、今日に限っては鹿目まどか達のグループに入り込んでいたらしい。

「まあ転校生は嫌でも注目的になるからなあ。ほむりやも真面目そうだし今日一日は質問の受け答えで終わっちゃうかもなあ。」

「それですぐクラスに馴染めるのでしたらよろしいんですけど。」

「…うん、そうだね。」

「? まどか? 暗い顔してどうしたの? …あとほむりや、って何よ?」

鹿目まどかは話を合わせるように返事をするだけで、それはすぐさま美樹さやかに心配されるようなひどくわかりやすいものだった。美樹さやかに尋ねると少し逡巡し、何か決心したような面持ちになり一呼吸置いて口を開いた。

「鹿目まどかさん。」

「うえっ!?! はいっ!?!」

そこで急に輪の外から声をかけられたことに驚き、話そうとしていたこととはまるで違う、奇妙な返事をしてしまった。

鹿目まどかに声をかけた相手、それは噂をしていた暁美ほむらであり、四人で作られた輪の中心に君臨するように歩いてくると、鹿目まどかの目の前で立ち止まり見下すような視線を伴いながら、集中する周りの興味を気に留めず話を続ける。

「あなたがこのクラスの保健係よね？ 連れてってもらえる、保健室？」

「えっ…えっ…？」

突然の申し出に混乱する鹿目まどか。

それもその筈、その場にいた美樹さやかや志筑仁美ですら突然の転校生の割り込みに何を話していいかわからない状態に陥り、ただただ暁美ほむらを見上げるしかないというのに、当事者であり自身を臆病な性格であると認識している鹿目まどかが冷静な対応が出来る筈がなかった。

鹿目まどかはかろうじて頷き立ち上がる。

そして先に廊下へと出ていこうと歩みを始める暁美ほむらに付いて行くように、鹿目まどかも廊下へと足を進めていった。

「あつと、じゃあついでに俺も保健室の場所教えてもらってもいい？」

先ほどまで暁美ほむらに質問攻めをしていた女子も、鹿目まどかと話しをしていた美樹さやかと志筑仁美も誰一人何もアクションを起こすことなく、まるで時が止まったかのような雰囲気漂わせた中、瀬津そうまは時の流れを元に戻すように廊下へと一緒に向かう。

瀬津そうまの同伴に安どの表情を浮かべる鹿目まどかと、少しいら

ただしげな表情の暁美ほむら。

そんな暁美ほむらの様子を気にするそぶりを見せず、鹿目まどかの横に並び暁美ほむらの後に付いていくように歩き始めた。

もうすぐ授業が始まる時間であるためか、生徒たちは渋々といった表情を見せクラスへと一人また一人と戻る。やがて廊下には三人の姿しか見えなくなった。

「ほむりゃ大丈夫？ 顔色は悪くなさそうだけど、どっか痛いとか？ おぶつてこうか？」

「…」

保健室のある別棟への渡り廊下。

その中央に差し掛かった所で、瀬津そつまは俯く暁美ほむらの顔を覗き込む。

その表情は真剣そのもので、それがまた暁美ほむらを苛つかせる。

「ほむりゃ、無視しないでくれよ。」

「えつと…もしかなくても『ほむりゃ』って暁美さんのこと？」

「…ほむら、でいいわ。」

「えつ！？」

どこか困ったような声で確認する鹿目まどか。

そして瀬津そつまのことを完全に無視しながら、くるりと振り返り鹿目まどかをじっと見据える。

「あつ…えつと、ほむらちゃんのこと？」

「えっ！？ ほむりゃ、って可愛いじゃん！？」

「…」

鹿目まどかの考える通り、『ほむりゃ』とは暁美ほむらのことらしい。

しかし暁美ほむらは瀬津そうまを視界から外して、鹿目まどかにしか視線を向けていない。

その暁美ほむらの態度に一人は肩を落とし、一人は身体を震わせる。別棟へと繋がる渡り廊下。

向かい合う鹿目まどかと暁美ほむら。

そして暁美ほむらの後ろでため息を吐く瀬津そうま。

奇しくも一直線に並んだ順は、とある序列に沿った並び順となっていたのだが、その事実を知るものは誰一人いない。

「鹿目まどか。」

長い髪を掻き分け、神妙な面持ちである暁美ほむらが口を開いた。暁美ほむらの冷たく凜とした声が、静まり返った渡り廊下に響く。

「あなたは自分の人生が尊いと思う？ 家族や友達を大切にしている？」

何か探るような質問。

そんな何かを含んでいそうな問に、鹿目まどかは頭に浮かんだ言葉をそのまま口にした。

「えっ…えっと…わ…私は…大切…だよ。家族も、友達のみんなも大好きで、とつても大事な人たちだよ。」

「本当に？」

「本当だよ！ 嘘なわけないよ！」

そしていつの間にか本音を引きずり出されていた鹿目まどか。

そんな事を気にする様子もないところが、鹿目まどかの美德とも言

えた。

鹿目まどかの返答に暁美ほむらの頬が少しゆるんだ。しかしそれはすぐさま引き締まったものに戻る

「そう…もしそれが本当なら…今とは違う自分になるうだなんて絶対に思わないことね。…さもなければ全てを失うことになる。」

「えっ…」

「あなたは鹿目まどかのままいればいい。今まで通り…これからも。」

鹿目まどかの答えを待たず、暁美ほむらは振り返り別棟へと再び歩き出した。

すれ違う暁美ほむらと瀬津そつま。

通り過ぎる丁度その瞬間、暁美ほむらが鹿目まどかには聞こえないような声で呟く。

「瀬津そつま…邪魔するなら容赦しない。」

「はっ?? ちよっ、ほむりゃ?」

「…あとその呼び方はやめて。苛々する。」

暁美ほむらはそう言い残して、長い髪を翻しながら一人保健室へと向かっていった。

立ち尽くすことしかできない二人。

まだ夏に向けてこれからだというのに、渡り廊下には冬を感じさせるような冷たい空気が漂っていた。身を震わせる鹿目まどか。

「ほむりゃの奴何だったんだ?」

「分かんないよ…」

意味深な言葉をかけられた二人はそろって首を傾げる。
心当たりはない、といった表情だ。

「…それじゃあ教室に戻るか。たぶんほむりやは付いてきてほしくないんだろっし。」

「うん…そうだね。」

二人の間に流れる気まずい風。

それを作りだした元凶は今はいない。

そして二人は今来た道をなぞるように引き返すことで、場の空気から逃げていった。

第2話 祈り（後書き）

スローペースですが、着々と上げていきたいと思えます！

よろしければ感想、評価等お願いします！

第3話 利用される者

カモシカのようなすらりと伸びた脚が力強く地を駆ける。艶やかな黒髪が流れるように宙を舞う。

人形のような白く細い腕がホワイトボードに数式を書き込んでいく。時折漆黒の瞳が私を捉えて離さない。

…あれからと言うものの、鹿目まどかは暁美ほむらに目を奪われることが多くなった。

といつても転校してきてから保健室に付き添うまでの短い間と比べただが。

文武両道、才色兼備、容姿端麗：

まさに暁美ほむらのために生まれた言葉なのではないか、と考えてしまうほど、鹿目まどかにとって暁美ほむらは完璧超人のように映った。

事実転校初日にも関わらず、早乙女女史が出す高校生レベルの英文を訳し、体育では高跳び県内記録を越えてしまうほどの身体能力。昼休みには自身が作ってきたと言うお弁当を、クラスメイトに譲り大絶賛を受ける。

わざわざ暁美ほむらを一目見ようと他クラスから男子生徒が覗きに来る。

といったハイスペックっぷりを僅か一日で披露したのだ。

鹿目まどかでなくともそのように見えてしまうだろう。

それだけに渡り廊下の一件が不思議でしようがない、と感じる鹿目まどか。

そのギャップとも言える何かが、鹿目まどかを惑わせる。

それに鹿目まどかにとってはそれ以外にも、暁美ほむらを気にしてしまう理由があった。

授業中、ふと暁美ほむらを探してしまってもしょうがないだろう。

「なにそれ？」

「わけわかんないよね…」

そんな悩みが溢れた時、相談する相手がいることは鹿目まどかにとっては幸いなことだろう。

鹿目まどかは放課後になると美樹さやかと志筑仁美を誘い、センター街にあるとあるファーストフード店へと足を運び、渡り廊下の一件について相談を持ちかけた。

それに対する美樹さやかの答えが『意味不明』であったことに共感してもらえなうれしさを感じつつも、結局何も進展してないことに頭を落とし三人が陣取るテーブル席に突っ伏すことになってしまった。

「文武両道で才色兼備かと思いきや、実はサイコな電波さん!？」

くっくっ！ どこまでキャラ立てすれば気が済むんだ〜あの転校生は！ 萌えか!？ そこが萌えなのか!？」

「まどかさん。本当に暁美さんとは初対面ですか?」

志筑仁美は再度確認するようにやさしく鹿目まどかに話しかける。志筑仁美から見ても鹿目まどかに対する暁美ほむらの対応は、既知の仲であると考えられると判断したのだろう。

「うっん、常識的にはそうなんだけど〜」

「何それ？ 非常識なところで心当たりがある?？」

先ほどの発言から胸を抱くように机に突っ伏していた美樹まどかが、言葉の裏を読みそれを聞く。

そこで鹿目まどかは初めて自分の体験した夢の話に順に語り始めた。

崩壊した世界で、見知らぬ制服に身を包んだ暁美ほむらが神に挑む

夢を見たと…

その夢の中で自身が白い生物の力で魔法少女へと変身した事を…

第3話 利用される者

鹿目まどかが話す非常識な邂逅の場。

それまで一度として会った覚えのない暁美ほむらを初めて認識した場であった。

その初めて認識した人がたまたま転校生としてその日にやってきて、自己紹介の時には睨みつけられ、渡り廊下では意図が理解のできない質問をされた。

その奇怪な出来事に鹿目まどかは関連性を感じずにはいられず、自身の見た夢の細部から何かにつけて感じる暁美ほむらの視線についてまで綿密に語った

およその人がその話を信じることはなく、嘲笑するだろうことは鹿目まどか自身も分かっていた。

話しはすべて自身の夢の中の話であるし、もし自身がそんな話をされたら信じきることはできないだろう。

それでも誰かに相談せずにはいられない思いが強く、こうして親友である美樹さやかと志筑仁美に聞いてもらう機会を作ったわけだ。

「「あはははっ！！」」

…だから二人がその話を聞いて笑いだしても、顔を赤らめるだけで何の疑問も持つことはなかった。

「すげ〜！ まどかまでキャラが立ち始めたよ!？」

「ひどいよ〜！ 私真面目に悩んでるのに〜！」

「ああ〜もう決まりだわ。それもう前世の因果だわ。あんたたち時空を超えて巡り合った運命の仲間なんだわ〜！」

溢れ出す感情を押し殺すこともせず、美樹さやかは大きな笑い声を店内に響かせた。

鹿目まどかは周りの視線を受け、更に顔を赤くするもどうしたらいいかわからず、頭を下げて少しでも席の陰に隠れることが精一杯だった。

「ええ。キュウベえとの連絡はセンター街の付近で途絶えたわ。」

「そうね、とりあえずそこで待ち合わせてから挟み込むように動きましようか。」

『 『

「ええ、あなたも気をつけて。それじゃあ5分後に。」

耳に当てていた携帯電話をカバンの中にしまう。

日の光が差しこむ部屋でただ一人外を見降ろす少女は、自身のために用意していた紅茶のカップを使うことなくシンクへと運んだ。

手首に巻かれた時計をちらりと見る。

少し困った笑顔を浮かべながら、彼女は制服姿のまま再び玄関へと向かう。

帰宅してから数分で再び出かけるのだ。

それなりに億劫になってしまうのも仕方のないことだろう。

赤のパンプスを再度履き、玄関の取っ手に手をかける。

ドアを開くと同時に暗い室内に淡い光が差し込んだ。

その光を受け、少女のたなびかせる髪が金色の光を纏う。見るものを引き寄せるその金色の髪。

少女にとってそれは唯一残る家族との絆であり、絶対の自信を秘めていた。

そしてドアは閉められる。

部屋は主を無くし、再び無機質で色気のないものへと変貌した。

再び主が帰ってくるのをただ待つ。

日は傾き次第に部屋にはオレンジ色が満ちていく。

シンクに置き去られたカップとソーサー。

これが再び元の場所へと戻されるかは、主が帰ってくるまで誰にも分からない。

鹿目まどかは試聴用のヘッドホンを掛けると、中学生女性アーティストの最新曲を選択し再生する。

頭の中を駆け巡る旋律と歌声。

鹿目まどかの好みに合った曲調で、目を閉じ曲の中へと入り込んでいく。

志筑仁美が習い事により帰宅したタイミングに、美樹さやかと鹿目まどかは近くのCDショップへと足を運んでいた。

美樹さやかの幼馴染である上条恭介への差し入れを仕入れるために、美樹さやかに頼まれ付いてきていたのだ。

しかし美樹さやかが求めるクラシック音楽に疎い鹿目まどかは、アドバイスなど送れるはずもなく、自身は自身で新たなお気に入り曲の開拓、により今の時間を楽しんでいた。

現に鹿目まどかの後ろでは美樹さやかが気になった曲を思うままに選曲をし、プレゼントとして買うに値するかどうかを一人で検討していた。

初めて聞いた曲だが心に入り込んでいくような感覚を覚え、自然とリズムを踏む鹿目まどか。

そこで曲にまぎれて異質な声が脳に響き渡った。

(助…て…)

「えっ?」

鹿目まどかは異変を感じすぐさまヘッドホンを耳から外し、辺りを見渡す。

特に誰かが鹿目まどかに向けて話しかけた、ということもなく各々が自分の思うままの日常を送っていた。

(助けて…まどか…)

しかし再び頭の中に誰かのボーイッシュな声が響き渡る。
先ほどは聞いていた音楽に隠れていた声も、今度は聞き取れるほどにはつきりとした助けが聞こえた。
声は直接頭に響き、近くから発せられた気配はない。

（僕を…助けて…）

しかし鹿目まどかは引つ張られるように足を進める。
CDショップの雑踏を縫うように抜け、より声が響くほうへと進んでいく。

その時不思議と何も不安を感じることも無く、どうしてかは分からないが頭に響く声を頼りに先を目指すことに恐怖や疑念を感じることはなかった。

すると鹿目まどかは人気のないフロアへと踏み入ることとなった。
客どころか従業員にまで一人もいない、といった不可解な点はあるが鹿目まどかは気にすることもなくただ真つすぐ声の元へと向かう。
フロアの端間で歩き続けると、そこには立ち入り禁止区域の扉が目の前に立ちはだかつていた。

扉の前に備え付けられた柵と看板、そこには『店内改装のお知らせ』と一言添えられている。

しかし、声の主は扉の奥にいる、と鹿目まどかは感覚的に捉えていて、何もためらうことなく柵を乗り越え、なぜか解錠してある扉をくぐり抜ける。

扉の先は廃墟のように開けた空間が広がっていて、壁際に商品の在庫が置いてあるだけで改装準備が進んでいるような気配はない。

「どこにいるの？ あなた誰？」

間隔を頼りにここまで来た鹿目まどかだが、辺りを見渡してもそれ

らしき人物はいない。

いや、人物どころか虫の一匹すらいないのではないかと思えるほどに、閑散とした雰囲気や部屋全体が纏っていた。

鹿目まどかは左右を念入りに眺めていくが、やはり助けを求めている人はいない。

そして部屋の中央までたどり着く。

そこからは部屋全体を見通すことができたが、そこから見えるものは資材や在庫のみ。

鹿目まどかは自身の勘違いかため息を吐き、踵を返そうとした。その時だった。

「助けて……」 ガシャン！

「うわぁ!？」

今まで聞こえていた声が頭上から響く。

そしてそれを合図にするかのようになり、天井のコンクリートが正方形にきれいに剥がれ落ち、同時に白に赤が混じった人形のような物体が鹿目まどかの目の前に落ちてきた。

破砕音におもわず鹿目まどかは悲鳴をあげてしまう。

突然の衝撃音に目も閉じてしまった鹿目まどかだが、続けて何にも起こらないことを確認してから、ゆっくりと音の発生源に目を向けた。

そこには体毛は白、耳はピンと立ち、また耳の付け根から垂れ下がるように長い三叉のだらりとした何かが生えていて、なにより目が向いてしまうほどに皮膚が所どころに裂け血を滲ませている生物が、苦しそうに呼吸をしながら生存していた。

鹿目まどかは頭がパニック状態になるのをこらえ、白の生物からコンクリートを取り払って抱きかかえる。

「あなたなの？」

「…助けてえ…」

抱えあげた生物は息も絶え絶えに、瞳を固く閉ざし顔をゆがめている。

詳しいことは分からないが、一刻も早く治療しなければいけないほどの重症であると鹿目まどかは判断した。

そこに新たな来訪者が表れる。

「そいつから離れて。」

冷たく凜としていて、用件だけを端的に伝えた言葉。

それは鹿目まどかの前方から耳を通して聞こえた。

すぐさま鹿目まどかは白の生物に落としていた視線を上げる。

「ほむら…ちゃん。」

容姿端麗と称するにふさわしい整った顔立ちにスツとしたスタイルを持ち、そしてクラスにおいてもっとも謎めいた少女、暁美ほむらは悠然とそこに立っていた。

普段とは違う紫色を基調とした制服を着ているためか、…それとも羽織っている雰囲気あまりにも重すぎるからか、鹿目まどかは暁美ほむらを怯え、そしてすぐさま白の生物の怪我は暁美ほむらによるものだと理解した。

「でも…この子怪我してる…」

鋭いまなざしに身体が貫かれる。

それでも白の生物を守るように、喉から絞り出した泣きそうな声で呟く。

しかしそれでは暁美ほむらの態度は変わらず、鹿目まどかにはあまりの冷たさに心がくじけそうになる。

「ダメだよ！ ひどいことしないで！」

「あなたには関係ない。」

身体ごと必死に守りとおそうとする。

しかしその思いは暁美ほむらには届かない。

「だってこの子私を呼んでた！ 聞こえたんだもん、助けてって！」

「そう。」

心からの叫びすら暁美ほむらを揺さぶることはできない。

すべてためらいのない一言で片づけられてしまう。

鹿目まどかがどうすることも出来なくなったところを見計らって、暁美ほむらが近づいてくる。

鹿目まどかは白の生物を強く優しく抱きしめ、暁美ほむらから発せられる覇気から守るように身体全体で包んだ。

自身の危険を顧みず、守るためにしゃがみ込み逃げることにすら考えない。

全てをあきらめた瞬間であった。

しかし暁美ほむらの足音が突如止まる。

それと同時に鹿目まどかの後方から、また新たな声が聞こえた。

「出来れば争いたくはないんだけどな……」

どこかくぐもった声がフロアに響く。

その声は鹿目まどかにとって……そして暁美ほむらにとっても……聞き覚えのある声で、確証を求め鹿目まどかは暁美ほむらの存在を一時

忘れ、無我夢中で振り返った。

「ここはひとつクラスメイトの顔を立ててもらえないかな？」

「せ…瀬津君！」

170を超えた長身であり、見滝原中学の制服を身につけていなければ大学生にも間違われてしまいそうな少年、瀬津そうまがそこには頭を抱えながら立っていた。

暁美ほむらの視線が一層鋭くなる。

まるで瀬津そうまの一挙手一投足を見逃さない、と言わんばかりのプレッシャーを受ける瀬津そうまは口笛をヒュイと鳴らし、簡単に身構えた。

「瀬津君！」

外れた視線に鹿目まどかは少しかり緊張が解けたのか、急いで立ち上がり暁美ほむらから見て瀬津そうまの後ろに隠れるように移動した。

その後瀬津そうまの高身長に隠れるため、顔だけを瀬津そうまの影から出し、暁美ほむらを見据えられるような格好になった。

「あなたはやっぱりこちら側の人間だったのね。」

「こちら側…ってことはほむりやもなんだな。」

一言だけ交わし再び沈黙が訪れる。

鹿目まどかには今交わした話の内容が全く理解できなかったが、二人にはたった一言で十分だったようだ。

暁美ほむらのプレッシャーが高まる。

円盤のようなものがついた左手をスツと頭上に挙げて、黒のストッキングで包んだ脚を交差する。

「あらら…全く待つてくれる気はないみたいだな。」

「容赦しない…と言ったはずよ。」

「あの時はこのことだなんて思ってたからなあ。」

それに対しあくまで瀬津そうまの態度は変わらない。

臨戦態勢のようなものには入っているのだが、それ以外の口調や笑顔は休み時間に鹿目まどか達と話す時と何ら変わりのないものを見せていた。

その態度に鹿目まどかは心配し、暁美ほむらはただ静観する。

二人の視線が交わりあい、時が止まってしまったかのようにフロア全体の動きが止まったように鹿目まどかは感じていた。

そんな時またしても予期せぬ方向から、場の空気をかき乱すように介入してくる人物がいた。

突如横から暁美ほむらに向けて放たれた白のガス。

それは消火器から放たれる消火剤で、煙は一瞬のうちに暁美ほむらの全身を包み込んだ。

「まどか、そうま！ こっち！」

「さやかちゃん！」

「ナイスさやか！ 今のうち逃げるぞ！」

美樹さやかは消火剤を全力で暁美ほむらに放射し続け、二人が距離をとったのを見計らってその場に消火器を放り投げてフロアの扉へと全力で走っていく。

それに続くように瀬津そうまと白の生物を抱えたままの鹿目まどかはフロアの外へと出ていった。

しかし暁美ほむらはそれに続くことができない。

煙を何らかの力で吹き飛ばした時には、すでに三人の姿はフロアか

ら消えていて、声や足音も聞こえないほど離れてしまっていた。
暁美ほむらは下唇をかみ、珍しく感情を前面に出していた。

しかしそれも数瞬。

視界が晴れて数秒もしないうちにフロアの外へとつながるドアへと
駆けだした。

とても少女のものとは思えない瞬発力。

あっという間にドアへと接近することができ、ドアノブに手をかけ
る。

まさにその瞬間、暁美ほむらの視界が捉える光景がいびつな形に歪
んでいき、辺り一面が工事現場のような様相へと空間そのものが変
貌していく。

そして暁美ほむらの身体は異世界へと、勢いそのままに入り込んで
いくのであった。

第3話 利用される者（後書き）

サブタイトルの付け間違いが酷いですね（汗）

投稿してから直ぐに確認する習慣をつけないと…

よろしければ感想をお聞かせください！

第4話 野に咲く金色の花

コンクリートの床が砂浜へと変わり、緩やかな傾斜を作る。

人が三人ほどしか並べないような通路の壁がその境界を突然消し、先の見えないほどのどす黒い空間が現れ、360度地平線を伺える空間に移り変わっていく。

地平線の先には影絵で作られたような真っ黒な蝶や、信号機、電車の線路などが宙を縦横無尽に配置されている。

天井も身長の高い瀬津そうまが手を伸ばせば届くほどの高さであったが、果てしなく広がる薄暗い青空に塗り変えられていった。

「変だよここ…道がどんどん変わっていくよ？」

「ああもう…どうなってるのさ!？」

暁美ほむらの襲撃を受けなんとかその場から逃げることができた三人だが、息を吐く暇は未だ訪れない。

現実世界から虚構世界へ。

すでに三人から見える世界は廃墟のような改装フロアではなく、夢…それも悪夢と呼べるような異質な光景だった。

「ちっ、結界か…魔女がいたら厄介だな…二人とも！俺から絶対離れるなよ！」

身体を震わす鹿目まどかと美樹さやかを背に、瀬津そうまは無機質に光る信号機や無造作に置かれた巨大な葉蘭のような物、そしてこれらの奥に見える少し煤けた白の毛玉に注意を向けた。

瀬津そうまの掛け声を合図に、白の毛玉が物陰からヒョコヒョコと表へと現れる。

一匹、また一匹と白の毛玉は意思を持って3人の周囲をうごめく。

その突如近付いてくる生物の存在を鹿目まどかと美樹さやかは視認し、恐怖を貼りつけたような表情を浮かべた。

両手を広げた程の大きさの白の毛玉に立派に整えられたカイゼル髭、その毛玉を支える棒のような二本の脚。

そんなお化け毛玉が数十匹と辺りを取り囲むように近付いてくる。

あまりの恐怖に二人は瀬津そうまの制服の裾をソツと掴んだ。

「大丈夫だ。俺が絶対二人を守り通す。」

そんな二人の不安を打ち消すように、声が降り注いだ。

鹿目まどかと美樹さやかを背にする瀬津そうまからの声だ。

一人表情を曇らすこともなく、ただ状況を注意深く見る瀬津そうま。

そこに様子見とばかりに、一匹の毛玉が三人に向かって勢いを付けて頭突きを仕掛けてきた。

瀬津そうまの正面から向かってくる毛玉。

けして速いとはいえないが、身体全体で突っ込んでくる威圧感に鹿目まどかと美樹さやかは小さく悲鳴を上げた。

瀬津そうまはそれを、腰を使った鋭い蹴りによって簡単に弾き飛ばす。

続けて瀬津そうまの右斜め後方：鹿目まどかに向かって別の毛玉が突撃してくる。

鹿目まどかが身体を呈し抱え上げる白の生物を守ろうとするも、その毛玉は瀬津そうまの左拳により地面を跳ねながら、取り囲む毛玉の群れの中に消えていった。

さらに続けて美樹さやかの首筋を狙うように、ハサミ状の影が伸びてくる。

それを瀬津そうまは美樹さやかの手を引くことでハサミの軌道上から外し、その勢いを利用して影を一蹴りで引きちぎった。

「瀬津君！」

「おい、てめえら…こいつらに手え出すっていつんなら…この俺をぶっ殺してからにするんだなあ…！」

第4話 野に咲く金色の花

近づく毛玉を殴り、蹴り、薙ぎ払い…

毛玉の侵攻はすでに数分続いたが、鹿目まどかと美樹さやかにたどり着いた毛玉は一匹として現れなかった。

毛玉の文字通りの捨て身の特攻は瀬津そうまの両手両足に、ことごとく3人を中心に囲む白の波の中へと弾き返された。

瀬津そうまは息つく暇がなくとも、2人の女の子を傷一つ付ける隙を与えることなく守り通した。

その代償として滴る紅い雫。

張り巡らされたハサミの影に不意を突かれ、瀬津そうまの右手の甲は血をだらだらと流すほどの深い切り傷を負っていた。

それでも収まることのない毛玉の侵攻。

瀬津そうまは右手をかばうような暇もなく、両手両足全てを使い二人を守り続けていた。

「ちっ…こいつら手加減してやがる。舐めやがって…」

殴り飛ばしても蹴り飛ばしても次々現れる毛玉。

そんな数的不利の状況でも瀬津そうまが二人を守ることが出来たのは、もちろん瀬津そうまの中学生離れした身体能力に因るものも大きい。それよりも大きな理由がある。

それは周りを取り囲む毛玉が同時に突撃してこないことだ。

せいぜい二匹…突撃してくる毛玉以外の毛玉は遠くから三人…特に動き続ける瀬津そうまを品定めするように周りを取り囲むだけだ。

この場において覆すことのできない上下関係。

上から見下ろすようなその驕りと、状況を好転させる力のない自身への苛立ちが冷静さを失わせていく。

それでも精密機械のように毛玉を撃ち落とし続ける動作が鈍ることはない。

「瀬津君！ 手から血が…」

「大丈夫だ。それよりまどか、キュウベえの様子はどうか？」

「キュウ…べえ？」

「今まどかが抱えている奴のことだ。まだくたばったりはしてないよな？」

「う、うんっ！ すごく苦しそうだけど、ちゃんと息してるよ！」

「そっか、キュウベえのことすっかり抱えておいてもらえるか？」

そいつが生きてればまだ逆転の芽はあるからな。」

一瞬…ほんの一瞬だが、瀬津そうまは砂浜の上に座り込んでいる鹿目まどかと美樹さやかに笑みを送る。

十分ほど上下左右前後からの攻撃をさばき、休む間もなく注意を払い続けている瀬津そうまが、一瞬だけだが二人に自信にあふれた笑みを浮かべた。

圧倒的な数の暴力を前に…

終わりの見えないサバイバルの中…

二人を安心させるためだけに笑顔を見せた。

一瞬の出来事：しかし鹿目まどかと美樹さやかを安心させるには十分な時間だった。

毛玉の侵略から守り続けてくれる瀬津そうまを信じ、白の生物：キウベエの様子を伺えるほどに落ち着きを手にした。

「お待たせ、そうま君。」

そんな絶望の中で一縷の光を信じ始めた二人に、天から声が降り注ぐ。

「誰っ!?!」

「俺も今来たところだよ…:でも言えればいいんだけど、今はそんな雰囲気じゃないんでね。」

美樹さやかの声に応えるように鎖が三人を囲むように頭上から下ろされる。

それと同時に瀬津そうまは円の中に入る毛玉を全て円の外へと押し出す。

「そうね。それじゃあさっさと片付けちゃいましょうか。」

その声を合図に鎖から構造色の光が円の外に向かって四方八方に伸びていく。

光は縦横無尽に曲線を描き、毛玉を貫くように際限なく空間を蹂躪した。

光に貫かれた毛玉は忽然と姿を消し、数瞬もすれば周りを取り囲んでいた毛玉の大半は存在をなくしていた。

突然仲間が消えたことで慌てて逃げ出そうとする数十の毛玉。

「そっちも!」

頭上から聞こえる声：鹿目まどかと美樹さやかが釣られて顔を上げると、建物の中だというのに星空が広がっていたのだが、2人はその光景の一点を中心に目を奪われた。

金色のロールされた髪に白のパフスリーブ半袖シャツ、黄色のスカート、黒のブーツを身に付けた少女がそこには浮かんでいたのだが、2人が目を奪われていたのはそれでもない。

宙に浮く金色の少女：そしてその横にずらりと並ぶ百を超える銀で装飾されたマスケット銃。

銀の銃身が全て残り僅かの毛玉に向けられていて、後は引き金を下ろすばかり。

そして金色の少女が腕を毛玉に向けて突きだしたのを合図に全ての撃鉄は落とされ、紅の弾丸が盛大な音を出しながら毛玉に向けて発射された。

弾丸は毛玉に吸い込まれるように的確に的を捕え、弾丸は砂地へと突き抜け砂埃を上げる。

マスケット銃の衝撃による突風に三人の目は閉ざされることとなる。

音が鳴りやみ目を開くと、砂埃が晴れる頃には毛玉は完全に姿を消していて、そして景色も地平線が見える広大な空間ではなく、すぐ近くにコンクリートの壁が見える改装フロアへの通路へと戻っていた。

宙に浮いていた少女もくると宙返りをして地面にそつと着地した。その際明らかに重力に逆らって落下速度が落ちたことに、2人は気付くこともなくただぼんやりとその一連の動作を眺めていた。

「す、すごい…」

もはや鹿目まどかの考えの範疇などとつくに超えてしまっているが、それでも少女の圧倒的な制圧力を前に感嘆の声を上げることしかで

きなかった。

「戻った…」

美樹さやかも今起きた現実を当たり前のように呟くことしかできなかった。

しかしようやく見慣れた風景が広がったことに笑みがこぼれ、同じく安どの表情を浮かべた鹿目まどかと手を取り合い喜びを分かち合う。

瀬津そうまはようやく一息ついて、自身の右手の甲に負った傷をペロりと舐めた。

しかしまだ警戒を解いていない。

瀬津そうまが見上げる先、トラックほどの大きな荷物の上に立つ一人の少女の存在が無ければ、それもすぐに解けただろう。

「ほむらちゃん!？」

瀬津そうまが見上げているのに気づき、鹿目まどかと美樹さやか、そして金色の少女も同じ方向を見上げる。

そこには先ほど鹿目まどかの前に現れた姿のままで見下ろす暁美ほむらの姿があった。

視線は鹿目まどかにのみ注がれている。

「魔女は逃げたわ。仕留めたいのならすぐに追いかけてなさい。今回はあなたに譲ってあげる。」

「私があるのは…」

暁美ほむらは少女の言葉を視線を含めた答えで返した。

その視線の先には鹿目まどか…そして鹿目まどかが抱えるキュウベえに注がれていた。

「飲み込みが悪いわね。見逃してあげるって言ってるの。」

しかしその要件を少女は飲みこまない。

優しく語りかけるような口調を、鋭く命令するような口調へと変えて暁美ほむらを言葉で突っぱねた。

「それに俺もほむりゃとは争いたくない。それはまどかもさやかも同じ考えなはずだ。」

今度は瀬津そうまが鹿目まどかと美樹さやかの2人を視線から守るように前に出て、暁美ほむらに言い放った。

一時の静寂、誰一人動くことのできない緊張感。

下手に動けばそれが刺激となり、いつ戦闘が始まってもおかしくないような殺伐とした雰囲気へと変わっていた。

.....

暖かな光がキュウベえを包み込む。

すると体中の至る所にあつた傷跡が見る見るうちに塞がっていく。

数分もしないうちに傷は跡形もなくなり、気持ち良さそうに目を閉じるキュウベえの姿がそこにあつた。

見ただけで分かるほど容態が良くなったことを喜ぶ少女達と少年。その輪に暁美ほむらの姿はない。

金色の少女：バマミの手から注がれる暖かな光により、傷を癒したキュウベえが覚醒するのに時間はかからなかった。

赤くくりつとした丸い眼をパツチリ開け、辺りの状況を把握してから犬のように両手両足をつけて行儀よくしゃがむ。

機嫌がいいのか、体の割りに大きな尻尾を左右に振っている。

「ありがとうマミ！ 助かったよ！」

「お礼はこの子たちに。私は少し手助けしただけだから。」

バマミは謙遜しつつも、瀬津そうまの右手に先ほどと同じ光を当てる。

何の抵抗もなく光を受ける瀬津そうまの右手の甲に負った傷は、やはりすぐに塞がり血も綺麗に無くなっていった。

「どうもありがとう！ 僕の名前はキュウベえ！」

バマミが治療をしている間に、キュウベえは鹿目まどかと美樹さやかに体を向け、その赤い両目を二人に向けながらボーイッシュな声を紡いだ。

白い生物が言葉を話すことに美樹さやかは少しばかり動揺してしまっが、つい先ほどまでの出来事よりも衝撃的なことではない、と別段反応することもなく話を聞く。

「あなたが私を呼んだの？」

「そうだよ、鹿目まどか。それと美樹さやか。」

「なんで私たちの名前を？」

「僕、君たちにお願いがあってきたんだ。」

「お願い？」

鹿目まどかは頭を傾げる。

それもその筈、突然呼び出されて来てみれば全く見覚えのない生物から、いきなり頼みごとをされるなんてこと見当もつかないだろう。それを理解しているのはキュウベえ自身と…この場では他に巴マミと瀬津そうまがいた。

キュウベえは一呼吸置いた後、首をおねだりするように傾げ笑顔を作りながら、不釣り合いなボーイッシュな声で願いを紡いだ。

…そしてそれが鹿目まどかと美樹さやか…またその周りの世界の運命を狂わせてしまう一言へとなってしまう。

「僕と契約して、魔法少女になってほしいんだ！」

第4話 野に咲く金色の花（後書き）

ようやくアニメ第1話終わった…

是非感想お願いします！

第5話 騎士(ナイト)(前書き)

忙しい

忙しいのに

次話を出す

リアルの世界

ボロボロな俺

第5話 騎士(ナイト)

『私はバマミ。あなたたちと同じ見滝原中学の三年生。そして…キユウベえと契約した魔法少女よ。』

『これがソウルジェム。キユウベえに選ばれた女の子が契約によって生み出す宝石よ。魔力の源であり、魔法少女の証でもあるの。』

『僕は君たちの願い事を何度も一つ叶えてあげる。』

『でもそれと引き換えに出来上がるのがソウルジェム。この石を手にしたものは魔女と戦う使命を課されるんだ。』

『キユウベえに選ばれたあなたたちにはどんな願いでも叶えられるチャンスがある。…でもそれは死と隣り合わせなの。』

夕焼けに染まるバマミの部屋。

そこで聞かされる魔法少女と魔女の存在。

そして一度だけなら、願いがなんでも叶うという奇跡。

現実の中に潜んでいたフィクションでマジカルな異世界を、鹿目まどかと美樹さやかは偶然知ってしまった。

説明を聞いてみると人間という生き物はすんなりと順応してしまうもので、自分に自信を持てず、平凡な暮らしをしてきた、と考える鹿目まどかは自分が選ばれた人間だということ、平凡な自分が物語の正義のヒロインのような世界へと飛びこめることに喜びを隠しきれない様子だ。

それゆえに次の日、担任の早乙女女史が行う英語の授業に聞く耳を

持たず、ノート二ページに魔法少女のイラストを描くほどに夢中になっっている。

その絵のモデルはもちろん鹿目まどか自身であり、昨日見た巴マミの衣装を横にも書いて、魔法少女の衣装を着た自身と並べてみたり、と書いては消してを繰り返している。

巴マミの部屋で、魔法少女の衣装は自分の深層心理から作り出される、と聞かされた鹿目まどかは心に呼び抱えるように思い浮かんだ衣装を書き、修正し、より明確なものへと書きだしていく。

巴マミに魔法少女になるイメージをつかんでほしいと言われており、それに対する鹿目まどかの答えがこの外見デザインであった。

一時間目の授業から今までずっと続けているこの作業。

あまりに熱中しすぎてしまったために弊害も起きてしまっているのだが…

「鹿目さん？ 次の問題訳してくれるかな？」

「へっ…はい！…すみません、聞いていませんでした…」

第5話 ナイト 騎士

「…分かりましたね？ それじゃあ今度からはちゃんと聞いているのよっ。」

「…はい、すみませんでした…」

早乙女女史からひとしきり説教を受け、鹿目まどかは力なく座る。説教というよくあるハプニングに両肘を突いて眠っていた美樹さやかや、学校にまで付いてきていたキュウベえも起きて、被害者である鹿目まどかを前者は面白そうに、後者は首をかしげながら眺めていた。

それと同時に鹿目まどかの頭の中に、誰かが話しかけてくる。

『何ボーっとしてんのさ?』

鹿目まどかの頭に響く声は美樹さやかの声。

しかし美樹さやかは黒板の方を向いたまま、口を開くことすらしていない。

これはいわゆるテレパシーといわれるもので、お互いの会話を頭の中だけで行える一つの魔法だ。

これは二人が魔法少女になったから使えるのではなく、仲介役としてキュウベえが魔法を使役することで行えている。

そのためもあってか、テレパシーの内容はキュウベえが選択的に相手に送ることができる。

『さやかちゃん? えっとね、魔法少女ってどんなのかな、って考えてたの。』

『その説明は昨日ママがしたたる?』

そして今回においてその相手とは鹿目まどか、美樹さやか、そして瀬津そうまの三人であった。

三人は授業を聞いているふりをして、念話での会話を続ける。

『そうでしょ? えっと…奇跡を叶えてもらう代わりに魔法少女に

なって、町の至る所にいる魔女を倒して町の平和を守る！ …でいいの？ そうま？」

「俺は魔法少女じゃないから詳しいことは知らないけど、たぶんその認識で間違いないんじゃないか？」

「確かにそうまは昨日、あの毛むくじゃらお化けにそれっぽいことしてないしね。」

「えっと…瀬津君は魔法少女の騎士…だっけ？」

「それはマミが勝手に言ってるだけだよ。言っても俺は魔法少女の使い魔、が関の山さ。」

魔女や使い魔の作りだす結界においても辺りを見渡す余裕さえあり、素手で魔女のしもべである使い魔を殴り飛ばした。

しかし瀬津そうま自身は魔法を行使していない。

「言っても【魔法少女】だからな。俺がなれるわけないだろ？」

「そうまの魔法少女姿…」「ぶっ!？」

「さやか〜？その思い描いた映像だって伝わるんだからな〜？ …」

あと急に笑い出したら、周りに変人扱いされるぞ？」

巴マミの魔法少女の衣装を、筋骨隆々の瀬津そうまが纏う…

そんな殺人的な想像をした美樹さやかは吹き出してしまい、その想像した画がテレパシーによって伝わってしまった鹿目まどかも笑いをこらえるのに必死だった。

「はい、それじゃあ瀬津君。この文章を英文に直してみて？」

「はい、かずちゃん。」「テメエ等後で覚えとけよ〜…」

問題を当てられた瀬津そうまは念話で恨み言を飛ばしながら、ホワイトボードの前へと何事もなかったように歩いて行き、そしてすらすらと筆記体で回答していく。

かなりの長文英訳だったので、早乙女女史としても何人かの生徒に

分けて行おうとしていただけに、ホワイトボードに書かれた日本語を全て訳していく瀬津そうまに驚きを示していた。

『ちよっ!?! なんであんなにすらすら解けるわけ!?! 私なんて出だしからわかんなかったのに!?!』

『【私は】なんだから、【I】から始まるのは分かるでしょ?それに瀬津君はすごく勉強できるよ。』

『…そういえば数学の時も国語の時もすらすら解いていたような…』
『まあこれくらいならちよるいちよるい!』

途中で回答を止められた瀬津そうまが席へと戻る。

教壇では早乙女女史が瀬津そうまの回答に丸をつけ、他のクラスメイトのために解説していた。

『それなら今度あたしに当たった時、答え教えなさいよ!この魔法があればどんな問題でも怖くないっ!』

『さやかちゃん…それはちよっど…』

『はあ…一回だけだからな?』

『十分十分!』

『それじゃあ続きを…美樹さん。お願いします。』

『はいはい!』 『それじゃあ頼んだわ! そうま!』

自信満々に立ちあがり教壇へと上がっていく美樹さやか。

それもその筈、瀬津そうまからテレパシーを通して答えを教えなくても
らえるのだ。

怖気づくことなど何もない。

『へいへい…How many times have you
listened to that music?』

美樹さやかが黒のペンを持ったのをタイミングに、瀬津そうまは英訳の答えをイメージしながら伝える。

これで言葉だけでなく文章としても理解することができるので、瀬津そうまとしては親切心として伝えたくもりであった。

しかしそれだけでは足りなかったようだ。

『ちよつと、そうま！？ これって英語じゃないじゃない！？』

『はあっ？ どっからどう見ても英語だろ？』

『…あつ…筆記体なんかで書かないでよ！ 全然単語が分からないじゃない！』

『筆記体は一年の時に習ってるはずだろ！？ ああもう…』

このまま念話で押し問答を続けても美樹さやかは一生答えは分からず、ホワイトボードの前でペンを掲げながら固まっているだけに見えてしまう。

しょうがない、と今度はブロック体で答えをイメージする。

そこでようやく美樹さやかはホワイトボードに答えを書き始めた。

『まどか…さやかってやつばおバカさん？』

『あはは…ちよつと英語と数学と社会と理科と国語が苦手なだけだよ。』

『…高校受験に魔法は使わせないからな。』

『そうなたら私が魔法少女になって魔法使ってやる〜！』

ようやく答えを書き終えた美樹さやかが席に座る。

教壇では早乙女女史が美樹さやかの回答を添削し、『？』が文末に添えられていなかったことに軽く注意を促している。

それを見て瀬津そうまは自身の気遣いが無駄であったことにため息を吐いた。

.....

「ねえまどか…願い事、なんか考えた？」

昼休み、美樹さやかは鹿目まどかと瀬津そつま、それとキュウベエを連れて屋上へと向かった。

見滝原中学の屋上は常に開放されていて、授業の気分転換を行いたい学生が空気を吸いに来れるようになっていた。

今日は三人と一匹にとっては都合よく屋上に人の影はなかった。といってもキュウベエの姿は魔法による影響か魔法少女にしか視認できず、一般人には存在を認識することもできない。

だからこそ学内にキュウベエを入れることができ、テレパシーによる密談も可能だったのだ。

各自持参した弁当を和やかに食べ、三人が食べ終わったところで一言美樹さやかがつばやいた。

「うつん。さやかちゃんは？」

「あたしも全然…なんだかなあ、いつくらでも思い付くと思ったんだけどなあ。…欲しいものもやりたいこともいっぱいあるけどさ、命がけつてところやっぱ引かかっちゃうよね…そうまでするよつなもんじゃね？よな？…って。」

「うつん…」

「まあそれが普通だと思うし、俺としてはやっぱり女の子には前に出てほしくないんだけどな。」

魔法の力の片りんを見て興奮し憧れもした二人だが、それでも即断で魔法少女になる、と決意することはできなかった。
魔法少女になることで得られる対価。

『自身の望むものなんでも一つ叶う』…これ以上の対価は存在しないだろう。

それでも二人は首を縦に振ることはできなかった。

理由の一つとしてはやはり魔法少女になることは、今住む平凡な世界から殺しあいの世界へと足を踏み入れるとほぼ同義であると、バマリと瀬津そうまに聞かされているからである。

事実瀬津そうまは手の甲に深い傷跡を負い、血をだらだらと流しているのを二人は見ている。

そしてもう一つの理由は…

「意外だなあ。たいていの子は二つ返事なんだけど？」

「まあきつと。あたしたちがバカなんだよ。」

「え〜…そうかな？」

二人がバカである、ということである。

美樹さやかは落下防止柵に近づいて話して話す。

「そう…幸せバカ…別に珍しくなんかはいはずだよ。命と代えてでも叶えたい望みって…そういうの抱えてる人は、世の中に大勢いるんじゃないかな？ …だからそれが見つからない私たちって、その程度のことも見つけられない幸せバカってことじゃん。…恵まれすぎて…バカになっちゃってるんだよ…なんで私たちなのかなあ？

…不公平だと思わない？ こういうチャンス、本当に欲しい人はほかにいる筈なのにね。」

「さやかちゃん…」

鉄線でできた落下防止柵を握りしめる音が響いた。

美樹さやかが語る『幸せバカ』…それは平凡に人生を過ごす鹿目まどかだからこそ深く理解でき、魔法少女の権利を得たことにさえ少し罪悪感を感じてしまう。また…鹿目まどかには美樹さやかが何を思っ、そのような考えに至ったのかも理解できていたから、それは尚更であった。

美樹さやかが思う『命と代えてでも叶えたい望みがある人』とは…美樹さやかは屋上から見下ろす風景と、ある部屋から見下ろせる風景を重ね合わせていた。髪を乱すほどの風が屋上を吹き抜ける。

「俺も人生が平等なんて思わないよ。」

「瀬津君…」

瀬津そうまは鹿目まどかと背中合わせのベンチに座りながら、自身の考えを語り出す。

「交通事故に遭って死んでしまう人もいれば、無差別殺人犯に刺されて死ぬ人もいる。クラスでいじめられ続け自殺を考える人だっている…そんな中で、俺達はこうやって平穩無事に生きている。…そんな人生が平等であるわけないさ。」

空を見上げ太陽の光に目を細めながら、空の青さに目を奪われる。気が付くと三人はそれぞれ屋上の床、郊外の森、雲が少し混じった青空、と折角集まってご飯を食べたのに、三人共が互いの目を見ずぼんやりと風景を眺めていた。そして瀬津そうまの考えはまだ続く。

「だからさ…さやかはさやかで好きなこと叶えちゃえば良いんじゃない

ないか？ 俺や他人にはないチャンスなんだからさ。…その代わりに生半可な覚悟じゃやっていけないけどな。」

死と隣り合わせの世界。

魔女の結界内での死は、現実世界では永遠に行方不明扱いとなる。両親が、友達がどんなに探しても一生見つかることはない。

昨日バマミの部屋で魔法少女の説明をしていた時、瀬津そうまは何度も危険性を説明していた。

「だからマミが体験講座を開いてくれたんだろ？ 魔法少女の現実をその目で確かめられるようになる。」

この瀬津そうまが話す内容はバマミからの提案だった。

バマミが毎夜行っている魔女退治に付き添ってみないか、という提案のことである。

もちろん怪我しないとも限らないしそのまま家に帰れなくなってしまうこともあり得る、と一言付け加えられてからだ。

バマミが魔女を相手している間は、瀬津そうまが二人を守る手はずになっているため、けがの心配は少ない。

それが二人に少しの余裕のような何かを生み出していたのかもしれない。

もしくはファンタジーの世界をもっと見ていたかったのかもしれない。

二人は即断で付いていくことを決心した。

「とりあえず今晚だな。二人は俺が守るから心配せずついてきてくれよ。」

少し大人びた顔立ちが満面の笑みを浮かべる。

その表情に鹿目まどかの頬はサツと紅くなってしまった。

整った顔立ちに気さくな性格、学業も優秀で使い魔との戦闘を行えるほどの運動神経を持つ。

そんなアイドルのような瀬津そうまの無邪気に浮かべられた笑顔に、鹿目まどかはつい見とれてしまった。

昼休み終了を告げる学園にチャイムが鳴り響く。

鹿目まどかは美樹さやかに顔が紅くなっていることをさんざん弄られながら、キュウベえを抱え教室へと戻っていく。

鹿目まどか達がいなくなった屋上は雲の影に隠れ、全体を陰に落としていた。

そして日は落ちていき、魔法少女体験講座は幕を上げた。

第5話 騎士(ナイト)(後書き)

小説書くのって気分転換にいいよねっ！

…次も少し遅いかもしれません。

感想宜しければおねがいます！

第6話 飛べない鳥

美樹さやかの横にある扉を抜けるとそこは夕焼けに染まる広い個室へと繋がっている。

病室とは思えないほど床がカラフルで、大量の書物が収まった本棚と一つのベッド。

それ以外にはただ空間が広がっているだけの病室だ。

美樹さやかは一つ深呼吸をして気持ちを落ち着かせる。

病室に入る時に行ういつもの動作で、それは普段より少し鼓動を速める心臓を落ち着かせる効果があった。

窓を開けているため、心地よい秋の風が窓から廊下へと吹き抜けている。

そして美樹さやかは、その柔らかな風を全身に感じながら病室へと入っていった。

靴がローファーのため足音がコツコツと鳴り響く。

その音に導かれ、ベッドの上から窓の外を眺めていた少年が病室の入口に目を向けた。

「やあ。」

軽やかなあいさつ。

まるで気軽に話し合える仲のようなあいさつではあるが、それはその通りである。

ベッドの上に横たわる少年、上条恭介は美樹さやかの幼馴染である。それを示すかのように柔らかな笑顔とまなざしが、美樹さやかを迎えて入っていた。

幼少の頃美樹さやかの両親が、自分たちの娘、美樹さやかの男勝りな性格を改善すべく、ヴァイオリンの稽古に通わせたことが二人の

出会いの始まりであった。

当時より、これまた両親の影響でヴァイオリンを学んでいた上条恭介がその教室に通っていた。

友達と遊べない不満や精密な動作を嫌いとしていた美樹さやかはともかく、上条恭介のフィンガリング技術は同年代の域をはるかに凌駕するほどだった。

「天才」…

二人が小学校に入学する時には、すでに上条恭介にはそんな俗称が付いていた。

美樹さやかよりも小さな体躯から奏でられる旋律。

それはヴァイオリンの稽古に嫌気がさしていた美樹さやかを、ヴァイオリン教室へと向かわせる一つの要因になりうるものだった。

「はい、これ。」

「わあ…いつもありがとう。さやかはレアなCDを探す天才だね。」

その頃から上条恭介は美樹さやかにとって、単なる同じヴァイオリン教室に通う同い年の男の子…ではなくなっていた。

聞く人を魅了するヴァイオリン技術と表現力。

練習の合間には優しく懇切丁寧に教えてもらうこともあった。

…しかしそれよりも美樹さやか教室に来ると向けられる柔らかな笑顔。

美樹さやかはこの笑顔が大好きであった。

そしてその笑顔は今も変わらず美樹さやかの胸に語りかけてくる。胸の奥に潜む心をときめかせ、顔を紅くさせる。

幸い夕焼けが差し込んでいるため、紅潮する表情をごまかすことが出来た。

「あはは…そんな運がよかったよ、きっと。」

運良く三件目のCDショップに置いてあった、上条恭介が大好きなヴァイオリニストのCD。

多い時には十件以上、遠い時には一時間以上かかる県境にまで足を運ぶことを考えれば、本当に運が良かった。

上条恭介はCDを受け取ると近くに置いてあったCDプレイヤーを手に取り、早速新品のCDをセットする。

柔らかな笑みを浮かべながらイヤホンを片耳に付けると、もう片方のイヤホンを美樹さやかに差し出した。

「この人の演奏は本当にすごいんだ。さやかも聞いてみる？」

「いつ…いいのかな？」

「本当はスピーカーで聞かせたいんだけど、病院だしね。」

残念、と言いたげな表情を浮かべる上条恭介。

その手に握られていた片方のイヤホンが美樹さやかの耳へと収まる。お互いの距離があるために耳に収まるイヤホンを引っ張り合う。

それを上条恭介が美樹さやかに頭を近づけることで、イヤホンのコードをたわませた。

一つのイヤホンを二人で聞く。

お互い頭を近づけ、奏でられる音に耳を傾けた。

しかし美樹さやかにとってはそれどころではない。

紅潮していた顔がさらに熱を帯び、もはや夕焼けではごまかせないほどに紅くなっていく。

音楽など到底耳に入らない。

夕焼けが差し込む病室。

そこには夕焼けのように顔を真っ赤にした美樹さやかと…

CDを聞きながら窓の外を眺め、一人涙を流す上条恭介の姿があった。

涙を流す上条恭介の左手には…天才的なフィンガリングを支える左手には包帯が何重にも巻かれていた。

第6話 飛べない鳥

「さて…それじゃあ魔法少女体験コース第一弾、張り切っていてみましょうか。準備はいい？」

4人はそれぞれが注文した飲み物に手を付ける。

先日バマミの家で飲んだ紅茶に比べ手軽でチープな紅茶ではあったが、簡単に紅茶の香りと味を楽しめるとあって店内にはそれなりの人でにぎわっていた。

ゆえにバマミは放課後ここに集まるように三人に先に言っていた。周囲の雑音により、普段通りのトーンで話しても周りを気にする必要が無い。また紅茶も飲むことができ、その後の用事に出向きやすい点もバマミにとって良い待ち合わせ場所と判断された。

白い蓋つきのカップをそれぞれのトレイに載せ、バマミが口を開く。その表情は幼稚園の先生が見せるような、とても温かく柔らかな笑顔だった。

「準備になってるかどうか分からないけど…持ってきました！」

美樹さやかは机の下から勢いよくテーブルの上に、長さ1メートルほどの細長い棒のようなものを取り出す。

それは黄土色の布に巻かれていて、なぜか登下校中から常に持ち歩いていた一品だった。

巻かれてある布を引っぺがすと、その正体はすぐさま現れる。

「何もないよりはマシかと思って。」

「なんでそんなの持ってたんだよ……」

「まあ……そういう覚悟でいてくれるのは助かるわ。」

中身は少年野球などでよくつかわれる金属バット。

幼いころ近所のわんぱく男子小学生に混じって野球をしていた美樹さやかならではの準備の仕方であろう。

瀬津そうまとバマミにとって、本気なのかふざけているのか分からないところがたちの悪い。

ちなみに鹿目まどかは心構えとして、自身の魔法少女コスチュームを考えてきていたのだが、男子である瀬津そうまに見られるのが恥ずかしくて、ノートをカバンの中にしたままキュウベえを抱えていた。

「それじゃあ簡単におさらいね。魔女や使い魔を倒すにはこれを使うの。」

二人の意思を確認した後、バマミはヘリオードルのような金色の宝石を取り出した。

ウズラの卵ほどの大きさのその宝石は、内側から光を放つように燦然と輝き、温かみさえ覚えるような光を放つ。

「昨日も説明したと思うけど、これがソウルジェム。魔法少女の魔力の源でもあり、魔女と魔法少女を引き合わせる戦の石。これが強

く発光すると近くに魔女の気配があることを意味しているの。」

「簡単にいえばひたすら街を歩き回って、ソウルジェムが反応する場所を見つければいい、ってことだね。」

「げえっ…当てもなく歩き回らなきゃいけないんだ…」

テーブルに肘を突いてため息を吐く。

「呪いによる影響は交通事故や暴力事件に発展することが多いの。そういつたことから大きい道路や歓楽街に魔女が潜んでいることが多い、って目星は付けれるけど…とにかく足を運ばないことには見つからないわね。」

「えっと…それで魔女は人に変な呪をかけるから、それを防げばいいんですよね、マミさん？」

「そうね。人に呪をかけた大本の魔女を倒せば、その人にかかった呪も解けるから速やかに倒さなきゃいけないの。」

「…もし放っておいたら…」

「その人たちは死ぬだろうな。」

残酷なまでに突き放すような瀬津そうまの一言。

その一言は鹿目まどかの心に深く刺さった。

日常をただ全力で過ごしている普通の人が、運悪く魔女の結界に入り込んでしまっビジョンが次々と浮かび上がった。

そのビジョンには鹿目まどかの両親や弟の鹿目タツヤも例外なく映し出される。

…急に鹿目まどかは震えが止まらなくなった。

「まあそうはさせないようにするのが、俺達の仕事なんだ。とりあえずどんなものか、今日は観客気分で見てくださいよ。」

「あっ…うん。ありがとう、瀬津君。」

その怯えを見せる鹿目まどかを心配して、瀬津そうまは笑みを浮かべ声を掛ける。

前日も身を呈して自身を守ってくれた瀬津そうまが言う言葉には、不思議と人を安心させる雰囲気秘めていた。

…しかし身体の震えは治まることはない。

「でもそうまは魔法使えないんでしょう？ どうやって戦うのよ？」

「基本的に私が前衛で魔女を倒して、そうま君が二人を守るような陣形をとるから安心して。それにそうま君だって男の子なんだから、やるときはやってくれるわよ。」

「マミ…相変わらずプレッシャー掛けるのが巧いな…まあ女の子を守るのが男の使命だからな。精一杯頑張らせてもらうさ。」

「もちろん本当に危なくなったらいつでも言うてね。僕と契約すればすぐにでも魔法少女になれるから。」

「こらっ、女の子を急かすんじゃないの。」

こうして鹿目まどかと美樹さやかは魔女退治体験が始まった。

.....

「ティロ・ファイナーレ！」

巨大な大砲のような形をしたマスケット銃が、目玉を身体の至る所につける大きなコインのような使い魔に向けて火を噴く。

バマミの必殺技とも言うてもいい巨大な銃撃に、数十匹いた円形の

使い魔は跡形もなくその姿を消した。

「ほいよっ！」

巴マミが数十のマスケット銃を扱っている後ろで、鹿目まどかと美樹さやかを守るように、集まる使い魔を文字通り蹴散らしていく瀬津そうま。

蹴り飛ばされた使い魔は、数十メートル先の虹色の壁まで転がるように吹き飛ばされていく。

「マミ！ ラスト右に八体だ！」

「任せて、そうま君！」

巴マミが右手を横に薙ぎ払う。

するとそこにはいつのまにか銀のマスケット銃が八丁並んでいた。銃口はそれぞれが一匹ずつを狙い澄ますように向けられている。

そして撃鉄は瀬津そうまが指を鳴らす音を合図に、残る使い魔全てに向け発射された。

銃撃は見事全弾命中し、円形の使い魔に野球ボールほどの穴が空いていく。

そして形の崩れた使い魔たちは砂のようにさらさらと崩れ落ち、地面へと消えていった。

それと同時に辺りを包んでいた目に悪いカラフルな空間は音もなく崩れ去っていく。

数秒後には辺りは暗いコンクリートの壁に囲まれた光景に戻っていた。

「あつ、戻った。」

「使い魔は一掃できたからね。とりあえずもう安心よ。」

バマミのソウルジェムに導かれやってきたのは廃墟のような一つのビル。

『貪欲』を宿す魔女の手下である『硬貨』の使い魔が生み出す結界に入ってから十五分もの間で、四人は再び現実世界へと戻っていた。

「なんか意外とあっさりしてるね。全然危険、って感じもなかったし。」

「そう？ 私はなんか不気味ですごく怖かったよ…。」

「俺もさやかに金属バット向けられた時は死ぬかと思ったな。」

「それはそうだが急に前に出てくるから。」

「俺が受け止めてなかったら、隣にいたまどかにも当たってただろうが！」

「いや、さすがが男の子だね。私のフルスイングをいとも簡単に受け止めちゃうんだもん。さやかちゃん感動しちゃったよ。」

「あのときが一番冷や汗かいたわ！」

「あはは…」

「はいはい、じゃれあうのはそこまで！」

魔法少女のコスチュームから見滝原中学の制服に戻ったバマミは、仲裁するように手をパンパンとたたきながら瀬津そうまと美樹さやかの方に割って入る。

「今日は魔女じゃなくて使い魔だったから簡単だったけど、気を抜かないでね。今後魔女が出てきたらもっと危険な目に遭うかもしれないんだから。」

「今日のは魔女じゃなかったんですか？」

「いわば魔女の手下ね。こいつらは魔女ほどの呪を持っているわけではないんだけど、それぞれが人間を捕食して魔女へと成長するこれまた厄介な存在なの。」

「何か明確な違いがあるんですか？」

「はつきりとしたものはないけど、使い魔は基本的に私たちくらいの大きさで、魔女は10メートル前後の大きさなことが多いかな。」

「あとは結界の最深部にいるのが魔女の可能性が高いね。」

鹿目まどかは魔女と使い魔の違いを感覚的に理解した。

それが今後使う機会があるのかはまた別の話だが…

「それじゃあ今日はこのくらいにすつか。暗くならないうちに帰ろうぜ。」

時刻は十八時を回り、夕焼けを侵食するように夜が街には広がっていた。

前日巴マミの家で魔法少女について簡単な説明を受けていたため、帰宅時間が二十時を越えていたことで、母親に一言苦言を呈されていたことを鹿目まどかは思い出す。

「そうね。それじゃあ今日はこのくらいにしましょう。鹿目さん、美樹さん、良かったら明日も魔女退治をするけどどうする？」

「もちろん俺もいるからな。」

二人は目をあわせる。

その目にはすでに答えが出ているような真つすぐな目をしていて、お互いがそれを読み取ると、二人はそろって勢いよく首肯した。

「分かったわ。それじゃあ明日も今日と同じ場所で待ち合わせね。

それじゃあ私はこっちだから。そうま君、ちゃんと二人を家まで送り届けるんだぞ？」

「分かってるって、マミ。」

「うふふっ、それじゃあまた明日ね。さようなら。」

「あつ、はい！ 明日もお願いします！」

「さようなら〜マミさん！」

そして金色の髪を持つ少女は一人大通りを曲がり、小道へと入っていった。

去り際のバマミの表情はほほ笑んでいるように嬉々としたものであったが、それを感じ取れたものは瀬津そうま以外にいなかった。

「それじゃあエスコートさせて頂きますよ、お嬢様方？」

そしてバマミの姿が見えなくなったのを機に瀬津そうまが二人を帰り道へと誘う。

夕焼けがわずかに残る世界を歩いていく三人と一匹。

こうして魔女退治体験の一日目は終了した。

第6話 飛べない鳥（後書き）

何を隠そう作者はゆずが大好きです。

それと便座カバー

よろしければ感想、ご指摘などよろしくお願いします！

それと便座カバー

第7話 リップサービス

ホールのような真っ白なドーム状の広大な空間。

床一面は芝に覆われ、不自然なまでに平らに均されている。

鹿目まどかと美樹さやかはその室内コロッセオのような戦場を、数十メートル程の高さから俯瞰していた。

広場の中央には10メートル程の大きさを誇る蛞蝓のような魔女と、その魔女を守るように多数の瞳とカイゼル髭を携えた手のひらサイズの使い魔が佇む。

そしてその魔女の巨体を外周するように、共に疾走する二つの影があった。

「マミは攻撃に専念っ！俺は周りの邪魔な使い魔を退かす！」

「分かったわ、そうま君っ！」

外周を続けていた影は魔女に対して一定の距離をとり立ち止まる。

魔女に対して突き刺すような強い視線。

それだけで鹿目まどかと美樹さやかの二人は、次の攻撃でクライマックスになることを感覚的に理解した。

金色の影が胸元で結ばれた黄色のリボンを解くと、リボンは目にも留まらぬ内に巨大なマスケット銃へと早変わりした。

主を一撃で沈めようとする銀の兵器に、使い魔達は阻止せんばかりと金色の影に牽制を仕掛ける。

…が、それも金色の影を囲むように動くもう一つの影に弾き飛ばされた。

地中から金色の影目掛けて頭突きを仕掛ける使い魔も、まるで予知しているかのように地中から出てきた所をピンポイントに狙われ、一匹たりとも金色の影に届くことはなかった。

「テイロ・ファイナーレ！」

そして無情にも使い魔の努力は届かない。

巨大な砲身から放たれた暴力は、射線上の使い魔を巻き込みつつ巨大な魔女の凶体を貫いた。

鹿目まどか達には光の線が魔女を包み込み、その輝きに目を奪われている間に魔女や使い魔の存在が消え去ったように感じていた。

魔女が消えた空間には先程まで駆け回り、そして魔女や使い魔を殲滅した2つの影しか存在しない。

闘いの熱が引き、静まるコロツセオ。

はしゃいでいたのは、観客と化していた鹿目まどか達だけだった。

魔女が消滅した結界は音もなくその空間を歪ませ、次第に現実世界へと画を塗り替えていく。

2つの影が死闘を繰り広げていたのは公園の広場に、鹿目まどか達がいた客席はその広場に繋がる階段へと早変わりしていた。

「今日のはすごく大きかったですね？」

「魔女だったからね。この前も言ったと思うけど、使い魔よりも呪いの力を溜めこんでいてその分スケールが大きくなるの。」

バマミは魔女が消滅した場所に落ちている宝石を拾い上げる。

宝石は辺りにまぎれるような漆黒で不気味な雰囲気を漂わせていたが、それをバマミは気にすることはなかった。

「あとこれが魔女と呼ばれる敵が持っているものよ。」

「ソウルジェム…ですか？」

「形は似ているけどこれはグリーンフィードって言うんだ。ソウルジェムとは別物だよ。それは魔女の卵のようなもので、それが孵化することで魔女がこの世に誕生するんだ。」

「なんでそんな危険なものがここにあるのよ!？」

「確かに危険だけど、これは魔法少女にとってはむしろとても役に立つものなんだよ。マミ、見せてあげてよ。」

「分かったわ、キュウベえ。鹿目さん、美樹さん、これをちよつと見てくれる？ 私のソウルジェムが少し輝きを失っているのが分かる？」

ヘリオドールを思わせるような輝きを持つソウルジェムが手のひらに現れる。

闇を照らし安心感を与える光を輝かしていた先程よりも、少しばかり様相が異なっていた。

「本当だ。昨日見せてもらった時より少し濁ってる気がする。」

「魔法少女が魔法を行使するたびにソウルジェムは澱んでいくの。」

これが真つ黒になると魔法が使えなくなっちゃうんだけど…」

漆黒の宝石、グリーンフィードをバマミはソウルジェムに近づける。

するとソウルジェムにため込まれた澱みが、グリーンフィードに吸い込まれるように浄化された。

澱みを吸収したグリーンフィードはより漆黒を醸し出し、ソウルジェムは再び周囲を照らしだすように輝きを纏った。

「こつやつてグリーンフィードはソウルジェムの汚れを吸い取ってくれるの。」

「へえ、これがあれば魔法を使い放題になるんだ？」

「それがそんなに簡単でもないんだな、これが。グリーンフィードは汚れを吸収しすぎるとまた魔女が孵化する原因にもなるんだ。だから吸収量は限られてくるんだよ。」

「それじゃあ汚れがたまつたグリーンフィードはどうするの?」

「それは僕がちゃんと安全に処理するから安心して。」

一通り簡単に魔女とグリーンフィードの説明を二人にする二人と一匹。今夜で鹿目まどかと美樹さやかが経験した魔女退治の数は3にまで増えた。

その間巴マミは一度も苦戦を強いられることはなく、二人も瀬津そつまの護衛により無傷の生還を常に味わっていた。

そして今夜は初めて魔女のスケールを体感した二人であったが、結果だけを見ればこれまでの魔女退治と何も変わらなかった。

それほどまでに巴マミと瀬津そつまのコンビネーションは、安心感を与えるほどの鉄壁の布陣。

鮮やかに悪を倒す巴マミとそれをサポートする瀬津そつま。

奇しくもそれが鹿目まどかに、魔法少女への興味を持たせる大きな要因となっていた。

第7話 リップサービス

「まどかはいつもここで待ってるのか？」

多数の人が行き交うホールのソファアに腰を落とすと、開口一番鹿目まどかに訊ねる。

日が傾き顔を引っ込めようとしている時間帯だからか、入り口の自動ドアは開閉を繰り返している。

「そうだよ。一度さやかちゃんと一緒に上条君のお見舞いをしたことがあるんだけど、さやかちゃんがなんだか居辛そうな顔してたから。たぶん私達に上条君と話してるところ見られたくないんじゃないかな？」

3人のクラスメイトである上条恭介が入院する病院の一階。診察の受付をする人や、お見舞いを終え病院を後にする人で混雑しているホールに2人はいた。

鹿目まどかの肩にはキユウベえが定位置とばかりに居座っている。

「そんなさやかも見てみたいな。それでやたら弄ってやりたい。」
「それは可哀想だよ。」

美樹さやかが1人上条恭介の病室にお見舞いに向かっている間、鹿目まどかと瀬津そうまの2人は暇を持て余していた。今日こそは…、と上条恭介に挨拶をしようとしていた瀬津そうまは少し不満げにソファーに座っている。

「なあ、まどか？」

「どうしたの、瀬津君？」

「さやかと恭介って本当に付き合っていないのか？」

「うーん…さやかちゃんに聞いても、顔を真っ赤にして否定するだけだから分からない…かな？」

「そりゃ分かり易いこつて。まどかは誰かいないの？」

「えっ!?! えつと、わ、私はいないよ! 今はさやかちゃんや仁美ちゃんと一緒にいるだけで楽しいし!」

「そこは是非、俺の名前も言っただけで楽しかったな。」

え、どうしよっかな…と鹿目まどかが微笑みながら隣に座る瀬

津そつまを見る。

すると瀬津そつまの身体に半分ほど隠れていたが、エレベーターから出てくる美樹さやかの姿を視界の端に捉えた。

「あつ、さやかちゃん来たよ。」

「ん？ 今日はやたら早い逢瀬の時間だったな？」

「お待たせ〜。なんか今日は検査があるみたいで部屋にいなかったのよ。… ったく、わざわざ来てやったのに失礼しちゃうわね〜。…」

ソファーに座る2人の姿を見つけるや近付き、美樹さやかは溜め息混じりに話し始めた。

暗い表情とも相まって、会えなかったことを本当に残念がっていることがハッキリと目にとれた。

そんな美樹さやかの様子に、2人は先程の会話を思い出し軽く微笑む。

「なっ！？ 何で2人して笑ってるのよ！」

「そんじゃあ待ち合わせ場所に行きますか。」

「そうだね、瀬津君。」

「ちよつと待て〜い！ その『分かった分かった』みたいな顔するんじゃない！」

ホールの自動ドアを抜け、夕焼けに染まる病院を後にする3人。

一時間後には魔女退治へと向かっている筈の3人に、命懸けの闘いに意気込むような雰囲気は微塵も感じられない。

学校の用事でこの場にはいない巴マミが恐れていた、油断を生み出す心境へと変化してしまったことに2人は気付いていない。

3度の死闘も鹿目まどかと美樹さやかの2人にとっては劇を見ていたかのような高揚感や恐怖感を味わい…

そして同時に観客席から眺めるだけで物語に入り込むことはない、
という安心感を感じるものが魔女退治という認識に変わっていた。

…しかしそれも今日までのこと。

「あれ？ さやかちゃん、瀬津君。あそこ…何か…」

紅く染まる病院の駐輪場。

暖かなそよ風が3人の肌を沿うように流れる。

いつもの夕方、いつもの風景。

そんな『普通』は鹿目まどかが見つけた、病院の外壁に突き刺さる
宝石によって簡単に崩壊した。

「グリーンフシードだ！ しかも孵化しかかっている！」

「うそっ！？ なんてこんなところに！？」

どくどくと鼓動を奏でるように点滅を繰り返すグリーンフシードに、
キュウベえが表情を変えず声を荒げた。

グリーンフシードが突き刺さる壁の間近はすでに結界を形成しかけて
いて、屋気楼のようにゆらゆらと景色をゆがませている。

「まずいよ！ 早く逃げないと！ もうすぐ結界が出来上がる！」

「…しゃーなしだな。まどかとさやかはマミを呼んで来てくれ！俺はキュウベえと結界を見張っとく！」

グリーンフシードが孵化すれば魔女が身を守る結界を作り、そして結界に近づく一般人を迷いこませる。

そして迷い込んだ一般人は二度と帰ることはないだろう。

そうした危険性を考慮し、また二人を安全な場所へと避難させたい瀬津そうまは二人に背を向けグリーンフシードの様子をうかがう。

「うんっ！ 行こう、さやかちゃん！」

「…待って！ 私も残る！」

瀬津そうまの考えを読み取れたわけではないが素直に言うことを聞き、待ち合わせ場所である喫茶店へと脚を向けた鹿目まどかだったが、美樹さやかはうつむいて何かを考えたまま動かない。

鹿目まどかが急かすように呼び掛けると、美樹さやかは顔をあげて何か決意したような表情で口を開いた。

「…さやか。今はとりあえず俺の言うこと聞いてくれよ。正直何が起こってもおかしくない。…俺一人じゃさやか一人でさえ守り切れるか分からない。」

「そうだよ！ 危険だよ、さやかちゃん！」

「うん。私は残る。…そうまにだって何が起こるか分からないよ。うな状況を放っておきたくない。…私に何ができるかは分からないけど、何もしないよりはずっとマシだと思うから。」

手をぎゅっと握り歯を噛みしめる。

キッと睨むように瀬津そうまを見つめる美樹さやかの表情は、梃子でも動かないと告げているような鬼気迫るものだった。

「それにそうま一人に任せてなんかいられないわよ！ あたしだつてやる時はやるつてとこ見せてやるんだから！」

「…とりあえず時間をかけてる暇はないしな。それじゃあまどか。一人心細かいかもしれないが、マミを呼んで来てくれ。こっちは俺たちに任せてくれ。」

「瀬津君…分かった！ さやかちゃんも気をつけてね！」

不安げな表情を胸に押し込め、鹿目まどかは喫茶店へと走り出した。鹿目まどかの後姿を眺め、再び孵化しかけのグリーンフシードを見つめる二人。

「こいつ、あとのくらいで魔女になるの？」

「もう少し時間はかかりそうだけど、油断はできない状況かな。」

「そっか…」

「結界が出来てすぐは魔女もまだ目覚めてない。魔女が目覚めるまでは被害が広がることもないから安心しなよ。」

「そうなの？」

「ああ。だから俺たちのすべきことは、出来るだけ眠っている魔女に刺激を与えないように監視し、結界が形成された後も同じように刺激しないで魔女の巣食う結界の最深部までたどり着くことだな。」

「？ わざわざ結界の最深部まで行く理由は何よ？」

「僕がいればママがここに来た時、僕の気配を追ってすぐに最深部まで来ることが出来るんだ。周りに被害を出さないようにするには、魔女を素早く倒すことが最も有効だからね。」

点滅を繰り返すグリーンフシードに落ち着いていられない美樹さやか。先ほどより少しばかり点滅する速さとその輝きが増している事から、もうすぐ孵化してしまうのではないか、と気が気でない状態であったためだろう。

ちらりと病院を見上げ焦りの表情を浮かべる。

体も目に見えて震えてきていた。
そんな華奢な女の子の一面を見た瀬津そうまが口を開く。

「でも本当にさやかは恭介のことが好きなんだなあ。こんな思っ
てくれる彼女がいて恭介も幸せ者だなあ。」

「ぶっ!?! ちよっ、ちよっと何いきなり言ってるのよ!?!」

「だってさやかが残った理由はそれだろ? さっきから一つの病室
をずっと見つめてるし。」

「ぐっ…」

「はははっ。恋する乙女のパワーは無限大、てか?」

「ちよっと! 緊張感なくすようなこと言わないでよ!」

「緊張感なんてもん、今から準備したっけしようがないだろ? そ
れより準備しとくもんはそういうった感情が先だよ。」

「はあっ?」

「これから俺たちが向かうのは一歩間違えれば簡単に命を落とす場
所だ。両手じゃ数え切れないほどの危機が俺たちを迎えるかもしれ
ない。…そういうった時に一番役に立つのがそういうった『生への執着
心』だよ。いざって時に最後の力を振り絞れる奴は、大抵死にたく
ない理由を持つている奴だ。さやかも魔法少女になるんならそうい
った気持ちを大事にしなくちゃあっさりくたばっちまうぞ?」

揺れ動く景色は徐々に範囲を広げていき、グリーンシードも直視で
きないほどの光を帯び始めた。

そんな中でも美樹さやかは瀬津そうまの言葉に耳を傾け続け、自然
と体の震えを止めていた。

『生への執着心』

美樹さやかにとって上条恭介がそういうった力を生み出してくれる存
在かどうかは分からない。

しかしただ一つだけ感じていることが、美樹さやかに勇気と冷静さを与えた。

(もう一度あいつの笑顔が見たい)

グリーンフィードが閃光玉の様に辺りを光で包み、二人の身体を包み込んでいく。

二人の身体が周囲から見えなくなるほど輝きを放ったグリーンフィードは徐々に光量を抑え、夕焼けに染まる駐輪場を視界に収められるほどに戻る。

先ほどまでと何ら変わらない風景。

しかしこの場が光に包まれる前にはいたはずの二人の人間の姿が忽然と消えていた。

日はどんとんと傾いていき、まもなく夜の帳を迎える。

この日本当の魔女退治を二人は経験する。

第7話 リップサービス（後書き）

ヘリオドール

…神からの贈り物として崇められ、希望を表す石…

らしいです。

色といい、なんだか合ってる気がしたのでこの小説ではマミさんのソウルジェムはヘリオドールを模した物としています。

よろしければ感想お願いします！

第8話 SUPERNOVA (前書き)

アニメとは会話が前後しています。

それも瀬津そつまというイレギュラーによるものでもお考えください
さると助かります m () () m

第8話 SUPERNOVA

『二人とも何か願い事は見つかった？』

『うん…まどかは？』

『うん…』

魔女退治を終え、無傷の身体で夜の歩道を歩く4人。

魔法少女の力をその目で感じた二人にバママミが帰り道にふと質問をした。

一つだけ叶う奇跡を代償に魔法少女になる。

命をかけた選択ともなると二人とも慎重になるのは当然だろう。

『まあそういうものよね。いざ考えろ、って言われたら。』

『ママさんはどんな願い事をしたんですか？』

『そついや俺も聞いたことなかったな。よかったら教えてくれよ。』

『えっ？』

この場で唯一の魔法少女であるバママミ。

魔法少女である、ということは奇跡を叶えてもらったということになる。

3人はバママミの手に入れた奇跡に興味を向けた…がバママミが急に悲しげな表情を浮かべたことで少しの罪悪感がわき出てくる。

すぐさま鹿目まどかが質問を撤回するように慌てふためくが、バママミはその様子に思わずほおほほこらばせ、思い出すように自身の願った奇跡について口を開いた。

『私の場合は…考えている余裕さえなかった、っただけ。後悔してるわけじゃないのよ。今の生き方もあそこで死んじゃうよりはよほど良かったって思ってる。…でもね、ちゃんと選択の余地がある子

にはきちんと考えたうえで決めてほしいの。私にできなかったことだからこそ…ね。』

『マミ…』

夜空は星が照らすことはなく、今にも一雨降りそうな厚い雲に覆われている。

小一時間もすればバケツをひっくり返したような雨が降るかもしれない。

巴マミは過去の弱かった自分を思い出しながら、2度目にあたる4人での魔女退治の帰り道にそんなことを考えていた。

…ただ運命を憎むことしか出来なかった自分を。

第8話 S U P E R N O V A

生まれたばかりの使い魔が臓器のようなどす黒い色をした廊下を、ピョコピョコ飛び跳ねるように進んでいく。

脇目も振らず先の見えない廊下を進み、やがて使い魔は視認できなくなった。

そこでようやく、壁際に隠れていた瀬津そつまと美樹さやかはホッと一息吐いて姿を現した。

「キュウベえ。次はどつちだ？」

「今度はこつちだ。」

美樹さやかの肩から飛び降りたキュウベえは、三つ又に分かれた道を先導するように歩いていく。

その四足歩行する白い生物を、2人の人間が足音をたてないように追いかける。

結界内部では何が刺激になり、何が孵化を促してしまうのか分からない。

そのため自然と忍び足のような足運びになってしまっても仕方のないことだろう。

2人と1匹は朱の洞窟を歩いていく。

やけに地面は柔らかく、まるでマットの上を歩いているような気分にさせた。

「何回か魔女退治を見てきたけど、魔女の結界って現実とリンクし
てできるのね。」

「ん？ … ああ、確かにそうなのかもしれないな。」

美樹さやかが見つめる先にはグングニと蠢く紅の肉が、そして瀬津そつまの見つめる先には番号の書かれた真っ白な扉がズラリと並んでいた。

前者は病院のホール、後者は連なる病室を連想させる。

他にもベッドのような白と茶色の台座や手術器具が空間に突き刺さるように散らばっていた。

宙に浮かぶ人体模型に美樹さやかは少し気分を悪くした。

「もしかしたらこの結界を創った魔女は不治の病だったりしたのかもな。それで社会、世界を呪い、魔女へと形を変えた…てか。」

「人の悩みが集まって魔女になった、ってこと？ ……そう考えると魔女退治ってなんだか罪悪感感じちゃうわね。」

「…奇跡を望んで、結果呪いを生み出し魔女になる…魔法少女の存在を知る俺達にはかなりヘビーな話だな。」

人体が悠々と収まる程の巨大な円筒器だけが青白く光る真つ暗な部屋を2人は歩く。

キユウベえ曰わく、あと2、3分歩けば魔女の潜む最下層に到達する。

奥に進むにつれ魔女の呪いを身体にため込んでいくかのようになり、2人の心は重く縛られていく。

「この先だよ、そうま、さやか。」

キユウベえがとある鉄格子の前で立ち止まる。

鉄格子の上には『手術中』と書かれた蛍光ランプが付けられていて、チカチカと点滅を繰り返しながらも血を連想させる赤色を放っていた。

「そうま、キユウベえ。これが魔女なの？」

「そうだよ、美樹さやか。まだ孵化していないから分からないかもしれないけどね。」

鉄格子の奥、石柱の台座に祀られているようにグリーンフシードは突き刺さっている。

先程見た状態から変化はなく、鼓動を刻むように白、黒と発光を繰

り返していた。
耳を傾ければトクツトクツとリズム正しい音さえ聞こえそうなほど、
様子は安定している。

「ねえ、そうま…孵化する前にコレをどうにかしちゃえないの？」

しかし美樹さやかはその様子が嵐の前の静けさのように感じてしま
う。

このまま何もしないと、後で手痛いしっぺ返しを味わってしまうの
ではないか…と不安を募らせてしまう。

故に目の前の不吉の塊をどうにかしたい。
しかしその考えはすぐさま否定される。

「それはちよつと厳しいね。」

「キユウベえ？」

「今この魔女は所謂殻に閉じこめられている状態なんだ。周りに覆
われたグリーンフシードという殻を壊して、外に出ようと必死になっ
てるんだよ。」

「だからその殻ごと先に壊しちゃうとか…」

「駄目なんだよ、さやか。これが鶏の卵ならそれが出来たかもしれ
ない。でもグリーンフシードを人間の力だけで壊すことは、どんなに
鍛えても不可能なほどに強固なんだ。試しにグリーンフシードを叩き
つけてみても傷一つつかないどころか、殻の中の魔女を刺激して孵
化を早めることになる危険性もあるからな。」

「そっか…くう…っ！ここまで来て見てるだけなんて…」

「魔法少女ならグリーンフシードを破壊する事が出来るんだ。美樹さ
やかが契約してくれれば、直ぐにでもこの魔女を倒すことが出来る
よ。」

「えっ！？ マミさんなら出来るの？」

「その代わり魔女と戦うよりも膨大な魔力を使うことになるけどね。」

ソウルジェムの穢れを浄化するグリーンフィードを壊すのに、穢れを大量に溜め込む、なんて効率が悪い上にグリーンフィードも手に入らない。だからあまり前例はないね。」

魔法少女は魔女を退治するために存在する。

キユウベえと契約の際に得た奇跡の代償であるため、それは当然と言えた。

しかしそれと『世界平和のために魔女退治をするのが魔法少女』という考えは、似ているようで全くの別物である。

『競争になることも多いの。』

美樹さやかの頭に、バマミの自室で聞いた言葉が響き渡る。

暁美ほむらに襲われ、初めて魔法の存在を知った日に疑問に思っていた。

魔法少女同士は協力して闘えないのか…

それに対するバマミの返答がこれだ。

魔法少女が魔女を倒すために必要な魔法。

その魔法を行使する度に、魔法少女のソウルジェムは穢れを溜め魔法の使用に制限がかかる。

そして穢れを浄化する効果を持つのが、魔女が消滅する際に落とすことのあるグリーンフィードだ。

魔法少女にとってはグリーンフィードがなければ魔法の行使は十分にできない。

しかし魔女を退治してもグリーンフィードは最大1つしか手に入れない。

…そこで魔法少女同士の争いが生まれる。

そういつた経緯からグリーンフィードを手に入れる為に闘い、孵化直前の魔女を敢えて叩くようなことをしない魔法少女ばかりとなった。被害は生まれるかもしれないが、魔法を行使できなくなればまた別の場所に来る魔女に対応できない。

「もちろん単純に魔法を使用不可になることを嫌って、ということもあるのだが。」

しかしそれは美樹さやかにとって、今回限りは受容出来ない事柄である。

「ねえ、キュウベえ…質問なんだけどさ。」

「なんだい、美樹さやか？」

「叶えてもらおう奇跡、って『私以外が叶えたい奇跡』でもいいのかな？」

脳内に浮かぶのは左腕に包帯を巻かれた少年の悲しげな表情。

美樹さやかは続けて言葉を紡ぐ。

「世の中には私よりずっと奇跡を待ち望んでる人がいる。例えばそんな人のために奇跡を使う、ってのはありなのかな？」

「それって恭介のことか？」

「！？ た、例えばだって！」

「奇跡の対象が本人である必要はないよ。前例が無いわけでもないし。」

キュウベえは相変わらず表情一つ変えることなく、淡々と言い切った。

その言葉に美樹さやかは顔を綻ばせる。

幼なじみを想って産まれた奇跡を叶えてもらうために、口を開く。

喉は干上がり手は自然と握りこぶしを作っていた。

今一言奇跡を望めば、美樹さやかの運命は歪にねじ曲がる。
平穩無事な世界から、殺伐とした世界へと移り住む。
それでも美樹さやかの想いは変わらない。

胸の奥から絞り出すように、美樹さやかは大きく息を吐き出し…

「そこまでだ、さやか。」

溢れかけた言葉を瀬津そうまによって栓をされた。
グリーンフィードは今も妖しげに点滅を繰り返す。

「なっ…なんでよ？ そうま。」

「『恭介の怪我を治す』…それはさやかの願いじゃないだろ？」

「えっ？」

美樹さやかは短く言葉を吐き出す。

ぽかんとした表情を見せるのは、けして瀬津そうまに願いを見抜かれたことが原因ではない。

2人のクラスメイトの視線がぶつかる。

その間に周囲の様子は少しばかり様相を変えていて、無機質な栈橋や巨大な牛乳瓶、サッカーボールほどの飴玉やチーズが突如部屋の隅に現れていた。

もちろん美樹さやかはその変化に驚いた訳でもない。

先程までこの異質な空間で、笑顔を絶やさず話しかけてくれた瀬津そうまの表情が厳しいものに変わっていたことが原因だった。

「恭介の腕が治って、恭介がヴァイオリンをまた弾けるようになって…それでさやかは何がしたいんだ？」

「それ以上何を望むのよ！」

爆発するように自身の気持ちさをさらけ出す美樹さやか。

勢い任せに脊髄反射の返答。

「それだけじゃ恭介はさやかのものにはならないかもしれない。」

しかしその即答すら偽りである、と瀬津そつまは語る。

美樹さやかとは対照的に静かに淡々と、まるで子供を諭すかのよう
に話す。

脚の長い椅子が紅の地面よりニヨキニヨキと生え、頭上には薄気味
悪く笑う太陽のような光源が現れていた。

美樹さやかは何も話せない。

「いいか、さやか？ さやかがもしその奇跡を叶えたら、魔法少女
として魔女を殺さなきゃならない。その事実は恭介に一生理解され
ることはないんだぞ？ 下手したら一度も恭介の演奏を聞くことが
出来ず死んじまうことだってあるんだぞ？」

「そつ…そんなの…」

「それともさやかは奇跡だけ叶えて、後は魔女と戦わないで平穩無
事に過ごす魔法少女になるのか？ さやかはそんな薄情で打算的な
人間じゃないだろ？」

ぴよこぴよことキュウベえが尻尾を左右に振り回し、二人の人間を
紅い瞳で見つめている。

その時笑顔を絶やさず…というより笑顔を張り付けているキュウベ
えの耳がピクンと反応した。

『そうまくん、キュウベえ。状況は？』

『さやかちゃん！ 瀬津君！ 大丈夫！？』

突然頭に響いた声に二人は頭上を見上げる。

見上げた先にはもちろん人影はなく、その声がキュウベえによる念

話であることに美樹さやかは少し時間がかかった。

『ママか。とりあえずは問題ないな。見たところまだグリーンフシードは安定してる。』

『そうまの言う通り、すぐに孵化する様子はないよ。むしろ迂闊に大きな魔力を使って卵を刺激する方がまずい。急がなくていいから、なるべく静かに来ててくれるかい？』

『わかったわ。それじゃあ二人とも、待っててね。行くわよ、鹿目さん。』

『はい。さやかちゃん、瀬津君。無茶しないでね。』

頭の中に響く声が遠のいていく感覚。

「とりあえず今回は何とかかなりそうだな。」

どくんどくと鼓動を繰り返すグリーンフシードに目を向けながら、瀬津そうまは少し安心したような表情を浮かべた。

今はまだ脅威とはなっていないが、瀬津そうまの目の前には孵化しかけているグリーンフシードが存在している。

最悪の場合美樹さやかを守りながらの戦いを強いられていたため、巴マミの到着は少なくとも一息吐くことが出来る程の安心感を与えた。

「とにかく今日は俺とママに任せろって。そんな焦って決めることでもないんだからさ。」

美樹さやかの頭をポンポンと、子供をあやすように撫でる。

感じる柔らかな重みに片目を閉じることで反応する美樹さやかの表情は優れない。

むしろ瀬津そうまに恨むかのような視線を向けていた。

(何も知らないくせに、何を分かるつてのよ…)

自身を賭けてもいいと思えた願いを見破られ、拳げ句の果てに否定された。

魔法少女でもない、自分の命を軽視するかのように魔女退治に参戦する瀬津そうまに否定されたのだ。

例え自己満足な願いだとしても、それを自己満足で戦う瀬津そうまに言われたくない…美樹さやかは不満の表情を浮かべたまま、そんなことを考えていた。

…そしてこの時を一つのきっかけとして、一つの運命は歪みを帯びていく。

その分岐点を見届けているのは白き奇獣の紅い瞳と…

少しずつではあるが、点滅の感覚を早めているグリーンフシードだけだった。

第8話 SUPERNOVA（後書き）

ローウィン ローウィン ローウィン

ご意見感想よろしくお願いします！
本当にお願ひします！

第9話 明日の景色は水面のように(前書き)

グロ注意!

…といっても描写技術が無いため、意外とそうでもないかもしれないです。

苦手な方はお戻りください。

第9話 明日の景色は水面のように

その日の空は雲が所どころ顔を出しているが、雨をにおわせるような天気ではなく透き通るような蒼色を広げていた。

そこに立ちこめる暗煙と何かが燃える匂い。

旅行日和ともいえる陽気な天気には似合わない負の空気。

バママミの瞳にはその両極端の光景を同時に捉えていた。

そしてそのバママミはぐしゃぐしゃに拉げた車の微かに残ったスペースにすっぽりと収まるように身を縮めていた。

吐息は荒く背中が燃えるように熱を帯びている。

わずかに残る感覚から何か細く硬いものが背中に突き刺さっていることがわかった。

痛みには体を震わすたびに更なる痛みが顔をゆがませる。

家族旅行の帰り道、有料道路を走るバママミ家の車が玉突き事故に巻き込まれた。

原因は前を走る大型トラックの居眠り運転。

車体を横にして道路をふさぐように横転したトラックを、運転手であるバママミの父親は必死にハンドルを左に切るも避けることができず、車は時速数十キロのスピードのままトラックに衝突した。

見るも無残に破損した車内に木霊するのは一つの呼吸音のみ。

後部座席は完全に潰されていて、助手席に座るバママミが目を向けても鉄くずが突き刺さっているようにしか見えない。

後部座席にはバママミの家族が座っていたのだが、その影すら見ることが叶わなかった。

…しかしそれは逆に幸運であった。

続いて運転席に座っていた父親の様子を横目に見る。

この時あえて後部座席を先に見てから運転席をちらりと見たのは、

生物として残されていた本能の所為かもしれない。

普段は優しく微笑みかけてくれる父親。

そんな安心感を与えてくれる表情は紅く染まり、ハンドルに眠るように突っ伏していた。

右腕を枕にして助手席に顔を向けて持たれる父親。

普段と違う父親の姿に吐き気を感じるも、吐くことすら体力的に許されない。

血の気の失せた表情に真っ赤にぬれた青のＴシャツ。

そしてあるはずの場所がない左腕。

肩から先にあるはずのそれはバマミの足に絡み付くように転がっていた。

車のシートは黒ずみ、血とガソリンのおいが漂う。

車の外からは騒ぎ立てる人の声が聞こえるが、助けを呼ぶこともできない。

(ここで死ぬんだ…)

小さな体軀を震わせ、暗煙に包まれていく空を眺めるバマミ。

悲惨な光景に見てもいられなくなったバマミは、何もかもあきらめるように座席に身をゆだねる。

まさにその時だった。

微かに開いていたバマミの瞳が何か物体の動く影を捉えた。

力を振り絞るように髪の毛と同じ色をした瞳を動く物体に向ける。

ダッシュボードの上、フロントガラスの破片が散らばるそこには見たことのない白の生物がバマミを見下ろしていた。

震える体軀を抑えて必死にその生物に手を伸ばす。

抑え切れない身体の震え、生命への執着を感じさせる少女の願いに、白の生物は口を開くことなく話しかけた。

「僕なら君の願いを一つだけなら叶えてあげられる。たとえば『助

けてほしい』みたいな願いだつてね。」

そしてバマミは願った。

白の生物が例を挙げたことそのままに願いを…奇跡を叶えてしまった。

第9話 明日の景色は水面のように

手と手を握る鹿目まどかとバマミ。

先輩として、後輩である鹿目まどかの不安を取り除くため結界に入ってからずっと影が一つに重なったままだ。

その甲斐あつてか鹿目まどかの瞳には不安の色は見えない。

時折現れるナースキャップをかぶった巨大な目玉の使い魔に怯えることはあるが、その際もバマミの素早い指示の元、すぐさま物陰に隠れるなど精神的には安定しているようにバマミからは見えた。

ぶよぶよとした感触の廊下を手を引き歩く二人。

先に行くキュウベえが通った道をバマミが感じ取り、最短ルートで結界の最下層へと降りていく。

結界は魔女の孵化に備えて形を変えているため、先行する二人とキュウベえが通った道とは少しばかり様相が変化するも、バマミの魔女退治経験の豊富さにより難なくグリーンフィードの元へと近づいていく。

「鹿目さん、大丈夫？」

「はい、マミさん。」

「もう少しで最深部に着くから頑張つてね。あとは…」

手を引くバマミが鹿目まどかの様子をうかがう。

緊急事態とはいえ一般人である鹿目まどかを引きずりまわしている事は変わらない。

何度か体験しているとはいえ、慣れることのない異世界に精神的に疲弊していてもおかしくないだろう。

鹿目まどかの顔を覗き込み疲労を確認するが、鹿目まどかの言う通り外見から疲れた様子は確認出来なかった。

鹿目まどかの様子にバマミは微笑みを浮かべた。

しかしその笑みも鹿目まどかの背後に現れた存在に固まり、言葉を詰まらせる。

そこには結界内をうろつく使い魔の類ではなく、結界内に存在するはずのない人影が一つ。

歩きたびにたなびく長い髪にスツと整った顔立ちに、二人と同じ見滝原中学の制服。

黒のストッキングのためかすらつと伸びた脚が、鹿目まどかとバマミの二人に対するように肩幅に広げられていた。

「言ったはずよね。二度と会いたくないって。」

「ほむらちゃん…」

中学生とは思えないほどのプレッシャーを2人に叩きつけ、鹿目まどかのクラスメイトである暁美ほむらは結界内に佇んでいた。鋭い眼光が2人を貫く。

「今回の魔女は私が狩るわ。あなたたちは手を引いて。」

「そもいかないわ。美樹さんやそうま君、それにキュウベえを迎えにいかないよ。」

「その3人の安全は保証するわ。」

「信用すると思ってる?」

金色と漆黒の瞳がぶつかり合い。

それは1人蚊帳の外になっていた鹿目まどかの身体を震わすほどのプレッシャーのぶつかり合いだった。

1秒を何倍にも感じるほど空気は重く、実際は数秒間の睨み合いが鹿目まどかには数分にも感じていた。

火花が散りそうなほど睨み合う2人。

しかし2人の心境には大きな差があった。

その数秒の間、常に戦闘態勢を解かなかった巴マミに対し、暁美ほむらは自然体のまま瞳をそらさない。

有無を言わさない強制力を瞳に乗せながらも、言葉通りに敵意がないとアピールするような…

初めから敵意をむき出しにする巴マミに対し、暁美ほむらはそんな相反する2つの要素を持ち合わせていた。

暁美ほむらは髪を掻き上げる癖すらも相対しているこの状況で行っていた。

長い黒髪が宙を撫でるようにふわりと持ち上がる。

鹿目まどかにとって場違いにも気品さを感じてしまうほどに、その暁美ほむらの動作に目を奪われていた。

暁美ほむらの一つひとつの動作は堂々とした立ち振る舞いであり、

それと同時に自分自身の行動に絶対の自信を持つかのようなオーラがあり、それは鹿目まどかが持ち合わせていないものでもあった。自身に無いものに羨望の眼差しを送るのは当然のことだろう。

しかしその隙を魔法少女として経験値の高い巴マミが逃すわけがなかった。

巴マミが左腕を暁美ほむらに向ける。

それを合図に暁美ほむらの足元から鎖が描かれた金色のリボンが二本、目標を縛り付けるように動き回る。

脚、腰、両腕と暁美ほむらの身体はさながら金色のさなぎのようにその身を包み込まれ、中につるしあげられた。

胸元にはリボンを留める花を模した鍵穴が浮かび上がる。

巴マミが発現した魔法のリボン。

これは魔力に反応し伸縮する性質を持っている。

リボンに魔力を付加することでリボンは自ずと閉め上がり、そのリボンに結ばれた対象物をより強く拘束する。

魔力を垂れ流す魔女に対して絶対の拘束具となるが、それは魔法少女に対しても言えることだ。

「こ…こんなことしてる場合じゃ…」

「もちろん怪我させるつもりもないけど…あんまり暴れちゃ保証しかねるわ。」

「…今度の魔女はこれまでの魔女とわけが違う。」

「おとなしくしてれば、帰りにちゃんと解放してあげる。…行きましょう、鹿目さん。」

「はっ…はい…」

「まっ！ 待っ…くっ！」

先ほどまでの余裕を見せた表情は消え去り、まるで誰かを心配するかのような表情を浮かべ二人を引き留めようとする暁美ほむら。

しかしそれは、つい無意識に込めた自身の魔力に反応したりボンの強い締め上げによって上手くはいかない。

リボンを引きちぎるためには魔法少女としての強大な力が必要なのだが、その強大な力を出すための魔力にリボンは反応する。

締め上げられる痛みにため込む魔力はすぐに霧散してしまう。

文字通り暁美ほむらは手も足も出ない状況であった。

締め上げられる苦痛に言葉を発することもままならない。

故に2人を…奥へと進むバマミに少し躊躇いながらもついて行く鹿目まどかを呼び止めることも出来ず、ただ2人が死地へと向かうのを歯噛みすることしか出来なかった。

「キユウベえ。目測でこいつはあとのくらい保ちそうなんだ？」
「そうだね…10分は保つと思うけど、それ以上は僕にも分からないよ。」

腕時計をチラリと確認する。

バマミが結界内に入ってからまだ数分しか経っておらず、最深部に到達するのはもう少しかかるだろう、と瀬津そうまは認識した。

瀬津そうまの隣には不機嫌そうな表情を隠そうともしない美樹さやかが、突然創られた椅子に腰をかけていた。

「さやか…一応結界内なんだから、注意はしとけよ？」

「分かってる…」

瀬津そうまはふう…と一息吐く。

手を伸ばせば届くであろうグリーンフシードは妖しく黒光り続けた。

「そついえば今日は金属バット持ってきてないんだな!? どうして…」

「お見舞いに金属バット持ってつてどうするのよ? いつもは一度家に取りに行つてたの。学校に持ってきてたのは最初だけ。」

「…そうですね。」

美樹さやかは携帯電話が圏外であることを確認しながら、片手間に答えた。

表情はいまだ不機嫌のまま変わらない。

瀬津そうまを感じる重たい空気は、2つの原因によって形成されていた。

(…つたく、なんなのよ。)

圏外であるはずの携帯電話を開いては閉じ、手持ち無沙汰を紛らわしていた。

口には出さずも不満を浮かべる美樹さやか。

そしてその原因は隣で辺りを、そして美樹さやかを伺つ瀬津そうまであった。

美樹さやかにとって、上条恭介とは唯一無二の存在である。

またそれは個人的な感情を度外視しても変わらない評価だ。

大きな波を起こすビブラート。

曲調に合わせリズムよく弦を握り、離す指運び。

ヴァイオリンはまるで自身の身体の一部のように音階を紡いだ。素人目に見ても上条恭介は際立った存在感を持ち合わせていた。偶々同じクラスになっただけで、1つ勲章が付いたかのようにクラスメイトは自慢を繰り返し、誰もが上条恭介を持って囂す。それは心優しい上条恭介にしてみれば照れくさいものではあるが、それよりも多くの充実感を与えていた。

しかし今はもう過去の人物。

中学生ということも関係しているのかもしれない。

事故で左腕が麻痺した上条恭介を見舞いに来る人物は、日を追うごとに数を減らしていった。

自然と病室で一人過ごす時間が増えていく。

外から聞こえる楽しげな雑踏を見下ろすことが増えていく。

そして人と話す時間が減っていった。

そんな寂しさに胸を痛めていた上条恭介を美樹さやかはずっと見続けてきた。

クラスメイトと他愛もない話しをすることを…

お気に入りの公園に散歩に行くことを…

そしてヴァイオリンを弾くことを続けていたいということも手に取るように理解していた。

そんな上条恭介を助けたいと思う気持ちを、瀬津そうまに否定された。

ただかたか2週間程度の付き合いである、クラスメイトにそれを否定されたのだ。

美樹さやかの携帯を弄る指運びが早くなる。

「…なあ、さやか。ちょっと話してもいいか？」

「…なによ？」

ぼんやりと明かりを点ける待ち受け画面から目を離さず、美樹さや

かは反応した。

「俺はこれまでさ、色んな所に行ったことあるんだ。」

「はあ？」

「隣の喫茶店、隣の遊園地、飛行機に乗って海に行ったこともあるんだ。スゲ〜だろ？」

つい美樹さやかは拍子抜けた声を上げてしまった。

何故なら瀬津そうまが神妙な面持ちで話し始めた内容が、想像していたものとは大きくかけ離れていたから。

「またも奇跡（願い）を否定されると思ったからだ。」

「隣の喫茶店ってメツチャ渋いマスターがいてな。そりやもう小説から出てきたんじゃないか、つてくらいダンディーマスターなんだよ。男としてああいう大人の魅力には憧れちまうんだよな。」

「そ、そうなんだ……」

「一回弟子入りさせて貰いたくて、土下座したくらいだぜ！？ これまたカッコ良く断られたけどな。」

瀬津そうまは楽しそうに身振り手振りを加えながら、マスターの説明をしていく。

キユウベえも興味有り気に耳を傾けていた。

「あとな、海に行った時に滅茶苦茶ヤンキーっぽい奴がいたんだよ！ そいつ金髪にグラサン、腕に彫り物してる奴なんだけど、意外と可愛い性格で子ども達と砂の城作ってるんだぜ！？ 崩れた途端子ども達よりも悔しがってるし、グラサン取ったら滅茶苦茶円らな瞳してんのな！ ついつい笑っちゃまったな〜！」

「はあ？ なにソイツ？ なんて無駄にぶってるのよ？」

瀬津そうまの体験談は続き、遂には美樹さやかも釣られて笑みを見せた。
キウウベえも何故だか楽しげに笑っているように美樹さやかには見えなかった。

「俺がソイツばっか見てたらな？ 連れが『もしかしてホモ？』なんて真面目な顔で聞いてくるもんだから、俺もムキになって否定しちまったよ。」

「ああ、確かにそうまはそんな気があるかも…」
「どこがだよ!？」

すっかり教室で話すかのような、普段の空気が2人の間を纏っていた。

美樹さやかも携帯をスカートのポケットに仕舞い、今は瀬津そうまに顔を見上げる。

「それでお昼ご飯はどうしたのよ？」

「そりゃ勿論おばちゃんのカレーを食ったよ。意外と美味くては2人して驚いたもんだ。」

瀬津そうまが話す体験談は様々な人物が入れ替わり出てくるのだが、話し方の為か想像のしやすい個性的なキャラクターばかりで、美樹さやかにもすんなり頭に入っていく。

会ったことのない人物に、親しみさえ感じる。

美樹さやかはその場を見ていたかのような笑みを浮かべていた。

「でもな、さやか。」

「なによ?」

美樹さやかの返事は先ほどと同じ言葉なのに、捉えられる印象は1

80。違う。

満開の笑みとは言えないまでも、次の瀬津そうまの言葉を期待する表情だった。

「死んだらこんな出会いもないんだぜ？」

「…えっ？」

しかしそれも瀬津そうまによって変えられてしまう。

「生きてれば会えたかもしれない渋いマスター、優しいヤンキー、料理の美味いおばちゃんにも会えなくなっちゃうかもしれないんだ。」

「楽しんで話していた瀬津そうまの瞳は悲しげなものに変わり、表情も優れない。」

「生きてりゃ色々できたことも、死んだら出来ない。それはみんな同じなんだ。子供でも大人でも…そして魔法少女でも、な。それに俺は…」

「そうまっ！　魔女が孵化し始めたよ！」

そんな2人の会話…というより瀬津そうまの説得は無情にもグリーンフシードに邪魔をされた。

言葉の端はキュウベエの声により遮られる。

瀬津そうまはすぐさまグリーンフシードの様子を伺うと、キュウベエにバマミへの連絡を頼んだ。

グリーンフシードは卵形の様相から大きく形を変え、影のような触手を上下左右に伸ばしていく。

魔女の孵化がこの時始まってしまった。

「ママ達はもうすぐ到着するよ！」

「了解、キユウベえ！ さやか、とりあえず俺達は…ってヤバい！」
「へっ？…きゃっ…」

瀬津そうまは咄嗟に美樹さやかを力強く抱き寄せる。

1つの塊とかした2人はグリーンフィードから突如発生した突風に、弾丸のごとく吹き飛ばされる。

10メートル程後方に飛ばされた塊は、鈍い音を立て壁へとぶつかり、勢いがなくなるとゆるゆると力無く地面へと倒れることとなった。

「痛っ…大丈夫か、さやか？」

「…なんとかね。ありがと、そうま。」

「気にすんな。それよりとりあえず物陰に隠れよう。」

吹き止むことのない突風に身体を煽られながらも、2人は巨大なケ―キのような形の障害物に身を隠した。

そこで美樹さやかは一息吐いて、自身の身体を確認する。

髪は乱れているものの、怪我らしい怪我は特に見当たらない。

打ち付けられた衝撃で少し背中が痛む程度だ。

しかしそんな痛みを気にしていられないほど、事態は悪化している。ここに魔女が生まれるのだ…そう易々と休んでもいられない、と本能的に判断していた。

遠くの方で小さく爆発音が反響している。

2人には耳なじみのあるその音だけで、バママと鹿目まどかが近くにいることが理解できた。

「どうする、さやか？ 君が魔法少女になって、魔女を食い止めて

「おくかい？」

「…ううん。今回はマミさんと…そうまに任せる。」

美樹さやか
の奇跡はまだ叶わない。

それは美樹さやか自身
が下した決断だった。
訊ねたキュウベえは興味
がなさそうに頷く。

「任せとけ。俺が守り抜いてやる。さやかもまどかも、マミもキュウベえも全員を無事に戻してやるからな。」

美樹さやかの方に振り向いた瀬津そうまは一言そう応えた。

その時、大人びた表情から浮かびあがった満面な笑みに、年相応の子供らしさを美樹さやかは初めて瀬津そうまから感じていた。

第9話 明日の景色は水面のように(後書き)

今回は幕間のような話でした。

あまり出来も納得いくものではなかったですが、書いたからには出しておきたい…

といった気持ちです(笑)

本番は次話に…

感想よろしくお願いします！

第10話 ニフラム（前書き）

グロ注意です。

苦手な方はお戻りください。

あと原作3話を見ていない方を完全に置いてけぼってます。

第10話 ニフラム

第10話 ニフラム

「お待たせキユウベえ、そうま君、美樹さん。」

「悪いな、マミ。ちよつと俺だけじゃどうしようもないみたいだ。」

ぐにゃぐにゃと形を変えていくグリーンフシードから発せられる威圧感に、たどり着いたばかりの鹿目まどかは固唾を飲んだ。

禍々しいだけでなく心に直接的に語りかけてくるような…

不安を駆られるその物質に身震いが止まらない。

「任せて、そうま君。今日は一気に決めちゃうから！」

「あれ？ なんかマミさん機嫌いいね？ 何かあったの、まどか？」

「あははは…なんだろうね？」

美樹さやかはこの不安に慣れていくかのようにあっけらかんとしていて、鹿目まどかにバマミの様子の変調に疑問を浮かべている。

渴いた笑い声を洩らしながら、美樹さやかの精神的な強さに羨望のまなざしを向けていた。

その美樹さやかの強さも、バマミと目の前の魔女への対応策を練っている瀬津そうまによるものだということは鹿目まどかには分から

ない。

「来るよ、マミ、そうま。」

キュウベえが告げると同時にグリーンフィードの変体がピタリと止まる。

時が止まったかのようにその場にいた全員が身動き一つとることをやめてしまった。

そして時は動き出し、ゆるゆると形を変えていたグリーンフィードは急速に動きを速めていく。

四方に広がっていた影がグリーンフィードを中心に集まり、膨張し、形を作っていく。

どこまでも光を吸いこんでいきそうな影は、徐々に色味を帯びていき赤みを、そして白みを付加していった。

「魔女が出てくるぞ……」

「先手必勝ね。」

影はキュウベえを一回りほど大きくした程度の大きさへと収束していき、台座は細長い四脚椅子へと形を変えていく。

魔女へと姿を整えた影は、台座から早変わりしていった椅子にもたれ、くたつと力が抜けた状態で正体を現した。

にごった水色の瞳にけだるげに垂れ下がったピンクの毛色をした耳、手脚は短く首には赤の水玉のマフラーが巻かれたぬいぐるみ。

それがこの結界を形成していた魔女、シャルロツテの姿であった。瞳が輝かしいものなら女の子の部屋にあっても違和感のないほど、

小さくか弱く柔らかそうな姿に鹿目まどかと美樹さやか、そしてバマミさえも少しばかり拍子抜けしてしまった。

「悪いけど今日は速攻で片づけるわよ！」

先手必勝、とばかりにバマミは魔女へと向かう。
魔力で具現化したマスケット銃を横薙し四脚をへし折ると、返す刀で重力に引かれ落ちる魔女を砲身で殴り飛ばす。
中学生の女の子とはいえ魔力を編み込んだ一撃は魔女をいとも容易く弾き飛ばした。

勢いからして人間ならば複雑骨折していてもおかしくないほどの速度で、魔女はどす黒い壁にぶち当たる。
しかしその程度でバマミは止まらない。

殴打に利用したマスケット銃を発砲、魔女の頭を貫通。
単発式のマスケット銃を何丁も生み出し、魔女の身体に至る所に魔力の弾丸を撃ち込んでいく。
マシンガンの如く連射される弾丸は、魔女の柔らかな生地をいとも簡単に貫いていく。

並大抵の魔女であればすでに絶命し、結界を崩壊させていただろう。
しかしバマミの追撃はまだ終わらない。

(身体が軽い…本当に最高の気分ね。)

魔女を貫き壁にめり込んだ弾丸数発が形を変え、バマミに良く似合う金色のリボンとして弾痕から飛び出す。

自由に伸縮するそれは、抵抗なく地面に倒れ伏せる魔女を縛り上げ、宙へと釣り上げていく。

まるで生け贄の祭壇に上げられた魔女。

そして魔女狩りの執行人であるバマミが最期に綱を切る。

「…マミ、油断するなよ。」

「大丈夫、そうま君！ これで最期！ 『テイロ・ファイナーレ』！」

既に巨大な砲身は魔女を捉え、魔女はマミの魔力により束縛されて

いる。

この圧倒的優位な状況にいらながらも、瀬津そうまは集中を切らさない。

それが身体能力のみでこの闘いの場に立つことが出来る瀬津そうまの心得であるが、今回ばかりは他にも理由がある。

「やった!!」

バマミの必殺技が魔女を貫くと同時に美樹さやかが歓声をあげる。

鹿目まどかは羨望の眼差しでバマミを見つめる。

そして強大な魔力をぶつけたバマミも、2人の喜ぶ声に反応して笑顔を見せた。

これまで全ての魔女を薙ぎ倒してきた一撃が決まったのだ。

一息吐いてもおかしくはない状況だろう。

…しかしバマミは暁美ほむらが告げた言葉を失念していた。

『…今度の魔女はこれまでの魔女と訳が違う』

「!?! マミっ! 避けるっ!」

「えっ?」

瀬津そうまの声に振り返るとそこには巨大な黒い魔女が、大きな口を開いていた。

バマミをひと飲み出来るほどの口は、ゆっくりと獲物を捕食するようにバマミの頭に狙いを定め、その鋭い牙を下ろそうとしていた。

(ま…じょ? どうして…)

バマミの必殺技『ティロ・フィナーレ』を受けた魔女はその身を滅

ぼしていなかった。

そもそも巴マミは魔女本体に対して、実は一度も有効打を与えることが出来ていなかった。

シャルロット：ぬいぐるみのようなその外見に身を隠し、魔法少女が油断した時正体を現す。

本体は自由自在に大きさを瞬時に変えることができるため、本体が姿を現し巴マミに近付くまで1秒程度の時間しかかからなかった。故に油断していた巴マミは反応できない。

振り返り、魔女が今まさに噛みつこうとする様を眺めることしか出来なかった。

鹿目まどかと美樹さやかも突然の事態に声を上げることできない。…そして巴マミの命を切る断首刑は魔女により敢行された。

(ゆっくり…閉じていく…)

巴マミの瞳に映る光景はコマ送りで再生される。

ゆっくりと閉ざされていく魔女の口。

真っ白な口の中は巴マミを待ち望んでいて、涎のような透明な液体を滲ませている。

視界はどんどん狭くなっていく。

…そして目の前は漆黒に包まれた。

巴マミは最後に考えていた。

この光景を見て、鹿目まどかの考えは変わるのだろうか…

残酷な状況をも乗り越えて魔法少女になるのか…

そもそも鹿目まどかはここから生きて帰れるのか…

目を見開いても先を見ることが出来ない状態で、バママミはぼんやりと考えていた。

「瀬津君!？」

「そうま!？」

そこでバママミはあることに気付く。

何故目を見開けるのか…

何故鹿目まどかと美樹さやかの声をいまだ聞き取れるのか…
そしてその答えはすぐさま無理やり理解させられる事となる。

「ママミ! しっかりしろ!」

「えっ…?」

バママミの腹部に垂れる液体。

顔にのしかかる何か。

バママミは漸く何か自身が瞳を塞いでいることに気が付いた。
何一つ欠損することない右手でそれを取り外す。
すると漸く瞳は光を受容した。

「大丈夫か! マミ!」

「そうま…君?」

「良かった…無事みたいだな。」

バマミが倒れ込んでいる体勢から見上げた景色には、1人の男の子。瀬津そうまの安心した表情がそこにはあった。

どうやら瀬津そうまが助けてくれたのだと、バマミは回らない頭で理解することができた。

その証拠とばかりにバマミの身体を、瀬津そうまが右腕で抱え込むように支えている。

「とにかく立てるか？ 話はそれからだ。」

「う…うん。」

瀬津そうまの言葉を受けゆっくりと立ち上がる。

そしてそのまま辺りをじっくりと見渡すと、先程本体を現した魔女が舌なめずりをしてこちらを見ていた。

「魔女はまだ健在なのね…」

「…そういうことだ。とりあえず今は退くぞ。」

「…冗談じゃないわ。私を虚仮にした罰、ちゃんと払ってもら…わ

…」

弱気な発言をした瀬津そうまにバマミが反抗する。

自分はまだ闘えるのだと瞳に力を込め、瀬津そうまに視線を向けた。しかしそこで勢いはピタリと止まる。

…いや、止められた。

「そ…そうま…君…腕…左腕は？」

「……………」

身体は自然とガクガクと震えだし、歯がかちかちと鳴り響く。そこにはどくどくと左肩口から流す瀬津そつまの姿があった。左腕が丸ごと消失しているその姿はやけに歪で、普段の瀬津そつまとは何か違う人物の様に感じられた。出血を抑えるように右手で傷口を押さえ込むも、血液は流れることを止めない。

そこでバマミは理解してしまった。

瀬津そつまが左腕を犠牲に自身を助けてくれたこと。

腹部に落ちた液体が瀬津そつまの血液だったこと。

魔女が舌なめずりをしていたのは、食事の後に唇についた何かを拭き取っていた動作だったこと。

…そして今自身の右手が掴んでいる物が『瀬津そつまの左手首』だということ。

「っ!?!? きゃっ!?!?」

バマミは事実を認識すると同時に、瀬津そつまだった物を放り投げる。

それを魔女は犬のように口でキャッチし、味わうように咀嚼を始めた。

右手は紅く染まっている。

「あっ……………あっ……………!?!?」

「落ち着け、マミ。俺は大丈夫だ。」

「で…でも…」

ぼたぼたと零れ落ちる血液は目を覆いたくなるほどの量。
瀬津そうまの表情も顔面蒼白なものへと変化していた。

吐く息も絶え絶えで、どう見積もっても一刻も早く病院へと向かう必要があった。

しかしバママは動かない…いや、動けない。

縮こまるように自身を抱き締め、脚をがくがくと震わせるだけだ。

「ママ！ 聞いているか!？」

「わ…私の所為…だ…」…ごめんなさい…」

「っ…しゃーないか…悪いな。」

瀬津そうまは血液がベツタリと付いた右手でバママの腕をつかむ。

するとすぐさま手を引いて、バママを鹿目まどかと美樹さやかの元へと無理やりぶん投げる。

勢いに身をゆだね、バママの身体は美樹さやかの胸へと飛び込む。

「まどか！ さやか！ ママを連れて先に逃げる！ キュウベえは
2人を案内してくれ！」

「でも…瀬津君…」

「いいから早く！ 全員死ぬ気か！」

雄叫びをぶつけられた2人は身体をびくりと震わせる。

その声があまりにも普段の優男である瀬津そうまの声色とは、あまりにもかけ離れていたからだ。

しかし2人も動けない。

魔女の恐怖、漂う血の匂い、そして歪なクラスメイト。

破裂しそうなほどの鼓動を刻む心臓を鎮めることすらできず、胸を抱きしめることしか出来なかった。

「ほら、魔女さんよ…美味そうな獲物が目の前にいるぞ？ なかなか美味そうな匂いだろ？」

右手に付いた血液を振り払いながら、魔女へと挑発を繰り返す。

3人が逃げるまでの時間稼ぎを、瀬津そうまは1人で行おうとしていた。

左腕を丸々失ったばかりの状況で、傷口から漏れる血液を必死に押さえながら。

挑発に乗るように魔女は瀬津そうまに向かって、その伸縮自在の身体を伸ばしていく。

そして一度限りの鬼ごっこが始まった。

鹿目まどかと美樹さやかの身体はまだ動かず、バマミに至っては壊れた玩具のように謝罪の言葉を繰り返すだけだった。

状況は刻一刻と悪化していく。

唯一魔女と対抗する手段を持つバマミが戦闘不能なため、RPGで言えばゲームオーバーであろう。

そこに一つの救いの言葉が紡がれる。

「まどかかさやかが僕と契約すればいいんだよ。」

「えっ…」

それは白き奇獣からの甘い誘い。
救いの道の一つ指し示す言葉。

「どちらか…いや、2人が魔法少女になればあの魔女を倒せる。全員が助かるよ。そうまの腕だって治すことができる。」

2人の鼓動がドクンと跳ね上がる。

喉は渴き、唾液を一息で飲み込んだ。

瀬津そうまは3人から魔女を引き離そうと、出来るだけ長く、遠くへと逃げる。

魔女の凄まじい速さで迫る突進に、一度たりとも当たることなく紙一重に避け続けていた。

それは魔法少女ではない一般人からしてみれば奇跡の所行であり、瀬津そうまの並外れた身体能力と反射神経を持ってして初めて可能となる神業であった。

しかしそれも長くは続かないだろう。

大量の出血により体力は急速に減り続ける一方であるだけでなく、左腕を無くしたことで身体のバランスを上手く取ることもできない。2人から見ても、瀬津そうまが耐え続けることは不可能である、と判断していた。

「さあ、どうする？」

「キユウベえ…」

この時既に鹿目まどかと美樹さやかに迷いはなかった。

それぞれが叶えたい奇跡も頭に浮かび上がっていた。

あとはそれを口にするだけ…

「その必要はないわ。」

しかしその決意は紡がれず、第三者に口を閉ざされた。3人とキウウベえを飛び越えるように長い黒髪が翻った。紫を主体とした色調は彼女の怪しさと強さを表す。

左手首には円の石盤を身に付け、魔女に対抗する力を持つ証。

「あの魔女は私がやるわ。」

「ほむら…ちゃん。」

キウウベえを睨み、そして3人を睨みつける。

それだけで鹿目まどかの口は突如として開かなくなった。

遠くでは魔女の突進により砂埃が立っていた。

「それからあの人も助けておくわ。…だからここから退きなさい。」

言い終わると曉美ほむらは突如として姿を消す。

鹿目まどかが瞬きした瞬間には姿を消していた。

曉美ほむらが重ねた言葉から推測し魔女へと焦点を移すと、魔女へと立ち向かう曉美ほむらの後ろ姿を視認することができた。

「ほむ…りゃ…」

「…どきなさい。」

「ぐっ!?!」

目にも留まらぬ速さで、息切れの激しい瀬津そつまの隣に立つと、左肩口にそつと触れてから回し蹴りの要領で瀬津そつまの腹部にかかとを打ち込んだ。

魔法少女の一撃は重く、男子大学生とも遜色ない瀬津そつまの身体

を軽々と3人の前まで吹き飛ばす。

「そ、そうま!?!」

「瀬津君!?! 大丈夫!?!」

「気絶してるね。手加減されてるとはいえ、魔法少女の一撃を生身で受けたんだ。当然の結果だよ。」

「そうま君…そうま君…!」

「何冷静に分析してるのさ! まどか、何か傷口を塞げそうなものない!?!」

「大丈夫。彼女が傷口を止めてくれたから、これ以上出血は防げそうだね。」

「彼女…ほむらちゃんが?」

凄惨な光景に目を背けたい気持ちを抑え、傷口をじっくりと見る。

そこで鹿目まどかはようやく傷口に付く血液が、液状のまま瘡蓋のように傷口に張り付いていることに気が付いた。

「きつと曉美ほむらは血液の流れを止めて、出口を塞いだんだ。これでこれ以上の出血の心配はないよ。」

「それなら早く病院に連れて行かないと! キュウベえ、早く結界の外に案内して!」

「それも大丈夫。もうすぐ終わるから。」

「終わるって…!」

突如として密室空間に響き渡る爆音。

耳をつんざくような音に3人は身体をびくりと震わせた。

続いてけたたましい爆音が2つ。

爆音に釣られ目を向けると、そこには黒煙を口から上げる魔女の姿があった。

それからは圧倒的。

暁美ほむらを一飲みせんと、大口を開け突進する魔女に飲み込まれ…と次の瞬間には何食わぬ顔で平然と佇む暁美ほむら。やられた、と勘違いしてしまうほどの目にも映らぬ速さで避け続ける。

それだけでなく、避け続けながら魔女を何かしらの力で攻撃し、魔女の身体からは黒煙が上がっていった。

その光景はあまりにも手際の良い行動だったのか、鹿目まどかと美樹さやかは2人にはいつ、どの体勢から攻撃を繰り出しているかどうかすら視認することができなかった。

攻め続ける魔女に逃げる暁美ほむら。

その構図から思い描かれる結末とは全く逆の結末は時間を待たず、結界の崩壊という形で訪れた。

赤と黒の空間は夕焼けに染まる病院へと変わる。

それが魔女が消滅したこと何よりもの証拠だった。

暁美ほむらは魔女が落としたグリーンフィードを拾い上げ、4人の元へと近寄ってくる。

すでに魔法少女の姿は解かれていて、それが暁美ほむらなりの敵意の欠如を表していた。

「早くその男を病院に連れて行きなさい。傷口がそろそろ開き始めるから。」

「あ…ありがとう！ ほむらちゃん！」

暁美ほむらの言葉を受け、病院の入り口へと歩いていく鹿目まどか。彼女を見守るように見送った暁美ほむらは、鹿目まどかの姿が見えなくなるとすぐさま腰を抜き地面に座り込む巴马ミを睨む。

普段ならば、一つとはいえ年長者の余裕すら感じさせる微笑みを絶

やさない巴マミは、その鋭い目線に堪えきれず視線を地面に落とすた。

「あなたは治療する術があるはず。これを使いなさい。」

その逃げた視線を追うように、今手に入れたばかりのグリーンフィードを地面へと置く。

呪いという汚れを吐き尽くしたグリーンフィードは、夕陽の中でも鮮やかに光り輝く。

「…大罪ね、巴マミ。先輩と呼ばれることで優越感でも感じていたのでしょうか、そんなもの私たちには不必要な物だわ。…まああなたと彼には感謝してる。これでまどかは魔法少女にならなくて済みそうだから。」

ゆっくりと立ち上がり夕闇へと姿を消していく暁美ほむら。

ローファアの奏でるコツコツという音が聞こえなくなると、ようやく無意識に止めていた息を、過呼吸のようにし始める。

そして置かれたグリーンフィードで自身のソウルジェムの穢れを浄化すると、すぐさま目の前で倒れる瀬津そうまの肩口に手を当てる。

かつて傷付いたキュウベえを癒やした暖かな光が傷口を覆う。酷く不安定で暖かな光は徐々に傷口を塞ぐ。

正面からは医師を連れ鹿目まどかの姿も見えた。

その瞬間、巴マミの意識は突如ブラックアウトしてしまう。

倒れる直前視界に飛び込んできたのは、真っ青な瀬津そうまの顔であった。

第10話 ニフラム（後書き）

ニフラム：自分より弱い敵を消滅させる呪文（b y ドラクエ）

正直書きたい場面が3つあったので、この小説を書き始めたのですが、その内の1つが今回です。

しかもまどか マギカにおいて、このシーンは重要な場面なので気合い入れて書きました。

（なんでこの程度のクオリティなのかは知りません）

今後もテンションを下げず書いていきたいのですが、実は次に書きたい場面は大分先になりそうで…

（たぶん第30話くらい…）

ですのでっ！

それまではっ！

皆様のっ！

感想でっ！

耐えていきたいですっ！

是非とも感想お願いします！

嘘予告

マミ 「私のこぶしが真っ赤に燃えるっ！ 勝利を掴めと轟き叫ぶ

っ！」

ほむら 「…まだまだ真の明鏡止水には程遠いわね。」

第11話 無限回廊（前書き）

遅くなりました。
申し訳ありません…

第11話 無限回廊

魔法少女とは孤独な存在である。

今宵も魔女の存在すら認識していない人の為に、人知れず夜の闇を金色が切り裂いた。

すでに一人の夜には慣れていく。

小学生の時に家族を事故でなくし、親戚中からたらい回しにされた挙げ句、中学校の近くに一人暮らしを始めたのだから慣れるのも当然であろう。

日中はクラスメイトに恵まれたからか、楽しい学生生活が。

夜は魔女を退治するために何時間も一人歩き続けていた。

そんな寝不足で自慢の金髪が傷んでしまわないか、と悩むことすら少なくなってしまうある日、彼は笑顔で結界の中を歩いてきた。

初めは魔女の口付けで操られた一般人かと思っていた。

しかしそんなしるしはどこを見渡しても見受けられない。

また断つても付いて来る彼は予想以上のスペックを見せた。

長身痩躯の身体からは考えられないほどのパワーとスピード。

1時間走り続けても顔色一つ変えないスタミナ。

そして重苦しく濁りきった結界内でも明かりを灯すかのような少年の笑顔。

『ムム。』

甘ったるいようで意志の強さを感じさせる声。

『ムムムム？』

一般人なのに私に付き添い、時には魔法少女の私を助けるお人好し。

『お〜い、マミ?』

その背中が大きく、優しかった父親を思い出させる。

『俺の腕、どこいったか知らない?』

その姿は父親の最後の姿と似ていた。

第11話 無限回廊

ガバツと身体を勢い良く起こす。

酷く嫌な夢でも見たかのようにパジャマはじっとりと汗で湿り、息遣いも安定していない。

バマミの寝起きは最悪であった。

辺りを見渡すと見慣れた風景。

一人暮らしには広すぎる無機質な部屋。
魔女退治に全力を注いだ所為か、インテリアに力を入れることが叶わず、あまり物のない部屋となっている。
薄いクリーム色のカーテンから流れ込む日の光と暖かさ。
目覚めとは対照的に天気は良好らしい。

「何の夢を見ていたのかしら……」

バマミはシャワーを浴びる準備に着替えを用意している間、嫌な汗をかいた原因である悪夢を思い出そうとしていた。

怖いもの見たさに夢を思い出そうとすることは誰しもがあることだろうが、それはバマミとて変わらない。

しかし今日に限って何も思い出せない。

まるで脳が拒絶しているかのように、夢の断片すら再生されない。思い出すことを諦め、着替えを持って寝室のドアを開ける。

今日は日曜日なのだから、ゆっくり休んでいようと心に決めて。

一人暮らしには重厚すぎるドアを抜けると、そこはいつもの広すぎるリビングなのだが、今日に関しては少し様相が違う。

リビングに漂うコンソメの香り。

テーブルの上に置かれた色鮮やかな生花。

そしてソファで寄り添うように眠る鹿目まどかと美樹さやか。

いつも1人のはずの部屋が少し狭く見えたのは、人の気配に依るものだった。

「おはよう、マミ。」

テーブルに用意されたハムエッグとサラダの盛り合わせに目を奪わ

れていると、不意にキッチンの方から声をかけられた。体を包む朝の日差しよりも暖かく、包み込むような柔らかさが特徴的な声。

どこかで聞いたことがあるような声に身体をびくりと震わす。

「勝手に食材とキッチン借りたわ。代わりにめっちゃ美味しい飯作っただけだから許してくれ。」

こんがりとキツネ色に焼けた数枚のトーストと4つの珈琲カップ、また瓶詰めのジャムや砂糖をお盆に乗せ、キッチンから1つの影が現れた。

大学生にも見間違えられてしまう長身痩躯。

顔立ちは整っていて、下手なアイドル顔負けの美貌。

甘いマスクと弾ける笑顔を見せる瀬津そうまの姿がそこにはあった。普段通りの表情、普段通りの振る舞い。

しかし瀬津そうまを見る巴マミの表情はみるみるうちに歪んでいってしまう。

「そうま君…その…うっ!？」

力無く巴マミの左腕が上がり、ある一点を指差す。

恐る恐る指を指した先には瀬津そうま。

正確に言えば瀬津そうまの『左半身』。

それと同時に頭が痛くなるほどのフラッシュバックが、連続で巴マミの脳内を駆け回った。

鹿目まどかの宣言。

魔女シャルロツテとの戦闘。

そして…

いつの間にか吐き気を抑えるように、巴マミは口に手を当て座り込んでいた。

「大丈夫か！？ マミっ!？」

「来ないで！」

すぐさまお盆をテーブルに置き、へたり込んだ巴マミに近付く瀬津そうまをへたり込んだ本人が拒絶する。

金切り声にソファーで仲良く寝ていた鹿目まどかと美樹さやかも目を覚ます。

「…ナイスタイミング。ちよつとマミを落ち着かせてくれ。」

「えっ？ …うん。分かった。」

「…ちよつと。朝からマミさんに何したのよ？」

「何故にジト目で俺を見る!？」

鹿目まどかは巴マミの背中をさすりながら、耳元で優しくげに言葉を紡ぐ。

美樹さやかも冗談混じりに瀬津そうまを見てから、同じように巴マミの様子を落ち着かせる。

その間瀬津そうまは左半身を隠すように長袖のジャケットを羽織った。

…もちろん袖を通るのは右腕だけである。

それから巴マミの状態が落ち着くまで十数分かかった。

落ち着いたといってもいまだ瀬津そうまを直視することが出来ず、

ギョツと握りこぶしを作りながら下を向き続ける。
なんとか鹿目まどかと美樹さやかが左右から支えることで食卓の席へと就くことができた。

鼻孔をくすぐる珈琲の香りは、普段鹿目まどか達が魔女退治の際に待ち合わせ場所として利用するカフェで飲む珈琲とは香りから高級感が違うものだ。鹿目まどかはふと感じる。

「まどかは砂糖とミルク使うか？」

「あつ、うん。ありがとう、瀬津君。」

テーブル越しに伸びてくる腕から砂糖とミルクを受け取る。

何の変哲もない光景だが、砂糖とミルクが1つずつ順に渡されたことで鹿目まどかにとっても現実を嫌でも感じさせた。

カチャカチャと食器が奏でる音のみが部屋に木霊する。

深海にでもいるかのように空気は重い。

いつもならムードメーカーとして話しを繰り広げる瀬津そうまと美樹さやかですら何も話さず、ただ黙々とトーストを頬張っていた。

バマミに至ってはニンジンやジャガイモがゴロツと入ったコンソメスープと珈琲を交互に飲み続けるだけで、その動きは機械のように無機質なものだ。

鹿目まどかも仕方なしに手を着けていなかった食事に集中し始める。トーストの端にジャムをほんの少しだけ乗せ頬張ると、静かな部屋にサクツと軽快な音が響いた。ザラザラとしたパン生地は噛む度に音と香ばしい香りで舌を楽しませ、遅れてイチゴ本来の自然な甘味が押し寄せてくる。

少量ながらしつかりとした甘味はじんわりと口内を浸食し、それでいて後味はすつきりとしていた。

「あつ…美味しい…これ凄く美味しいよ！ さやかちゃん！」

思わず鹿目まどかは感嘆の言葉を叫んでしまう。
ついジャムをもう少しパンに乗せてしまう。

「そのジャム美味いだろ？ そうま特製手作りイチゴジャムだからな。」

「えっ！？ これ瀬津君の手作りなの！？ ……パパでもこんなに美味しいの作れないのに…。」

瀬津そうまの口にした言葉に耳を疑う鹿目まどか。

いつも笑顔で優しく、また主夫歴の長さに比例するかのよう料理上手な父親、鹿目知久かなめともひさよりも優れた料理を今まで口にしたことが無かったからだ。

鹿目まどか家にも自家製イチゴの手作りジャムはあるのだが、このジャムはそれよりも少しばかり上をいく。

「良かったら作り方教えようか？ 今日のは家から持ってきた余りだから微妙だけど、作ったばかりの方が美味いぞ？」

「本当に！？ やった！」

そのとても鹿目まどかの舌に合っていたジャムのレシピがもらえると分かると、鹿目まどかは人目や空気を気にせず、両手で小さくガッツポーズをする。

あまりにも嬉しそうな姿に瀬津そうまはつい少し吹き出してしまった。

この中では一番付き合いの長い美樹さやかは慣れているのか、行儀悪くひじを突いて呆れている。

バママだけが状況を把握できずぽかんとしていた。

続けて鹿目まどかは砂糖とミルクを適量加えた珈琲を一口すすする。すると口内から鼻孔へとすり抜けるように、珈琲豆の香りが広がっ

た。
元来苦みの強い珈琲は苦手で砂糖とミルクが必需品とする鹿目まどかだが、むしろ砂糖やミルクの甘さが邪魔になってしまうほどの微かに感じる珈琲の洗練された味わいに、目を丸くしてまた一口と飲み込む。

「うんっ！ すっごく美味しいよ！ マミさんもそう思いませんか？」

「えっ……そうね……」

恐る恐るトーストに手を伸ばし、鹿目まどか絶賛のイチゴジャムを乗せて頬張る。

少し置いてしまったはずのトーストだったが、噛めばサクツと音を響かせた。

ゆっくりと、喉に引っかからないように丹念に咀嚼し、これまた味わうようにゆっくりと飲み込む。

何故だかバマミを凝視する鹿目まどかも同時につばを飲み込んだ。

「…美味しい。」

「ですよね！ 瀬津君すごいよ！ ほらっ、さやかちゃんも！」

「はいはい。それじゃあ私はたっぷりと……」

「えっ！ ずるいよ、さやかちゃん！ 私だって食べたいのに……！」

早い者勝ちだよ、とジャムの瓶を鹿目まどかから取り上げるように持ち上げると、鹿目まどかから不平の声があがる。

その間先ほどまで機械的に飲み込んでいた珈琲を、バマミは今一度口にしていた。

口に広がるジャムの甘味と混ぜり合っように、香りが深い珈琲の苦味。

市販のジャムや珈琲にはない爽快感を口内で感じ取ることができた。

「どうだ、ママ？　俺が張り切って淹れた珈琲の味は？」

瀬津そうまは口角を上げたり顔で、珈琲に目を丸くしていたママに訊ねる。

まるで子供が親にほめて貰おうと満点の答案を自ら渡すように。

ママは突然声をかけられ、しかもそれが瀬津そうまだったため言葉を上手く纏められない。

ええ…と小さく呟き、頭を垂らすことしか出来なかった。

「ママ、ちょっといいか？」

小さく囁くように言葉を紡ぐ。

ママは何か警戒するように身体をびくりと震わせ、目をぎゅっと閉じ力強く握りこぶしを作る。

鹿目まどかと美樹さやかに着替えさせてもらった服も、再び冷や汗でじっとり濡れていた。

「今朝食作ったの誰だか分かるだろ？」

「そ…そうま君…」

「そうだ。俺が1人で作った。」

そこで瀬津そうまは自身のトーストをかじり、軽快な音を打ち鳴らす。

鹿目まどかと美樹さやかも2人の会話…もとい瀬津そうまの話に耳を向けていた。

「それであ、ママ？」

「な…なん…ですか。」

「これだけの朝食、マミなら作れる？」
「はあ？」

再びトーストを勢い良くかじりつく。

瀬津そうまとバマミの会話だったが、つい横で聞いていた美樹さやかが素っ頓狂な声を上げてしまった。

鹿目まどかも意図が分からず、首を傾げていた。

「何がいいいのよ、そうま！　こんなシリアスな展開にいきなり自慢か！　中学生男子に空気の読めないスキルは必需品なのか〜！」
「さやかが何怒ってんのかは分かんねーけど…。つまりだ、マミ。」
「はい…」
「俺は左腕が無くてもこの中で一番凄い、ってことでオツケーだよな？」

……………

「はい？」

「だってそうだろ？　俺準備できる。マミ達できない。」
「なんで片言なの？」

親指をビシッと立て、威張るように自身に向ける瀬津そうま。その態度と発言に鹿目まどかは、躊躇いがちに微笑みながら頭を傾げる。

「まあ俺基本的になんでもできちゃうし、出来ること自体には何も驚くことないと思うが…」
「なに自分で言ってるんだか…」

美樹さやかは全員に聞こえるような大きなため息を吐いた。
心底瀬津そうまの考えを理解できていない、といった様子だ。

「つまりこんくらいハンドにもならない、ってことだ。たかだか腕が1本無くなっただくらいでそんな絶望されちゃ、俺がその程度の野郎だと思われちまうだろ？」

「…そうま君。」

「それにマミが言ったんじゃないか。『そうま君は魔法少女の騎士だものね』ってな。騎士は主を守るためなら身体を張るのは当然だろ？」

瀬津そうまの魔法の言葉。

それは巴マミの奥底にある鍵を開ける魔法。

溜まりきった感情は出口を求め、眼球へと辿り着く。

巴マミは知らず知らずに涙をこぼしていた。

「ごめんね、そうま君。」

「まあマミをサポートするのも騎士の仕事だからな。」

「騎士、騎士…ってなにカッコつけてんのよ。自分では『使い魔の方が性に合ってる』とか言ってたくせに。」

「うっん、瀬津君すごく格好良かったよ。本当にマミさんの騎士みたいだよ。」

「ありがとな、まどか。…ただあんま騎士、騎士連呼しないでくれ。ちと恥ずい…」

「あら？ 主人である私が言ったこと、そつま君は不服なの？」

「…はいはい。マミには頭が上がらないな。…っと俺はそろそろ行かなきゃな。」

「えっ？ 瀬津君この後何か予定あるの？」

「いや、病院の先生に黙って部屋を飛び出したから、そろそろ問題になってそうだな…」

「えっ…（はあ！？）」

「…もう。人を困らせちゃ駄目でしょ？ 早く戻って謝ってきなさい。」

「その口調、なんだか主人ってより母親、って感じだな。マミお母さん。」

「も、もう！ 早く行きなさい！」

「マミさん、それもお母さんばいって…」

美樹さやかの一言に顔を真っ赤にするバマミ。

その姿はまた年上には見えない可愛いものだった。

つい3人してバマミの仕草に大笑いしてしまう。

それはまるで普通の日常。

話して茶化して笑いあって…

バマミの周りにはそんな日常が広がっていた。

（もう…何も怖くない。）

そして後日、バマミは姿を消した。

第11話 無限回廊（後書き）

完全なオリジナル展開に…

てかキャラの口調が分かりません…

誰か教えてください…

ついでに感想もお待ちしております！

第12話 後ろめたさ(前書き)

この辺からオリジナル要素が多分になっていきます。

第12話 後ろめたさ

第12話 後ろめたさ

夏の陽気がぶり返してきたかのように、見滝原市は連日の猛暑日を記録していた。

登校するだけで額には汗がにじみ、知らずと財布を持った手が自動販売機へと伸びていく生徒も少なくない。

駅へと向かうスーツ姿のサラリーマンはクールビズと呼んでいいのか、ネクタイをはずし袖を捲り上げ会社へと向かっている。

すっかり参ってしまいそうな気温の変化に、美樹さやかは窓の外を見下ろしながら、涼むようにパタパタと自身の手のひらを扇いだ。

教室内はエアコンにより快適な室温に管理されているのだが、窓から差し込む太陽光に若干熱を感じる。

美樹さやかの隣で、同じように外を見下ろす鹿目まどかもピンクのハンカチを団扇代わりに扇いでいた。

その事実を裏付けするように、窓際には鹿目まどか達以外のクラスメイトは存在せず、皆廊下側で楽しげに話を繰り返していた。

それは教室でただ楽しく話していた生徒にとっては当然の行為であり、また鹿目まどか達にとっても都合の良いことでもある。

「うわっ!? あんな態勢から決めるの!？」

鹿目まどかの肩には気候など我関せず、といった様子で眠り続けるキユウベえがいた。

勿論一般人であるクラスメイトにはその存在は見えていない。

その存在を視認できるのはこの学園には5人しかいない。

その内の2人が内緒話するかのように：

堂々と且つひそひそと窓際で話しを繰り広げていた。

眼下に広がるのは見滝原中学校が県下2位を誇る、広大な敷地面積である校庭が広がっている。

辺りを林で囲まれた本校はその余りある敷地を贅沢に利用し、野球とサッカーを1試合同時に行えるほどだ。

従って昼休みにはスポーツ好きの学生が校庭には多々存在するが、鹿目まどか達はその中でも端の一点だけを眺めていた。

「瀬津君、なんであんな動けるんだろう?」

「どうせまた『俺って何でも出来ちゃうからな』…とか言ってくるんでしょね。あゝ、腹立つ!」

「あはは、瀬津君なら言っちゃうかもね。」

校庭の端、校舎から少し離れた所にあるバスケットリング。

そのリングに向けオレンジ色のボールを放る男子生徒の群れに、キユウベえを視認できる5人の内の1人がいた。

瀬津そうまはその長い手足を利用して、鋭いカットインを見せそのまま数人の男子生徒を置き去りにした。

そして今日何度目かのシュートをリングに叩き込んだ。

校門を飛び越える脚力はバスケットボールにおいても絶大な力であった。

それだけではなくその右腕から放たれるパスは悉く敵陣の急所を突

き、パスを受ける男子生徒があまりにもドンぴしゃ過ぎて胸元でのキャッチングをミスしてしまうほど。

瀬津そうまがボールを持つとゴールの匂いが、遠くから眺める鹿目まどかにすら感じられる。

事実またしても決定的なパスをゴール下へと供給した。

「…ママさん、どこ行っちゃったんだろうね？」

「…それが分かったら苦労しないんだけどね。」

鹿目まどかは辺りを囲むように存在する広大な林を見やる。

そこに金色の影は見当たらない。

美樹さやかも口惜しそくに顔をしかめた。

あの魔女退治の次の日…

安心した子供のように微笑んだ巴ママはその日を持って3人の前から姿を消した。

魔女退治の体験講座は勿論無期限停止を瀬津そうまから受けるまでもなく、教授がいなくなってしまったのだから続けようもない。

そのためもあってか鹿目まどかと美樹さやかはここ一週間、肩で眠るキュウベエの存在にも気付けない一般人と変わらぬ生活を送っていた。

むしろ鹿目まどかや美樹さやかにとっては都合の良い事態でもあった。

以前と変わらぬ笑顔を振り撒いて、昼休みにはクラスメイトとバスケットボールをする瀬津そうまの姿を見るとどうしても思い出してしまう。

漂う血の臭い。

溢れ出す死への恐怖。

魔女の力に対してどうすることも出来ない絶望感。

そしてその異世界から離れることで簡単に訪れる平穏な日常。

鹿目まどかは既に魔法少女に羨望の眼差しを向けることは出来ない。

「そうまの奴は『任せとけ』とか言っつて、1人で勝手に行動してるし。そうま1人で何が出来るのよ？」

「とりあえずバスケットは出来るみたいだね。」

「そんなこと聞いてないわよ〜！」

赤のリボンで結ぶピンクの髪をくしゃくしゃと両手で乱すと、鹿目まどかは花が咲いたかのようにパツと笑みを見せる。

気の済むまで鹿目まどかの髪の毛を乱した美樹さやかも、どこか楽しげな笑みを見せる。

「…つたく。純粹なまどかがこんなひねくれ魔神になっちゃうなんて…そうまの所為ね。」

「そ、そんなことないよ〜！ …でも瀬津君と話してたら、いつの間にか…」

「え〜っ。まどかつてあんな奴がタイプなの？」

「ち、違っつよ!? そういうことじゃないから!?!」

ニヤニヤとしながら茶化すように鹿目まどかの頬を美樹さやかの指が突っつく。

それを顔を真っ赤にして、首を勢い良く左右に振って否定した。

その時ちようど瀬津そうまは4mほど離れた位置から、ゴールに向けシュートを放っていた。

ボールは鮮やかな放物線を描いて、リングの中心を通過する。

「もう〜…。それよりマミさんだよ。探してくれてる瀬津君は何も教えてくれないし…。さやかちゃんも知ってる?」

「全然。最近バスケットしてる姿しかみてない。あと授業中寝てること。」

「そうだよね…。キユウベえは教えてくれないし…」

「ママがそれを望んだからね。それにそうまからもまどかとさやかには言わないよう言われてるし。」

キユウベえはあっけらかんと、テレパシーを用いず補足を加えた。

その声は教室の喧噪に紛れ、2人の耳以外には届かない。

「まあとりあえず今はゆっくりしときましょっか。あたし達だけじゃママさんは見つけれないし。」

「うん…そうだね。」

こうして2人は今日も身を引く。

その決断は瀬津そうまにとつて喜ばしいものであり…

そしてクラスメイトと表面上は話している暁美ほむらに安堵を与えるものだった。

すべてを飲み込む闇の空間。

上下左右を見渡しても何一つ見えない暗黒。

カサカサと辺りを何かが蠢く。

そんな空間の中心に、闇の中にぽつんと浮かび上がっているように1人の少女が存在していた。

左右にロール状の金色の髪が垂れ下がり、額には汗がにじむ。胸に結ばれた黄色の黄色のリボンは所々切れ、薄汚れている。足取りも重くカサカサと音が空間に響くたび、態勢を音が響いた方向へと向き直すのがやっと、といった具合だ。吐く息は絶え絶えで、それがよりいっそう少女のか弱さを表現していた。

…バママミは1人歯を食いしばる。

「っ!?!? そっっ!」

微かな気配を頼りに銀のマスケット銃を撃つ。

魔力を帯びた金色の弾丸は闇を切り裂き、そして闇に隠れていた使い魔を打ち抜いた。

ギャツ、と短い悲鳴が空間に響く。

この金切り声は使い魔の断末魔の声だろう、と何度かその声を生み出していたバママミは考えていた。

しかしまだ辺りを蠢く気配は無くなることはなく、むしろその数を増やしているようにさえ感じる。

バママミが相対する暗闇の魔女。

自身の身を守るため結界内を暗闇で包み込み、迷い込んだ仔羊にんげんを刈る。

仔羊は恐怖に身を震わし、そして魔女に気がつく間もなく命を落とす。

これまで何人もの行方不明者を出した凶悪な魔女だ。

そもそも魔女が作り出した暗闇の結界にも、この魔女の醜悪さが表れている。

魔女や使い魔、また結界内に存在する障害物が全て暗闇に隠れ視認できないのに対し、バママミの姿だけがぼつんと浮かび上がっている。仔羊にんげんのみを照らし出す暗闇。

そうして仔羊にんげんに恐怖と孤独感を与えていた。

何か近付いてくる気配に、一つ弾丸を放つ。
またもギャツという断末魔が空間には広がった。

「はあっ…はあっ…」

これで両手両足の指では数え切れないほどの使い魔を倒したことになる。

しかしその間魔女には一撃も与えることが出来ていない。

魔女を倒せなければ使い魔は産み出され続ける。

今までの全てが徒勞となってしまう。

バマミは一か八かと感覚的に大きな気配を感じた方向に弾丸を放つ。
オレンジ色の弾丸は暗闇を切り裂くように飛んでいき、そして無残にも何も撃ち抜くことなく彼方へと飛び続けていった。

これで貴重な魔力を一つ消費し、ソウルジエムは澱んでいく。

すでにバマミのソウルジエムは、全てを照らし出すような黄金の光を放ってはいない。

「はあっ…はあっ…」

息を整える事もなく、続けざまにマスケット銃を二丁眼前に生み出すとそれを手に取り、左右から近づく気配にそれぞれ一撃ずつ放つ。
銃撃の結果は短い2つの悲鳴ですぐさま確認された。

「ちょっと疲れたかな…」

ぽつりと呟くバマミの声はか細く、今にも消えてしまいそうであった。

戦闘開始から1時間。

魔女の気配に神経をすり減らすこと45分。

放った魔力を編んだ弾丸は50を超えていた。

体力的にも限界は近く、両肩は酸素を求め大きく上下している。

しかし未だに暗闇の魔女の攻略法は見えていない。

このままではジリ貧だろう。

故に一旦撤退し、態勢を立て直すことも考え始めることも必要であった。

…しかしバマミの頭の中に敗走はない。

(この魔女を逃がしたら、多くの一般人が危険だわ…逃がすわけにはいかない!)

頭に浮かぶのは魔女の存在に気付かぬ人々の日常。

家族や親友、恋人と過ごす笑顔が歪んでしまうかもしれない未来。

…そして腕を無くしても笑顔を向けてくれたバマミの重臣のこと。

それだけで両足に力が入り、ガリツと音が鳴るほど強く歯をグツと噛み締められる。

(暁美さんの言った通り…私達に甘美な評価はいらない。)

乱れた胸のリボンを勢い良く解き、バマミ自身を囲むようにそのリボンで床に小さな円を作る。

するとリボンから様々な発光色が解き放たれ、筒を形成するように光は上空へと伸びていった。

暗闇の世界を分断する一本の光の束がそこにはあった。

(所詮自分の欲望に勝てなかった私達には…)

バマミを取り囲む光は魔女や使い魔を通さない結界と化した。

いまだ暗闇に潜む魔女も動きを止め、バマミの逃げの一手を眺める。結界を作るのが、魔女側から仕掛けない限りそれは打開策にはならない。

魔力で作った結界ならば魔力が枯渇すれば自然と消滅する。

つまりは魔女が見に徹すること、それはただの時間稼ぎとなる。

そして魔女はその本能に従って、動きを止めてしまった。

あとは食事が用意されるのを待つばかり。

（私の所為でそうま君は…もう私は怖くないわ。）

しかしバマミの反撃の一手はここから始まる。

両手を広げ結界を外へと広げていく。

するとバマミ1人だけを覆っていた結界に数人分の余白が生まれた。使い魔は音を立てることなくバマミを凝視していた。

（大切な人が傷付くくらいなら、自分がどうなるうともう怖くないんだから！）

続けてバマミは右腕を前方に向け真っ直ぐ伸ばす。

瞳には強い意志を宿し、右手には大量の魔力を保持する。

そしてそのまま身体をくるりと横回転させた。

その動きはまるでダンスでもしているかのように可憐で、この状況だけをみれば1人の踊り手と多数の観客のようにも見えるかもしれない。

勿論そんな日常風景ではない。

伸ばした右手が体に合わせてくるりと円を描くと、そこにはマスクェット銃が隙間なく敷き詰められていく。

その数優に100を超えていた。

全方位ありとあらゆる角度に砲身が向く。

明らかな脅威に使い魔が慌てて逃げ道を探す。

しかし地を這う彼等に逃げ場はない。

巴マミは一回転すると、勢いそのまま右手をピンと挙げる。

その姿は先程とは打って変わって、兵士に命令を下す直前の華麗な軍人。

その右手には全てを動かす決定権を保有していた。

結界がスツと形を消していく。

その結界が完全に消滅したのを合図に、絶対的な権力を保持する右腕は勢い良く振り下ろされた。

第12話 後ろめたさ（後書き）

原作との相違点

季節設定（原作の季節が知らないんで、勝手に秋と設定）

ワルプルギスの夜襲来時期（詳しくは知らないが、たぶん遅くなっています）

キャラの性格（ただ単に表現力の問題）

面白さ（それは勘弁してください）

感想お待ちしております！

第13話 再起(前書き)

お待たせして申し訳ありません！

第13話 再起

彼は笑って許してくれた。

年下だというのに大人びた表情で、頭を撫でてくれた。

一本芯の通った声色はどこまでも人を安心させてくれた。

戦いの場においては魔法少女の私に、辛うじてではあるが、付いてこれるだけの身体能力を持ち…

そして的確な判断で、私に危険が迫り来るのを事前に防ぐ。

今思えばではあるが…、あの時も彼は油断しないよう、私に注意を呼びかけていた。

けて私を1人にさせず、傍にいてくれる大切なパートナー。大切であるからこそ、私はより一層護りたいと強く願う。

3人に…いや、彼にすくい上げてもらった次の日、私は普段通りの学生生活を送ることが出来ていた。

ぎこちなくはあったかもしれないが友達には笑顔を振りまき、優等生の自分を模倣できていたと自負もある。

でも…ほんの少しではあるが、心がざわついていた。

確実に自身の責任で、大切なパートナーが一生治ることはない傷と欠損を負ったのだ。

平気なわけがない。

それでも彼がそんな私を望んでいない。

それなら私は普段通りを演じなければならぬ。

周囲を誤魔化すには十分すぎる笑顔を振りまき、移動教室のためクラスメイトと談笑を繰り返しながら廊下を歩く。

(そうだ…今日はこの前のお礼にそうま君達を家に招待しよう。今日は体験コースはお休みにして…)

その時、不意に視界に映る影に目を奪われた。
中学生にして一つ抜け出した身長の彼。

遠くからでもひときわ目立つその容姿は困ったような笑顔を浮かべ、
クラスメイトに囲まれていた。

ふと教室の中を見ると鹿目まどかや美樹さやか、暁美ほむらの姿も
あった。

いつの間にか彼らの教室の横を歩いていたみたいだ。

薄い透明の壁は教室の中の様子を鮮明に映し、ドアが開いているか
らか会話の内容もはっきりと聞こえてきた。

「おい！？ どうしたんだよ、そうま！？」

「だからちよっとお腹をすかした少女に食べさせてあげただけだっ
て。」

「お前はどこそこのパンのヒーローか！？ そんな冗談聞きたいんじ
やないんだよ！」

男子生徒の怒鳴りつけるような声が耳に入り、そしてその声の合間
に聞き覚えのある声が聞こえた。

私はつい耳を傾けてしまう。

「休み明けに学校来たら、親友がっ！ ……その…なんだ、腕を…」

「俺のこと親友だなんて…瀬津そうまは涙が止まりませんよ。よ
よよっ…」

「茶化すな！ 俺は本当に心配してんだぞ！」

「なあ、そうま。コイツも無神経に聞き出そうとはしてるけど、本
当に心配してのことなんだ。言いたくなかったら言わなくてもいい
から、せめて真面目に答えてくれないか？」

「…本当にお前らしい奴らだよ。マジで涙ぐんじまうじゃねえか。」

「それじゃあ、そうま。どうして…」

「でもこれは言えない。この件に関しては誰にも言うつもりはない。

悪いが退いてくれ。」

「そうま…。」

まだ残暑が続く秋の日。

私は学校に行くことを止めた。

第13話 再起

全てを飲み込む暗闇。

耳は多数の爆音にキーンと耳鳴りを起こしていた。

全方位同時射撃。

激んだソウルジェムで出来る最大級の複撃は、辺りを囲んでいた邪悪を薙払った。

体力と魔力の限界からか、バマミはその場に座り込んでしまった。

先程までよりも荒々しい息遣いが、この戦いがどれほどまでに過酷だったかを表していた。

ひとまず息を整えるために、ゆっくりとした深呼吸を繰り返す。

「…あと3発。」

身体には力が一片も入らない。
それでも強い意志を秘めた瞳は、虚空を睨みつける。
いまだ暗闇に包まれた虚空を。

確かにバマミの複撃は大多数を殲滅した。
その証拠にバマミの身体を舐め回すような気配は薄れている。

何か動き回るような物音も聞こえない。
それでも魔女が形成した筈の結界が崩壊しない。
それだけで魔女が生きていることが十分に理解できた。
何度か確かめるように手を握っては開く。
若干ではあるが感覚がぼやけている印象を抱かせた。

「さあ…1対1ね。…って使い魔を産み出せるのよね。」

一本マスケット銃を具現する。
それを杖代わりにしてやっとな立ち上がることが出来た。

「あと3発…ううん。この一撃で全て終わらす！」

バマミは身体をマスケット銃で支えながら、静かにゆっくりと目を閉じる。

暗闇で見えないのなら視覚は必要ない。
ならば視覚に割いていた感覚を第六感へと回せばいい。
それがバマミの考えであった。
そしてその考えは実を結ぶ。

(うん…ぼんやりとだけど、魔女の位置が分かるわ。角度は約30

。、距離は…15mくらいかしら。）

バマミはぼんやりとはあるが、魔女の存在を頭の中で捕捉した。今バマミの頭では宙を動き回る魔女を大きな光点として、魔女の位置を捉えていた。

あとは動き回る光点目掛け、引き金を引くばかり。

あまりに深い集中に、動かずとも頬を汗が一滴流れ落ち、頭は熱を帯びていく。

全ての感覚を無視し、魔女を撃ち抜くために必要な意識を全てフル稼働させているためか、ポツポツと産まれている小さな光点には気付いていない。

恐らく十数分後には先程までと変わらない、使い魔が困む絶望が待っているだろう。

しかしバマミは使い魔に意識を向けず、一丁のマスケット銃をしつかりと右手で握り締めた。

残り3発…これが今のバマミに残された弾丸の数。

魔力の枯渇も近い未来だった。

それを承知の上でバマミは撤退の二文字を切り捨てた。

（魔女の動きは鈍い…今ならいける！）

「これで…終わりよっ！」

砲身を光点に向け、反動で照準がずれないようにしっかりと支え、素早く引き金を引く。

鼓膜を破るかの如くの爆音を打ち鳴らし、オレンジ色の魔力の弾丸は光点に向け真っ直ぐに飛んでいった。

巻き戻しされた流星のように、弾丸は闇を切り裂く。

硝煙の匂いが立ち込める。

辺りは静寂に包まれ、気配すら感じない。

…しかし暗闇は一向に晴れることはなかった。

発砲後瞳を開き、変わらぬ状況に少なからず巴マミの心に陰りを与えた。

(…これでもダメなのね。)

巴マミは精神的に脆弱である。

それは幼い頃から独りきりだったツケが回ってきたからかもしれない。

その脆弱なメンタルに絶望的な状況が足音を立て向かってきていた。足音に怯え、そしてその恐怖に抗うように足を踏ん張る。

しかし…その足を踏ん張る力すら尽きてきた。

そうなれば後は崩れるのみだ。

辛うじて立ち上がったいた身体はふらりと倒れ、瞳は力無く閉じていく。

身体が勢い良く倒れることに、何も抵抗することも出来ない。

そして巴マミの身体は勢い良く地面に叩きつけられる。

その直前、巴マミの身体は柔らかく抱え込まれ、そしてすぐさま勢い良く身体は重力に抗い起き上がった。いった。

「こんな暗けりやさぞかし寝やすそうだけどな。」

突然無気力な身体が起き上がったことに驚き、つい目はパツチリ開かれる。

「でも寝るにはちょっとばかり早いんじゃない？ マミ。」

「…そうま…君。」

バマミの右肩を掴み、抱きかかえるように身体を支える男性。

先の見えない暗闇の中、バマミ以外にぼつんと浮かび上がる人物。それは6日ぶりに顔を合わせる騎士だった。

「何そんな唾然としてんだか。むしろ俺が驚きたい状況なんだからな？ 馬鹿でかい結界が展開されてるから、ちょっとばかり確認しに入ったら見知った顔がちょうどぶつ倒れてたところだったんだからな。」

なにやら不満げな表情を浮かべる瀬津そうま。

ジト目でバマミを見下ろす瀬津そうまは、不機嫌を雰囲気でも醸し出していた。

「どうして…」

「…ったく。ここ一週間手当たり次第探しまくったんだからな？ それこそ森の中から地下街まで。さやかには、探せ探せ…って滅茶苦茶急かされるし、まどかなんて一緒に探す、とか言い出して…。大変だったんだからな？ あの2人の機嫌取るの。」

支えていた肩から手を離し、そしてバマミにデコピンを放った。イタツ、と可愛らしい声を上げ、赤くなっただ額をさする。

「まあとりあえず説教と愚痴はこんくらいにして…あとのくらい使える？」

「…あと2発がリミット…かな。」

真面目にバマミの容態を訊ねる瀬津そうまに、バマミは笑顔で返す。それは無理やり作ったような偽りの笑顔であり、とてもではないが安心感を与えるものとは言えなかった。

勿論自身の身体の様子などバマミ当人が一番よく分かっている。

それでもバマミは笑顔を絶やすことはなかった。

最初こそは驚き、困惑していた表情も、今は張り付いたような笑顔。その笑顔には1つの意志を隠そうとする目論見があった。

（きつとそうま君は私を引っ張ってでも、ここから逃げる一手を選んでくれる。…でもそれじゃあダメなの！ 私が魔女を見逃せばそれだけ…）

バマミは魔法少女。

魔法少女とは人の絶望を生む魔女を打ち倒す正義の味方。

つまり一般人の為にこの身を削り、命を賭して魔女を殲滅しなければ、より不幸な人が生まれることとなる。

それを心優しいバマミは放っておけないため、損得勘定抜きで魔女退治を行っていた。

…しかしそれだけでは救えない現実を知ってしまった。

誰か別の魔法少女が放置したかもしれないグリーンフィールドが原因で、大切な人の腕は無くなってしまった。

それはバマミの過失も含まれてのことでもあった。

そのためバマミは魔女に対し全力で挑み、逃げることは許さない。

この魔女を放置する危険性と自身の贖罪のために。

（お願い、そうま君…今だけは気付かないで…）

笑顔を絶やさぬよう注意しながら、心の中で強く念じる。

届くはずないだろうと確信に近い何かを感じながらも、固まった笑顔を作り続けた。

そして瀬津そうまはゆっくりと口を開いた。

「充分だ。次で決めれば万事解決だ。」

「えっ……」

「マミ。一丁貸してくれるか？」

巴マミは困惑状態のまま、マスケット銃を生み出し渡す。

それを真面目な顔で受け取ると、不意に虚空に向けその砲身に向けた。

しかし発砲する事はなく、ゆっくりと右肩を下ろす。

暫くの間、瀬津そうまはそんな動作を繰り返し行った。

マスケット銃を向ける速度が早いたためか、虚空に向ける度にヒュンヒュンと風切り音が暗闇に響いた。

「そうま君……」

「どうしたんでしょうか、お姫様？」

「その……なんで……」

「そんなの決まってる。マミが決めたことを全力でサポートするのが、この俺の役目だろ？」

マスケット銃を上げ下げする瀬津そうまの表情は至って真面目だ。

マミに先程までの集中力があつたなら気付けたのだが、銃を虚空に向けた際砲身は常に宙を飛ばたく魔女に向けられていた。

魔女は砲身を向けられる度に慌てて、弾丸の軌道上から外れる。

『暗闇』の魔女は他の魔女に比べ、生物的な感覚を持ち合わせていることを瀬津そうまは理解する。

「そんじゃまあ、そろそろ決めますか。マミ、手伝ってくれ。」

「えっ…うん。」

「それじゃあ失礼して…っ」と

「そ、そうま君!?!」

一言入れてから、瀬津そうまはマスケット銃を返すと、いきなりバ
マミの右肩を抱き寄せた。

そして腰を屈めバマミの頬と自身の頬がくっつくギリギリまで顔を
近付ける。

「マミ、銃を握って。」

「は、はいっ!?!」

「出来たら右手で引き金を引けるようにしてくれないか?」

「わ、分かったっ!?!」

「よし。そしたら左手で砲身を支えて…これで…よし。」

「ひゃっ!?!」

おずおずと砲身を支えたバマミの左手に、瀬津そうまはバマミの右
肩越しに伸ばした右手を重ね合わせる。

重ね合わせると同時に、バマミから何やら脇でも突っつかれたよう
な短い悲鳴が飛んだ。

それでも瀬津そうまの表情は真面目そのものだった。

「マミ、よく聞けよ?」

「う、うん!」

「たぶん標的の魔女はもう虫の息だ。」

「えっ!?!…どうして分かるの?」

「動きが単調すぎる。銃を向ければ、必ず真上に飛翔して避けよう
とする。そしてその後ここから見て右にゆっくりと滑空していく。
行動パターンが1つしかない。」

「…それで?」

「人間もそうだけど、得てして生物は生命の危機に陥った時、本能的に行動するからパターンが決まってくる。今の魔女と同じ状態だ。」

「…だから弱っているの？」

「そうだ。勿論これは普通の生物に当てはめた答えだから、当たっているかは分からないけどな。」

言い終わると、瀬津そうまは重ねた右手を押し上げ、再び照準を虚空へと向けた。

するとバマミにも分かるほどの気配が、確かに飛翔し滑空した。

「こんな感じだ。後は俺が照準合わせと背もたれを担当するから、マミは引き金と砲身の固定を頼む。」

「そ、そこまで分かれば、私1人でも…」

「そんなふらふらの脚してるマミじゃ不安でしょうがないんだよ。俺がしっかりと土台は作る。だからマミが決めてくれ。」

ハッ…と短い笑い声がバマミの耳元で発せられた。

自身に満ちあふれた表情が瀬津そうまから伺える。

その雰囲気により一層バマミを安心させた。

瀬津そうまの胸に寄りかかる。

左手はしっかりと砲身を握り締め、右手人差し指は引き金に掛かる。そしてその状態のまま静寂の世界が広がった。

暗闇の中、浮かび上がるのは銀の装飾銃を持つ、一つの男女。

キーンと超音波が聞こえてきそうなほどの静寂の中、バマミの身体に響くのは背中から聞こえる鼓動の音。

とくん…とくん…と柔らかかなりズムを刻む鼓動に、バマミは優しく包み込む慈愛のようなものを感じていた。

「いくぞ、マミ。」

「分かったわ、そうま君。」

引き金が引かれると暗闇を打ち砕く流星が1つ生まれた。

流星はただ真つすぐに飛んでいく。

巴マミの願いと光を乗せて。

「ありがとう、そうま君。」

「俺は少し手伝っただけ。手柄はマミのものさ。」

「例えそうだとしても、お礼を言いたい気分なの。良いでしょ？」

「まあ…それなら良いか。」

「ふふっ…」

「それよりマミ。ソウルジエムは大丈夫か？」

「あっ！？ …今回の魔女もグリーンフシードを落とさなかったのね。」

「

…ってことは。」

「…今グリーンフシードを持ってないから、ソウルジエムを浄化出来ないわ。」

…

「大丈夫よ、そうま君。一晩ぐっすり休めば、きっと少しは浄化さ

れるわよ。」

「…そういうものなのか？」

「そうなの。だから心配しないで。」

…

「…そうか。それじゃあちょっとマミのソウルジェムを借りていいか？」

「えっ？ え、ええ…」

「大分黒ずんでるな…」

「えっ！？ どうして…」

月が2人を明るく照らす夜。

全てを飲み込む暗闇はバマミの活躍により打ち砕かれた。
そして一般人に平和な夜は訪れる。

燦然と光り輝くソウルジェムが照らす夜が…

第13話 再起（後書き）

リアルに忙しく投稿が遅れてしまい申し訳ありません。

実家に帰省するまでは出来るだけ10日に1話ペースを守って行きたかったのですが…

次回は来週中に出せるよう頑張ります！

宜しければ応援コメ、感想、批判などよろしくお願いします！

第14話 急転直下(前書き)

早めの更新!

第14話 急転直下

暁美ほむらが転校してから2週間が過ぎようとしていた。

それは瀬津そうまが転校してから約3週間ということになる。

本日も変わらない朝が夜を照らし、すっきりとした青空を見せていた。

夏の気配は次第に影を潜めていき、夜中に半袖だと少し肌寒く感じる気候だ。

それでも比較的過ごしやすい気温に、何日も続く快晴に人々の心は少し弾んだものとなっていた。

そんな過ごしやすい気温の下、少女は屋上で1人、郊外を見下ろしながら考えにふける。

(未だバママミは生存、美樹さやかも魔法少女になることに抵抗がある。)

艶やかな黒髪は屋上を這うように流れる風で棚引き、長い髪に覆われている少女の首筋には湿度を適度に含んだ風が通り過ぎた。

昼休みだというのに相変わらず人気のない屋上は、少女にとって心安らげる数少ない場所。

校内では唯一と言っても差し支えないほど、少女、暁美ほむらは心を休めていた。

(正直順調に進んでいる。…けど彼の存在…)

頭に浮かぶのは1人の少年。

暁美ほむらが最も警戒し、そういった事情を無視しても嫌悪感を感じている不確定因子。

(彼が抑止力となってまどかを遠ざけているようには見えるけど…)

難しい顔をしたまま考えを纏めようと試みる。

…が、あまりに情報が足りなさすぎず、ハッキリとした解答を導き出すことが出来ない。

暁美ほむらは小さくため息を吐いた。

(とにかく巴マミを探し出す。話はそこから…)

暁美ほむらは一度寄りかかっていた金網をギョツと音がでるほど強く握り締め、そしてきびすを返す。

考えるよりも先ず行動…

それが暁美ほむらに出来る最善の行為だった。

「魔法少女…かあ…」

鹿目まどかは学校から帰ると、そのままベッドへと倒れ込んだ。

微かに積もった埃が舞い上がる。

制服もぐしゃぐしゃに折れるも、それを気にすることもなく暫し柔らかなベッドに身をゆだねていた。

「悪さをする魔女を倒して、平和な世界を作る…んだよね。」

世界が朱に染まる夕刻、珍しく鹿目まどかは1人帰路についた。

といつても肩には定位置とばかりにキュウベえの姿があつたのだが。

「ママさんはどうして続けられるの？」

「それはまどかも魔法少女になってみれば分かるんじゃないかな？」

「キュウベえ…」

肩に乗っていた白き奇獣だが、今は内窓の縁に座つて横になる鹿目まどかを見下ろしていた。

鹿目まどかは気怠げにキュウベえを見上げる。

「…ごめんね。今はなりたくない。…怖いの。」

「確かに魔女との戦いは熾烈を極めるものだよ。でもその代わりに1つなら何でも願いを叶えることが出来るんだ。それでもかい？」

「…うん。…それに不安なの。」

「不安？ 何を不安がることがあるんだい？」

理解出来ない、と頭を傾げるキュウベえ。

鹿目まどかは身体を起こし、キュウベえの紅い瞳を見ながら紡いで

いく。

「私…正直に言つとね、魔法少女に憧れてた。みんなのために頑張つて…みんなの役に立てて…」

口角を上げ、形ばかりの笑みを作る。

自嘲にも似たそれに、鹿目まどか自身の胸が締め上げられるような感覚を抱いた。

「私、昔から何も得意なことか無くて。自分に自信が無くて…このままみんなに迷惑をかけて生きていくのかな、って考えてたの。」

薄いカーテン越しに差す夕陽が胸を温めた。

しかしその程度ではまだ鹿目まどかの精神を休めることは出来ない。

「そんな時、キュウベえに会って、マミさんに会って、そして魔法少女になれるチャンスを与えて、私凄く嬉しかった。わ、って騒ぎたくなるくらい嬉しかったの。」

「それならどうして魔法少女にならなかったんだい？」

「…怖いのが半分。死んじゃったらパパやママに会えなくなっちゃう、ってことを瀬津君がちゃんと教えてくれたから。」

「もう半分は？」

「…やっぱり自信がないの。足手まといの私が魔法少女になっても、結局マミさんや瀬津君の足を引っ張ることになるんじゃないか、って…。私が足を引っ張った所為で、他の人が傷付くの見たくないの…」

人々を守る魔法少女が原因で傷を負う人。

親友の美樹さやかにも心優しい、と称される鹿目まどかにはそれが

耐えられなかった。

また生来の自信のなさも拍車をかけているのだろう。

魔法少女になりたい気持ちと、なることを避けたい気持ちの2つが激しく葛藤していた。

不安が体を押しつぶし、希望が頭を悩ませる。

板挟みの鹿目まどかは身体を震わすことしか出来なかった。

「そんなことない。前にも言ったけれど、まどかはもの凄いい魔法少女になれる。それこそマミや暁美ほむらが手も足も出せないほどのね。」

「…そんな自信がないよ。これまでも遠くから見てるだけしか出来なかったのに…」

「それはまどかに力が無かったからだ。誰しもが持つ自分の弱さに、まどかは過剰に不安になっているだけなんだよ。でもこれからは違う。まどかは強大な力を得ることが出来るんだ。それこそそうまの腕を治すことも簡単に出来るくらいに、ね。」

「キュウベえ…」

秒針のカチカチ…と時を刻む音が部屋に木霊する。

鹿目まどかの視線はキュウベえの紅い瞳に吸い込まれるように向けられている。

キュウベえが話す鹿目まどかの価値。

それは鹿目まどかにとって他人からは得難い賛辞の言葉だった。

それだけで鹿目まどかの不安定な心は更に揺れ動いた。

体を押しつぶす不安は薄れていき、頭を悩ます希望は晴れていく。

「さあ、まどか。まどかはどんな願いを叶えたいんだ？」

「キュウベえ…私は…」

ピリリリリ…!

と、そこで不意に大音量の電子音が、鹿目まどかの可愛らしい携帯電話から鳴り始めた。
うひゃあ!?! と突然の電話に声を出し驚き、慌てふためく両手でなんとか電話に出る。

『もしもし、まどか?』

『さ、さやかちゃん!?! どうしたの!?!』

『どうしたの、慌てちゃって?』

『な、何でもない!?! ふう、それより何かあったの?』

『? まあいつか。まどか、今からマミさんを探しに行こう。』

『えっ!?!』

『もうそうまだけに任せてられない。マミさんともう10日は会えてないんだから。』

『でも、探すってどこを?』

『ひたすら歩くっ! 魔女退治の基本でしょ?』

『あはは!?! さやかちゃんらしいや。』

『それでまどかはどうする? 私は1人でも探すけど。』

『ううん、私もマミさんを探したい。一緒に探そ?』

『よっしゃっ! それじゃあいつもの場所に今すぐ集合!』

『うん! すぐ行くから待ってて!』

ツー…ツー…

鹿目まどかは電話を切り、座り込んでいたベッドから勢い良く立ち上がる。

折り目の出来ていた制服を簡単に伸ばししわをとった。

ついでに机の上に置かれた手鏡を使い、髪を括るリボンの乱れを直していく。

「キユウベえ、ごめんね。やっぱり私、魔法少女にならない。」
「…決心が堅そうだね。それじゃあ僕からは何も言わないよ。」

残念がる様子もなく言葉を放ち、鹿目まどかの肩へと登る。

どうやら付いて来る、のだということの意思表示なのだろう、と鹿目まどかは理解した。

「それじゃあ行こっか。」

パタンと静かにドアは閉められた。

部屋の主は戸惑いを持ったままだが、はっきりとした意志の元、大切な先輩を探しに夕暮れの町へと出て行く。

どうしてだろうな。

出会ってまだ1ヶ月も経ってないのに、こうなっちまうなんて。

…って言うってもなんとなくこうなっちまう気もしていた。

慣れてる…って言うたら失礼だけど、こういう経験はしてきた方だろうからな。

そして俺はいつも通り言葉を紡ぐ。

激情的にならないようゆっくりと。

「さやかちゃん、待たせちゃってごめんね。」

「突然呼んだのはこっちなんだから気にしない気にしない。」

「じゃあ早速行こっか？」

「おっ？ まどかもやる気出てきた？ キュウベえもちやつかり付いてきてるし。」

「2人だけじゃ心配だからね。何か遭ったとき大変だろう？」

「そっかそっか。なかなか考えちゃってくれてるのね。可愛い顔してやるじゃない。そうまとは大違い。」

「はははっ…」

美樹さやかは残り少ないアールグレイを勢い良く飲み干すと、隣の席に置いていた荷物を纏めて持ち上げる。

荷物の中にはいつも持参していた布で包まれた金属バットがあった。制服姿のままの美樹さやかを見て、きつと急に思いついて家に帰ると同時に、バットと鞆だけ持ち出てきたのだと判断した。

「とりあえず駅の方にも向かってみる？」

「行く宛も無いしね。それで良いと思う。」

そして2人きりの魔法少女探しが始まる。

日は刻一刻と落ちていき、町を闇に染めていく。とりあえずの目的地である駅に、2人は何の苦労もなく辿り着いた。ほっと一息吐くもすぐさま宛もなく歩き始める。

駅から商店街。

商店街からデパート。

デパートからスーパー…

駅を中心として、東西南北に足を運んだ。

すっかり日は落ちきって、夜道を照らす街灯が点いている。

既に一時間程度歩きっぱなしの2人は少し疲れた顔をしていた。

探し始めでは集中を切らさない程度の会話をしていた2人も、今では視線を地面に落とすことも増えてきた。

ふと制服のポケットに入れていた携帯電話で時刻を確認すると、門限の時間が迫ってきていることに鹿目まどかは気がついた。

「さやかちゃん…」

「…そうね。今日はこのくらいにしようか。初日から上手くいくなんて、そんなラッキーでハッピーなことそうそう無いわよね。」

美樹さやかも笑顔を浮かべるも、疲れが顔に表れていた。

効率的な面においても、ここで終えるのは悪くない選択であった。

夜空にはか細く光る星が散らばり、夜の町を彩っている。

冷たい風も吹き始め、人を探すには悪条件が揃っていた事実もある。幾つかの条件が重なって、2人はすんなりと搜索を中断し…

…そしてあっさりと探していた人物を見つけてしまう。

「…まどかとさやかか？」

「えっ？」

先程まで闇に隠れ先の見えなかった道の先から、聞き覚えのある声で名前を呼ばれ2人は振り返った。
そこにはチカチカと点滅する街灯に包まれた人間が1人。

「そうま!? アンタどうしたの!?!」

「おっす、さやか。相変わらず声が大きいな。」

「一番に気にするところがそこっ!?! 何ふざけてんのよ!」

「瀬津君!? 後ろにいるのって!」

「えっ!?!」

鹿目まどかが肩口からはみ出して見える金色に指を指す。

そこで漸く美樹さやかは瀬津そうまが誰かを片手で背負っていることに気がついた。

熱くなっていた頭も少しばかり冷静になる。

「…ママだよ。」

…が冷静になったのも束の間、瀬津そうまの一言に足が勝手に動き出し、鹿目まどかと2人、瀬津そうま…いや、ママミへと駆け出す。立ち止まっている瀬津そうまの背中側に回ると、完全に脱力した状態のママミの姿があった。

腕はだらりと垂れ下がりが、頭は力無く背中にもたれている。

綺麗な髪と肌がまるで人形なのではないか、という誤認をさせるほどに安らかに眠っている。

「そうまっ!?! ママさんどうしたの!?!」

「ママさん! ママさんっ!」

鹿目まどかがママミの肩を揺るも反応がない。

鹿目まどかの手の力で、身体を左右に震わすだけだ。

「…俺の所為だ。ごめんな。」

「何があったのよ!? そうまつ!」

「さやか、まどか。マミを任せても良いか?」

ゆっくりとバマミを地に下ろす。

近くの塀を背もたれにぺたりと地面に座ることとなった。

バマミを下ろした瀬津そうまも並ぶように腰を下ろす。

「ちよつと限界だ…マミのこと任せ…た…」

「瀬津君!?!」

最後にもう一度バマミを任せると、がくりと意識を失った。

先程までと違い息遣いも小刻みなものとなっている。

「まどか! とりあえず救急車!」

「う…うん!」

夜は昼間の熱気を奪い、寒気を与える季節となってきた。

鹿目まどかの目の前で倒れるのは1人のクラスメイトと…

憧れた少女の崩れ落ちた姿だった。

第14話 急転直下（後書き）

感想書いてくださる方々へ。

この場を借りて感謝の意を示させてもらいます！

本当にありがとうございます！

第15話 悲しみを優しさで（前書き）

今回は短いです。

すみません…

第15話 悲しみを優しさに

水道を捻り水で顔を洗う。

冷たく冷やされた水道水はとても気持ちの良いもので、腫れぼったい両目にはちょうど良い心地よさを感じさせる。

気持ちよさから何度も顔を洗い頬がヒリヒリとしてしまったが、それを気にすることもなく今度は髪を気怠げに梳かし始めた。

周りに比べ目立つピンクの髪は纏れることもなく、流れるように櫛を通していった。

簡単に身嗜みを整え、一度部屋に戻りパジャマ姿から見滝原中学校の制服へと着替える。

部屋にある小さな鏡台で胸元の真つ赤なりボンを確認してから部屋を出ると、再び洗面所へと足を運んだ。

再度洗面所へと辿り着くと先程まではいなかった先客の姿がそこにはあった。

「おふあよう、まろか。」

「おはよう、ママ。」

歯ブラシを口にくわえたまま朝の挨拶をする彼女は鹿目詢子^{かなめじゅんこ}。

今朝二度目の洗面所へと来た鹿目まどかの実母である。

「ひよふはひひへんひふあねえ。」

「そうだね、良い天気だね。」

鹿目詢子は口を濯ぎ、歯磨き粉を一通り洗い流すと、寝ぼけ眼で磨き残しを確認する。

キヤリアウーマンとして働く彼女だからこそ、身嗜みは一つの武器であると自覚していた。

そのため入念なチェックは欠かさない。

その間に鹿目まどかは歯磨き粉を付け歯ブラシを始めていた。

「まどか、後ろ跳ねてる。」

「ふえ？」

「ほらっ、動かない。」

自身の後頭部をぺたぺたと触って確認する鹿目まどかの手を下ろし、櫛で優しく髪を梳いていく。

「女は見た目で勝負しないと。今日は綺麗にしなきゃダメだろ？」

「…うん。」

小さく頷き、手を動かす。

その間、歯磨きによって小刻みに揺れる鹿目まどかの頭に合わせるよう、髪を梳く手は動き続けていた。

念入りに、髪の毛一本一本に艶を広げていくように。

その行為は歯磨きを終えても続き、あまりに真剣な表情な母の姿に、鹿目まどかは手持ち無沙汰になってしまうほどだった。

「うっ！ これでOKっ！ あとはリボンだけど…」

「今日はどれにしようかな？」

「…赤ね。やっぱり今日も赤でいいでしょ。」

「そう…だよね。」

艶と空気を多分に含んだ髪の毛を、赤のリボンで結びツインテールを作る。

普段通りの鹿目まどかの姿であった。

「うん。これできっとまどかのファンもメロメロだね。」

「いないって、そんな人達。」

「いる、って思っとくんだよ。それぐらいしとかないと先輩に負けちまうだろ?」

「別に私が目立つ必要はないよ。」

「目立たなきゃ駄目さ。遠くから見ても分からなきゃ、先輩も困るだろう?」

「うう〜…ああ言えばこう言う?…」

鹿目詢子は軽快な笑い声をあげ、その様子に鹿目まどかは自嘲気味に笑った。

「…よしっ、完璧っ！ 行ってきなさいっ!」

「うん。」

鹿目まどかが玄関で学校指定のローファーを履くと、一度鹿目詢子によるファッションチェックが行われた。

足先から左右対象になるように結ばれた髪の毛まで、一通りじっくりと監査の目が入る。

結果いつも以上に気を使った身嗜みは、鹿目詢子の目を納得させるものとなっていた。

「パパに頼んで、今日は美味しいもん作って貰うからさ。上を向いてちゃんと帰ってくるんだよ。」

「…分かった。」

「それじゃあ行ってきな。」

「うん。行ってきます。」

微笑みかける鹿目詢子を背にし、玄関のドアを開く。

柔らかな朝日が鹿目まどかの身体を包んでいくのだった。

第15話 悲しみを優しさに

大勢の人が涙を見せていた。

見滝原中学の学生や教師、そして親族。

式場の中は溢れんばかりの人で埋め尽くされていた。

その中に制服姿の鹿目まどかと美樹さやかかの姿も存在していた。

鹿目まどかは正面を向きながら小さく話し始める。

「凄くカッコ良かったよね？」

「そうだね。アニメの世界にでも入り込んだみたいに興奮しちゃってた。」

「アニメの……」

「何よ？ 悪い？」

「ううん。そんなことないよ。…私も憧れてたから。」

少し恥ずかしそうに鹿目まどかは鞆からノートを取り出す。

それは普段英語の授業に使用しているノートだった。

「それは？」

「前にね、私が早乙女先生に授業中怒られたの覚えてる？」

「前って…ああ、そういえば珍しくまどかが怒られた時あったわね。それが？」

「これがその時怒られた原因なの…」

美樹さやかの手に触れるようノートを手渡す。

美樹さやかは頭を傾げながらノートをパラパラとめくっていった。するとある1ページで手を止めることとなる。

「これってマミさんと…まどか？」

文字一つ書かれていない見開き1ページ。

そこには黄を主体に蛍光ペンで塗られた服を纏った少女と、髪の色と同じピンクを基調とした少女が並んで描かれていた。

見開き1ページに隙間無く描かれたそれは、寄り添うように少女2人が並んでいる図がいくつも存在していた。

鹿目まどかはそれをバマミと自身だと頷き答える。

「私、魔法少女に凄く憧れてた。私達を助けてくれたマミさんが凄くカッコ良く見えたの。」

「うん…マミさんはカッコ良かったよ。」

「失礼な。俺もカッコ良かっただろ。」

「瀬津君。」

いつの間にか鹿目まどかと美樹さやか2人の前に瀬津そうまの姿があった。

制服姿の2人と違い、瀬津そうまは見滝原中学生徒の中でただ一人

真っ黒なスーツに身を包んでいる。

片手しかないというのに黒のネクタイはピツシリと結ばれていた。瀬津そうまはその格好を、単なる正装だよ、と呟いて答えていた。

「それで？ 俺にも話の続きを聞かせてほしいな。」

右手を軽く上げ、鹿目まどかの話しを促す。

それを見て鹿目まどかはもう一度考えを纏めてから、ゆっくりと話し始めた。

「それで私、マミさんに話したの。『魔法少女になりたい』…って。」

「それで！？ …マミさん何て言ってたの？」

「魔法少女なんてならない方がいい…孤独とも戦わなきゃいけない大変な仕事だって。」

「マミ…」

「マミさん…苦しんでたんだ。私達の知らない所で…」

「それでも私は魔法少女になりたい、って言ったの。『マミさんはもう独りじゃありません』って。そしたらマミさん…ヒック…泣き出しちゃって…」

「まどか…」

美樹さやかはそつと鹿目まどかを抱き締めた。

ただ抱き締める美樹さやかの身体も震えを帯びている。

しばらくの間、2人は支え合うように抱き合った。

すすり泣く声が微かに瀬津そうまの耳に入る。

瀬津そうまは視線を外すように空を見上げた。

青く、雲一つない快晴の空を。

「マミさん…どうして死んじゃったの？」

「君から用がある、なんて珍しいね。」

「…」
「僕としても君とは一度話し合いを試みたかったから、この申し出は喜ばしいものだったけど。」

「…単刀直入で聞くわ。バマミはどうして今回のようになった訳？」
「それは僕の知るところではない。全てはバマミと瀬津そうまの2人しか知らないよ。」

「あなたがそんな間抜けな筈がない。早く答えなさい。」

「…やれやれ、聞く耳持たず、だね。」

「…」
「…」
「…」
「…」
「…」
「ただ僕はずっとまどか達の近くにいた。いくら魔法少女の気配を辿っても、様子まで知ることが出来ないね。」

「これでお終いかい？ それなら今度は此方から一つ質問させてよ。君は瀬津そうまの腕の傷口に魔法をかけていたけど、あれは『時』」

を操る力、でいいのかい？」

「…あなたに話す必要はないわ。」

「まあいいさ。答えまでは望めないと思っていたからね。それより聞きたいのはここから。君はどこまでの『時』を操れるのかな？」

「…」

「僕の予想が正しいのならそれは…」

「話しはここまで。今日のところは見逃してあげるわ。」

「…やれやれ。話しを聞いてもらうことも出来ないのかい。まあそれが君の選択ならしょうがないね。また機会が合った時にでも続きを話そうか。」

「機会なんてないわ。あつたとしても全て終わった時だけよ。」

「…やれやれ。また話を聞けなかったよ。…それにしても晧美ほむら、彼女はどこまで理解しているのか。実に興味深いよ。」

第15話 悲しみを優しさに（後書き）

投稿が遅れ申し訳ありません。

9月はちよつと忙しそうなので、あと1話あげるのが精一杯かもしれません…

よろしければお待ちください。

今回の話ですが…

アニメと違いマミさんの身体は現実世界にあるため葬式が行われませんでした。

無理やりアニメに近付けた、って言うなっ！

感想お待ちしております。

よろしく願います！

第16話 虹色の蝶（前書き）

お待たせしました。

第16話 虹色の蝶

美樹さやかはある場所へとたどり着いていた。

そこは癒やしを与えてくれ、そしてときめきを抱かせてくれる大切な場所だ。

いつも通り大きく深呼吸を一回行い、ノックも無しにゆっくりと部屋へと入っていく。

学校帰りに訪れるこの部屋は相変わらず夕陽で染まっていた。

「やつほー。元気にしてる?」

美樹さやかは鹿目まどから4人の運命を大きく歪ませたあの日以来、毎日のように上条恭介の病室へと足を運んでいた。

放課後CDショップに足を運び、病室を訪れる…

それが美樹さやかにとっての日常であり、替えがたいものであったためだ。

自信のできる最高の笑顔だと思える表情を作り、今日も元気よく訪問した。

「…やあ、さやか。今日も元気がいいね。」

というのにベッドの上の上条恭介の表情はさえないもので、声にも張りが無い。

当然美樹さやかはずぐさま上条恭介の異変に気がつく。

そこはあくまで親友の様な口調で、美樹さやかはずぐさま容態をうかがった。

「ん? どうしたの、恭介? なんか元気ないじゃない?」

「実は今朝から検査したんだ…この左腕の。」

上条恭介は包帯をぐるぐる巻きした自身の左腕を見下ろす。
左腕は宿主の視線を受けてもピクリとも動きはしない。

「このごろ頑張ってリハビリしてた、って美人の看護婦さんから聞いてるわよ。もしかしなくても恭介もそうみたいなチャラ男になっちゃったり…」

「…リハビリはちゃんとするものだろ。あと瀬津君ってそんな人じゃない気がするけど？ さやかの話聞く限りだけどね。」

「そうまほど八方美人な男はいない…って話がずれた。恭介はリハビリ頑張ってたから、きつといい結果がもらえるんじゃないかな。」

美樹さやかはベッド脇に置かれた丸椅子に座ると、少し高く設定されたベッドに座る上条恭介を覗き込むようにほほ笑みを見せた。
柔らかな表情に釣られて力なく口角が上がる。

「今回ばかりは不安でしょうがないんだ。もう入院して1年が経つけど、この腕はピクリとも動いてくれない。このごろは検査のたびに結果を怖がるようになったよ。…いつ最終通達が来るんだろう…って。」

「恭介…」

「両親も早く家に帰ってきてほしいからか、自宅でのリハビリを勧めてくるようになったし。もしかしたら両親から次で最後にしてください、とか言われてるんじゃないかと思うと親すら信じられなくなってきた…」

馬鹿だよな…と上条恭介は苦笑いを浮かべた。

悲しげな笑みは乾いた笑い声とともに病室の空気を重くしていく。
それを一人両肩で感じる美樹さやかも暗い雰囲気負けじと花が咲いたような笑顔を作る。

「恭介本人がそんな暗くなっちゃ、おじさんもおばさんも困っちゃうの。恭介が一番良く知ってるでしょ？ おじさん達は恭介が望むこと全てしてあげたいと思ってるはずだよ。それこそ世界中の名医とコンタクト取って、『恭介！ 明日からドイツに行くぞ！』とか突然言い出しちゃうかも？」

「ぷっ！ それってもしかして父さんの真似？ 随分可愛らしい父さんだ。」

「あははっ… やっぱり可笑しかった？」

美樹さやかは低くダンディズムを表現しようとした声色はどうやら上条恭介の笑いのツボに入ったようで、病室だというのに大きな笑い声をあげ、暫くしてもくすくすと瞳に涙を浮かべながら思い出し笑いを繰り返していた。

楽しそうに笑う上条恭介に、美樹さやかも頬を真っ赤にしながらもベッドの下で小さくガッツポーズを結んでいた。

（せめて… 私がいる時だけでも笑顔でいてほしいよ。その笑顔を作るためならなんだって…）

上条恭介の白い左腕も紅く染まる夕暮れの病室。

笑う上条恭介の動きに合わせてしか動かない左腕。

そしてそれを眺めある言葉を思い出す美樹さやか。

近づく心の雨雲に、当然のことながら美樹さやかは気付かない。

『僕は君達の願い事を何でも一つ叶えてあげる。』

第16話 虹色の蝶

物語は10日程進む。

美樹さやかは心に溜まったもやもやを吐き出すように深呼吸を繰り返した。

一つ…二つ…

一向に晴れることのない気持ちに笑顔という蓋をすることにした。今はこの心情を表に出す所ではない、と口をキュツと結ぶ。

「おっはー！ 私がいなくて寂しくしてたかな？ 恭介君？」

そして勢い良く上条恭介の個人病室に、片手をピンと上げながら足を踏み入れた。

その姿はいつもの元気な少女そのものだ。

少なくとも少女の不安を感じさせる要素は見当たらない。

全ては部屋で哀しげな表情を浮かべているだろっ幼なじみの為…

「…」
「えっ？」

しかしその思いも虚しく、上条恭介はちらりと美樹さやかを一瞥するとすぐさま窓の外の景色に目を移す。
何一つ返事を紡ぐことはなかった。

「ど、どうしたの！？ 恭介っ！？」

「…別にどうもしないよ。」

体調が優れないのかと、美樹さやかは急いでベッド脇まで行き文字通り顔色を伺う。

同年代の男の子と比べ些か白い肌ではあるが、血色も悪くなく体調は悪くは無さそうに見える。

…しかし表情には怒気と絶望、そして無気力といった感情が渦巻いているような冷たく歪んだものになっていた。

イヤホンから流れる音楽に感情が高まっていく様子など全く感じられない。

美樹さやかは自然と上条恭介を心配するような表情になってしまう。

「…何聞いているの？」

「亜麻色の髪の乙女。」

「ああっ！ ドビュッシー？ 素敵な曲だね。」

何を話していいか困った美樹さやかは、ひとまず上条恭介と自分の共通の話題である音楽の話振る。

幸い何か音楽を聴いているようなので話を始めやすい話題ではあった。

…しかし上条恭介はぶっきらぼうに答え、その後再び黙りこくって

しまつ。

「あつ、あたしつてさ、こんなだからクラシックなんて聞く柄じゃないだろ、つてみんなが思うみたいでさ。たまに曲名をビシッと当てたらすごい驚かれるんだよね。意外過ぎて尊敬されたりしてさあ… 恭介が教えてくれたから。でなきやあたし、こういう音楽聴く機会なんて一生なかったろうし…」

それでも美樹さやかは話を膨らませようと言葉を紡いだ。

音楽の話題だったからか、自然と上条恭介に感謝をするような話になつてしまふ。

そこでようやく上条恭介は再び重たい口を開いた。

「…さやかはさあ。」

「なに？」

「…さやかは僕をいじめてるのかい？」

「えっ？」

右手で両耳のイヤホンを引つ張り出し、ベッドの上へと投げ出す。そして窓の外を眺めていた顔を美樹さやかへと向けた。

「なんで今でも音楽なんて聞かせるんだ。嫌がらせのつもりなのか？」

「だつ、だつて恭介、音楽好きだから…」

「もう聞きたくなんかないんだよ！ 自分で弾けもしない曲、ただ聞いてるだけなんて！ 僕は！ 僕は…」

ぎりつ、と美樹さやかにも聞こえるほどの歯ぎしりが病室内に響いた。

自由に動く右手ははち切れんばかりの感情を表すように、力強く拳

を形成していた。

もしも爪が丁寧を整えられていなかったら、手のひらを自身の爪が破いていただろう。

「…そうだよな。君は僕と違って歩けるし、学校にも行ける。ヴァイオリンも弾ける…そして僕にはそれが出来ない…」

「ちよっ…そんなこと思ってない…」

「そんなはずないだろ！…じゃなきゃいつも僕に渡すCDは何なんだよ！」

感情に任せて腕を振りかぶり、ベッド脇の机に置かれていたCDプレイヤーを叩き割る。

…動かなくなつた自身の左手をハンマーのように振りかぶって。

CDプレイヤーの破片は飛び散り、そして強く握られた上条恭介の左手首からは真っ赤な液体が零れ落ちていた。

きゃっ！？ と短く悲鳴をあげる美樹さやかを気にすることもなく、上条恭介は自身の動かない腕を包帯ごとかきむしり始める。

「ダメっ！」

「五月蠅い！ こんな腕いらなんだ！ ヴァイオリンが弾けない

…こんな腕なんて…」

ぼたりぼたりと血液がベッドのシーツを朱に染めていく。

それを見て少し落ち着いたのか、俯き顔を逸らした。

美樹さやかの制服にも、上条恭介の暴走を止める際に彼の血液がこびり付いていた。

必死に引つ掻く腕を止めていた為、息も絶え絶えになるほどに体力を消耗していた。

…もしくは、体力よりも精神力を消耗していたからこそそのものかもしれない。

「…さやかは僕の腕が動かないこと知っているよね？」

「…幼なじみだから。」

「それなのに…幼なじみなのに、君がヴァイオリンのCDを持ってくる度に傷ついてたのには気付かないんだね。」

「恭介…」

血が溢れ出す右手を一瞥すると、苛立たしげに左腕の外れかけた包帯で血を拭き取る。

「僕はもうヴァイオリンを弾くことが出来ないのに、こんなもの聞いても苦痛でしかないのに…」

嗚咽を堪えるように深呼吸を繰り返しながら、上条恭介は言葉を紡いだ。

右腕で両目を覆いながら、力無く起きていた上半身をベッドに委ねる。

覆いきれていない口元もぐちゃぐちゃに歪んでいる。

「…もう僕がヴァイオリンを弾く為には奇跡でも起きなきゃ有り得ないのに…そんなことあるはず無いのに…」

「…よ。」

「…えっ？」

上条恭介は幼なじみの一言に思わず顔を見上げる。

その一言は両親や医師が放つ建て前ばかりの言葉でなく、心からの一言だったから。

歪む視界で眺めた幼なじみの表情は、言葉に込めた意志と同じように真摯な瞳で上条恭介を見つめていた。

「あるんだよ…恭介。奇跡も魔法もあるんだよ。」

(どうして私のじゃなくて恭介の腕なの…)

左手を開いては閉じる簡単な動き。

それを呆気なく出来てしまう自分に腹が立つ。

爪が手の平に強く食い込むように握り拳を作る。

血が上った頭でも正常に痛みを感じ、それがまた頭を熱くする。

(私は恭介に笑ってほしい…笑顔を向けてほしい…)

病室のとある空き部屋。

上条恭介と同じタイプの広い個室の部屋に美樹さやかは1人立っていた。

その瞳は1つ決心したように確固たる何かを秘めている。

そしてその思いは一匹の奇獣に注がれていた。

(私が魔法少女になれば恭介は…そして私と恭介は…)

「準備はいいかい？ 美樹さやか。」

美樹さやかは口を堅く結び、力強く頷く。

「それじゃあ、美樹さやか。君の願いを何でも一つ叶えてあげる。さあ、願いを紡ぐんだ。」

触角のような何かが美樹さやかへと近付いていく。

逃げ出さないよう…そして願いをはつきりとイメージ出来るようにギョツと瞼を閉じた。

そして奇跡は叶えられた。

これが美樹さやかの人生を大きく歪める決定打となる。
しかしまだ美樹さやかは知らない。
奇跡を叶える意味と、そしてその代償を…

第16話 虹色の蝶（後書き）

今回は今まで動きがあまりなかったさやかsideの話を書きました。

アニメでもここからさやかをメインに話が繰り広げられますが、それはこの小説でも同じなのか!?

…それは次回以降で分かります。

宜しければ感想などよろしくお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5600s/>

魔法少女の騎士

2011年9月30日13時10分発行